
とある2人と炎髪灼眼

ノラウサギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある2人と炎髪灼眼

【Nコード】

N4096W

【作者名】

ノラウサギ

【あらすじ】

シャナと悠二は学園都市から来たという2人の少年と出会う。しかし2人は学園都市第1位の能力者一方通行と第2位の垣根帝督だった。最強の2人を巻き込んでシャナの世界が幕を開ける！

【本作は灼眼のシャナとある魔術の禁書目録のコラボです。シャナをアニメで見ただけのことのない私ですが精一杯頑張ります。キャラ崩壊の恐れがあるので苦手な方は読まないことをオススメします。

】

2人の少年と紅世の世界

「オイ、どうなってんだよこれは」

「俺が知る訳ねエだろオが」

2人の少年が戸惑いを隠せずに周りを見渡していた。1人はホスト＋ヤクザ予備軍といった感じのそこそ背の高い少年。もう1人は肌も髪も真っ白で細い体つきに赤い目の少年である。先ほどまで彼らは学園都市と呼ばれる場所にいた。暗部の仕事だからということ。ここ御崎市という聞いたこともない街のど真ん中にいたのだが突然街の人間が誰1人として動かなくなつたのだ。まるで世界の時間が止まってしまったように。

『あれー？何でコイツら封絶の中で動いてるの？』

奇妙な声が出たと同時に馬鹿でかい人形と猫のぬいぐるみが2人の前に現れた。

「何だコイツら」

「さアな、お前の能力で作つた物じゃねエのか？」

「こんな悪趣味な物作らねえよ」

「メルヘンのくせにかア？」

『うるさいぞお前達』

人形が突然拳を振り上げる。猫のぬいぐるみも2人に襲いかかった。

ドゴオ！

人形はホスト風の少年を仕止めたと思った。しかし、

「ムカついた。テメエはここで、」

ホスト風の少年の背中からは白い翼が生えていた。さらに猫のぬいぐるみは白髪の少年に一瞬でバラバラにされた。

「何だ何だよ何ですかア？オマエらが一体何なのか知らねエが、」

2人の少年は不気味な笑みを浮かべ、

「「ブチ殺す！」」

封絶の気配を感じ、坂井悠二と『炎髪灼眼の討ち手』シヤナは気配のする場所へ向かっていた。2人は先日狩人フリアグネを討滅しフ

リアグネ配下の燐子の一掃に追われていた。

「フリアグネの燐子だから放っていても消えるのに」

「でも他の人が犠牲になるかもしれないんだよ？」

面倒くさそうなシャナに少し苛立つ悠二。だがそんな2人も封絶の中に入って表情を一変させた。

「どうなっているんだこれ？」

しばらくの沈黙の後先に口を開いたのは悠二だった。建物がめっちゃくちゃに崩れ、道路のアスファルトにはヒビが入っている。燐子が存在の力を集める為だけにここまで街を破壊するだろうか。

『何者かが燐子と戦ったようだな』

シャナの契約した紅世の王、天壤の劫火アラストールが慎重そうな声で言う。シャナもその何者かの気配を感じ取っていた。

「何者かって、他のフレイムヘイズ？」

悠二が尋ねる。しかしシャナは首を横に振った。

「違う。フレイムヘイズの気配じゃない。」

ドオン！

向こうで音が響く。悠二とシヤナは音のした方へ走り出しそして見た。燐子と誰かが交戦しているのを。いや、交戦と言うより一方的な虐殺と呼ぶのが相応しいのかもしれない。

「オイオイ、さっきまでの勢いはどこ行ったんだア？」

『ひいひいひいひい！』

悠二の目に映ったのは燐子をなぶる2人の少年。徒ではなさそうだがただの人間ではないことは一目瞭然だった。

「お前達何をしているの！」

シヤナが2人の少年に叫ぶ。封絶は解けていない為、燐子はまだ生きているらしい。

「ああ？何だこのガキ。コイツらの仲間か？」

ホスト風の少年が燐子を指差す。

「お前達は何？徒じゃないみたいだけど」

「徒？何だよそれ」

シヤナは大太刀の贄殿遮那をしまうとアラストールに尋ねる。

「アラストール、封絶の中で動ける人間なんて…」

『我也聞いたことがないが……』

その時、突然燐子が爆発した。そのすぐそばにいた2人の少年は爆発に巻き込まれるが……

「はア〜もオ壊れちまったかア？」

「一体何だったんだコイツ」

2人は無傷だった。悠二もシャナもその光景に目を見開く。

「君たちは一体何者なんだ？」

悠二が尋ねる。しかし2人はそんな悠二の問いかけを無視してこちらに背を向け立ち去った。

翌日

「聞いたか坂井、あの学園都市から転校生が来るんだって」

池速人が興奮した様子で悠二に話しかけた。

「学園都市って？」

何も知らない悠二はつい聞き返してしまう。

「現代よりずっと科学が進んだ街だよ。何でも話によれば超能力の研究をやっているって」

「ち、超能力？」

昨日の2人が頭を過る。そして朝のHRの時間、この時から坂井悠二とシヤナの運命は少なからず変わっただろう。

「えーと学園都市から来た……」

担任の声を遮り転校生の2人が自己紹介した。

まずホスト風の少年から

「垣根帝督だ。よろしく」

そして白髪の少年が自己紹介をした。

「アクセラレータ一方通行だ」

担任は2人の資料に目を通しながら簡単に述べる。

「彼らは学園都市の中でもとても優秀らしいから彼らの足を引つ張らないように」

そして休み時間、2人はお決まりの転校生への質問攻めに合った。

「ねえねえ学園都市ってどんなところ？」

「超能力使えるの？」

「一方通行君ってどうして白髪なの？」

一方通行は面倒くさそうな顔をする。とさっさと教室を出て行ってしまった。その後の授業を全てサボった垣根と一方通行は寝場所を探す為御崎市の街を歩き回っていた。

「オイ、どこまでついてくるつもりだ？」

垣根が追跡者に尋ねる。建物の陰からシヤナと悠二が出てきた。

「オマエら何の用だ？」

一方通行が面倒くさそうに尋ねる。

「お前達何者？」

シヤナが2人に問いかける。その鋭い視線にも全くたじろいだりしない垣根は深く溜め息をつく。

「言つたる？俺は学園都市から来た垣根帝督って」

「それだけ？」

悠二も険しい表情で尋ねる。どうやら真剣に尋ねているらしい。

「強いて言えば学園都市で7人しかいない超能力者（レベル5）の第2位『未元物質』（ダークマター）ってところかな」

垣根は笑いながらそう言った。

「それって強いのか？」

興味津々の悠二。

「レベル5ってのはたった1人で軍隊を相手にできるって奴のことを言うんだ。俺はつまり学園都市で2番目に強い能力者ってことだ」

垣根が丁寧に説明する。シャナは黙ったままその説明を聞いていたが一方通行を指差して垣根に尋ねた。

「じゃあソイツは？」

「人のこと指差してンじゃねエこのクソガキ」

苛ついた口調の一方通行。ガキと呼ばれたことに腹を立てたシャナは一方通行を睨み付ける。まさに一触即発である。

「ところでさ、アンタら昨日あの妙な現象が起こった時に現れたよな」

垣根の一言に場の空気が変わる。

「なあ、あの現象について何か知ってんのなら教えてくれねえか？」

悠二はシャナの顔を見るがシャナは険しい表情のまま突然封絶を張った。

「！」

「!?!」

一方通行と垣根は目を見開き目の前にいた少女を見る。少女は先ほどとは異なる雰囲気を纏っていた。炎のような赤い髪、赤い瞳。

「まずはお前達の実力を確かめる。それから話すか話さないか決める。」

その言葉を聞いた一方通行が楽しそうな笑みを浮かべる。

「腕試しってヤツかア」

首をコキコキ鳴らしながらシヤナと対峙する。

「待て一方通行、先に俺がやる」

垣根が一方通行の前に立った。黒いコートのような物から大太刀を取り出しながら垣根に視線を向けるシヤナ。一方通行は舌打ちすると物見気分で悠二の隣に立つ。

「さてと、それじゃさっさと終わらせるかな」

「その減らず口がいつまで聞けるかしら！」

「そついやアンタの名前を聞いてなかったな」

「私は炎髪灼眼の討ち手シヤナ！」

シヤナが垣根に突っ込むと同時に垣根の背中から白い翼が発現する。

「さて、お手並み拝見といくか」

垣根帝督はにやりとした。

炎髪灼眼 V S 未元物質（前書き）

このストーリーの設定としてこの段階ではまだ一方通行の能力使用の制限がなく、垣根との仲がそれなりに良いという形で進めていきます。

それではどうぞ。

炎髪灼眼 V S 未元物質

シャナが大太刀を振り上げ垣根に斬りかかる。垣根はそれを白い翼で防ぐとその翼で暴風を起した。

ブオ！

「くっ！」

垣根の起こした風が少女を呑み込む。未元物質は本来この世に存在しない物質を創り出す能力である。彼の翼も能力で創り出したものであるからこの翼から放たれる攻撃が普通のモノであるとは限らない。

「腕試しとか言ってたがそれはこっちも同じことだ。アンタがどれ程のレベルなのか知りたいからな」

余裕の表情で垣根が言う。それはシャナに対する挑発に聞こえた。

「何？今の風……」

ただの攻撃ではなかったとシャナも理解していた。何故か風が『重い』と感じたのだ。

「俺の能力である未元物質は元々この世に存在しない物質を創り出す能力。この翼もその1つだ」

「その翼似合わないわね」

「まあ自覚はある」

垣根が近くに落ちていた鉄パイプを拾い上げ意味ありげに笑った。

「俺の能力は物にも使うことができるんだぜ？」

そう言うなり鉄パイプを握りしめシャナに突っ込んだ。シャナはそれをかわすと再び垣根に斬りかかる。垣根はその攻撃を翼ではなく鉄パイプで受けた。ただの鉄パイプなら贄殿遮那で真っ二つになるだろう。しかし……

ガキイン！！

垣根の鉄パイプは贄殿遮那の一撃を難なく防いだ。しかも鉄パイプには傷一つ付いていない。

「今、この鉄パイプに『絶対に斬られない強度』を加えた。その刀の切れ味がどんなに良くてモイツは斬れねえよ」

「……………っ」

『シャナ、もう少し様子を見るべきだ』

「わかつてる」

アラストールに言われるが頭の中では分かっていた。目の前の男を相手に下手な手は打てないと。

「そろそろ終わりにするぞ！」

バオ！！

そんな2人の様子を坂井悠二と一方通行は少し離れた場所で見っていた。

「メルヘンの奴さつさと終わらせる気はねエみてエだな」

「垣根の能力があんなに強かったなんて……」

相変わらず暇そうな一方通行と垣根の能力に驚きを隠せない悠二。悠二の頭を1つの疑問が過った。隣にいる一方通行にその疑問を投げ掛けた。

「ねえ、君は？」

「あア？」

「君も垣根と同じレベル5ってやつなの？」

一方通行は表情を変えずに素っ気なく答えた。

「あア」

そう言って再び視線をシャナ達に移した。

「うおおおおおおお！！」

シャナと垣根がぶつかり合う。垣根は自身の能力で強化した鉄パイプで攻撃しつつシャナの攻撃を翼で防ぐ。シャナも猛攻を仕掛ける。垣根の翼に攻撃を防がながらも攻撃の手を緩めない。2人の戦いは消耗戦になると思われた。

しかし両者には決定的な差があった。それは経験値の違いである。

『化け物トーチ』こと天目一個に打ち勝ちここまで紅世の徒を贄殿遮那を武器に討滅してきたシャナである。それに対し垣根は学園都市内圧倒的な力を誇り第2位の座を確立させている。しかし能力である未元物質を使用しなければただの人間だ。白兵戦に持ち込まれたらどちらに歩があるかは明らかだった。

「これで終わりね！」

贄殿遮那に炎を纏わせ垣根に放った。

「この俺にこんなものが通用すると思ってるのかよ！！」

垣根は翼で炎を防ぐ。しかし炎を防ぐことに意識を向けていた垣根は翼の陰から突っ込んできたシャナに気づかなかった。

「なっ……！！？（しまった！）」

「やあああああああつ！！！！！」

死角からの攻撃を慌てて翼で防いだがシヤナの一撃に力負けし、吹っ飛ばされビルの壁に叩きつけられた。

ドゴオン！！！！

「チッ、ムカついた」

服についた埃を叩きながら垣根がぼそりと言う。

「お前合格」

シヤナが静かに告げた。しかし言われた垣根は不満のようだ。

「畜生、まだまだ！」

「止めとけ第2位。腕試しのレベルで熱くなってンじゃねエ」

一方通行が垣根に言う。垣根は何のための腕試しかを思い出し笑いながらシヤナに言った。

「まあ合格なら約束通りいろいろ説明してもらっぜ」

「分かった」

シヤナは着ている黒いコートに贅殿遮那をしまつと封絶を解いた。

「ねえ、彼はいいの？」

結局実力を見ずじまいだった一方通行を指差し悠二はシヤナに尋ねる。

「コイツが合格だからいい」

「オイ、コイツ呼ばわりはやめる。せめて垣根って呼べ」

一方通行は自分の出番がなくなり再び退屈そうな顔をした。

「はア〜つまんねエ」

その後、再び学校へ戻り屋上で一方通行と垣根はシヤナと悠二に紅世についていろいろと説明された。徒、フレームヘイズ、自在法といった基本的な内容である。

「つまり俺達にケンカ売ったあの三下どもは隣子ってことかア」

「で、その隣子どもは狩人って奴の使いつパシリだった。そしてあの奇妙な空間は自在法の封絶の中だったって訳か」

なかなか頭の回転の早い2人だった。

「だがその封絶ってのは普通の人間じゃ感知できねエンだろ？」

「うん、だからどうして一方通行と垣根が封絶の中で動けるのか分からないの。ただ2人から妙な気配がするのは分かる」

シャナは2人の顔を見てそう言った。

「妙な気配ねエ。それってAIM拡散力場のことなんじゃねエか？」

一方通行の意見に垣根も納得した表情をする。

「ああ、なるほどな。確かに少しは関係してるかもしれねえな」

この会話についていけないシャナと悠二。

「何それ？」

悠二が2人に尋ねる。

「俺達にみてえな能力者が無意識に放っているエネルギーみてえな物だ」

垣根が2人に説明する。しかし悠二は多少理解した様だがシャナは全くと言っていいほど解ってなかった。

その後、2人と別れたシャナと悠二は帰路を歩いていた。先ほどコンビニで買ったメロンパンにとびきりの笑顔で噛みつく少女の隣を歩いていた悠二がアラストールに問いかけた。

「ねえアラストールどう思う？」

『うむ、超能力者等という人間を見たのは我も初めてだ。フレイムヘイズとも徒とも異なる未知の存在といったところか』

「それにしても垣根ってなかなか強かったね」

メロンパンを頬張っていたシャナの手がピタリと止まった。

「はあ、帰ったら鍛錬か……。垣根の能力が羨ましいよ」

『鍛錬してくれと頼んだのは誰だと思っているのだ。そんなことでは先が思いやられる』

「それでも少しは羨ましいって思うよ」

そんなことを呟く悠二を余所にシャナの目付きは真剣なものになっていた。

「アラストール、感じる？」

『うむ、他のフレイムヘイズの様だな。しかし我らが先にここにいと分かれば立ち去るだろう』

「ああ、もうっ。屍拾いの奴、厄介な所に逃げ込んでくれたわね！」

『ヒヤハハハハ！まあそう怒るなよ。我が麗しのゴブレット、マージョリー・ドーよ』

あるビルの屋上で眼鏡をかけた金髪の女性が御崎市を見渡していた。その右腕には大きな本を抱えている。

「ねえ、マルコシアス。この気配何だと思う？徒とフレイルムヘイズとあと2つ……」

『さあな、俺もこんな気配は知らねえ。徒とフレイルムヘイズ共々消しちまえばいいんじゃないかねえのか。ヒヤハハハハハハハ！』

「確かにそうね。ちょうどすぐ近くに奇妙な気配が1つあるし」

そう言うとフレイルムヘイズ、マジヨリー・ドーは封絶を張った。

さらに気配のする場所の真上まで移動すると真下にある謎の気配に炎弾を三発ほど放った。

ドガア！

建物が崩れる。マジヨリーは崩れた建物の傍まで移動し気配の正体を探す。

「ッたく、コーヒー買いに來ただけだっつーのによオ。随分と馬鹿みたいな三下が現れたもんだなア」

瓦礫の中から白髪の少年が無傷で出てきた。一方通行である。彼は周りの様子を見て封絶の中であることを悟る。

「封絶かア……。オマエ、フレイルムヘイズって奴か？」

一方通行は無表情のまま問いかける。

「なあんだ、ただの口の悪いガキじゃない」

『ヒヤハハハハ！コイツは喰いごたえがありそうだぜ！』

マージョリーは余裕の笑みを浮かべた。しかしその瞬間、巨大なコンクリートの塊が凄まじい速度でマージョリーに向かって飛んできた。

「なっ！？」

『ああ！？』

炎弾を放ちコンクリートを破壊するが動揺は隠せない。

「人の話を無視してんじゃねェよ」の三下

一方通行は不気味に笑うとマージョリーと対峙した。

「へえ、なかなかやるじゃない」

マージョリーは手に持っていた本、『グリモア』を開き戦闘態勢に入った。

最強の超能力者

封絶の中で対峙するフレイムヘイズと超能力者。片や戦闘狂の異名を持つフレイムヘイズ、片や白髪の得体の知れない少年。普通のフレイムヘイズや能力者ですらその場から逃げ出す程のピリピリとした雰囲気は漂っていた。

「マルコ、さつさと終わらせるわよ」

『ヒヤハハハハ！少しは楽しめるといいんだがな！！』

先手を打ったのはマージョリーだ。一方通行に炎弾を撃ち込む。群青色の炎弾がコーヒーの入った袋を片手に余裕の表情を見せる少年に向かって飛ぶ。

「こんなもんがこの俺に効くとも思ってたのかア？」

「！」

放った炎弾が跳ね返り自分の方へと飛んできたのだ。自らの放った炎弾にさらに新たに炎弾を放って相殺するがさすがに動揺は隠せないようだ。

（今、私が撃った炎は確かに当たったはず……）

マージョリーは一方通行が何をしたのか確かめる為、さらに4発の炎弾を放った。しかし、

「オイオイ学習能力つてのがねエのかこのババア。そんなンじゃい

つまでやっても変わんねエよ」

一方通行の余裕の声が聞こえたかと思うと炎弾の全てが再び自分に向かつて飛んできた。マージョリーはそれを軽々と避けるがその表情に余裕はなかった。

(コイツ何もしていなかった?)

一方通行は立っているだけだった。炎弾が迫っても余裕の笑みを浮かべたまま一步も動いてなかったのだ。

『オイ、マージョリー。コイツは予想外の展開ってヤツじゃねえか?』

マルコシアスの問いかけにも彼女は答えなかった。

「さアて問題です。この俺、一方通行は一体何をしたでしょオカ?」

残虐な笑みを浮かべながら一方通行は落ちていた小石を軽く蹴った。しかし軽く蹴られた小石のハズなのに先ほどマージョリーが放った炎弾より速い速度でマージョリーの傍を通過し、彼女の後ろに停めてあった車に直撃した。

ドゴオン!!!!!!

車は爆発し火柱が上がった。しかしマージョリーはそちらには目も

くれず鋭い視線で一方通行を睨み付けていた。

「アンタ、何者？」

マージョリーは徒でもフレームヘイズでもないこの少年に訊ねた。

「テメエの耳は何の為に付いてんだ？飾りにしては目立たねエな」

一方通行は余裕の笑みから面倒くさそうな表情をする。

「さつき、一方通行って言ったわよね？」

「あア？聞こえてンじゃねエか」

「アンタもしかして学園都市にいたんじゃない？」

マージョリーは以前ある徒を討滅するために学園都市に入ったことがあった。その時、街で会った能力者に一方通行という名前を聞いたのだった。

『ああ、なあゝるほど。コイツはあの奇妙な街の人間ってことか』

マルコシアスが納得したように呟く。しかしマージョリーは一方通行の名前を聞いただけであり人物、能力については何も知らなかった。

「だから何だつてんだ？」

「別に、ただアンタが私の攻撃を防いだことは理解するわ。学園都

市産の超能力といったところかしら。封絶の中で動けるのも納得がいくしね。確か…… A I M 拡散力場だったかしら？」

「随分とお喋りな三下だなア」

「少しは人の話を聞いたらどうかしらこのガキ」

そう言いながらもマージョリーは答えを探していた。この少年の能力が何なのかを。攻撃を跳ね返すこの少年に攻撃を当てるにはどうすればいいのかという打開策が見つからなかった。

『確かあん時も能力者って奴に絡まれたんだったよなあ。あの時は大変だったぜ』

マルコシアスが思い出したように言う。一方通行は何故かうんざりしたような視線でグリモアを見た。

「うるせエ本だな。綺麗な紙吹雪みたいにされたくなかったらちつたア黙ってる」

『言うねえ。コイツはホントに喰いがいのある奴だなあオイ！ヒヤハハハハハハハ！』

マルコシアスはマージョリーとは違ってこの状況を楽しんでいるようだ。

「マルコ、本気でいくわよー！ー」

『了解だぜ相棒！！』

マージヨリーは獣型の衣『トーガ』を纏う。すると数体の分身が現れた。群青色の獣が一方通行を取り囲むが一方通行の表情は変わらない。

「全方位からの攻撃なら少しは効くんじゃない？」

「そオ思つのならやってみる三下が」

ブオオ！！！！

マージヨリーの攻撃は全方位から一方通行を襲った。さらにマージヨリーは新たに自在法を発動させる。群青色の炎の槍が雨のように一方通行に降り注ぐ。しかし結果は同じだった。

「！」

『！』

全方位からの死角のない攻撃は全て跳ね返り本体を含め全てのトーガにヒットした。

「ぐっ……………、何で！？アンタ、一体……………」

『しっかりしろマージョリー！来るぞ！』

マージョリーが気づいた時には目の前に一方通行の拳と彼の一言が耳に入った。

「あばよ三下」

ドゴオン……

頬に一方通行の拳を食らった弔詞の詠み手は数メートル飛ばされその体はビルを貫通し、そして見えなくなった。一方通行は先ほどマージョリーとの間合いを詰めた際に投げ捨てた缶コーヒーが何本も入ったビニール袋を拾い上げる。

「ッたく、学園都市並みに退屈しねエ街だな」

吐き捨てるように言つとその場を後にした。

『見事にやられちまったな相棒』

「前に学園都市で会った麦野っていう能力者もそうだったけど得体の知れないのよねあの連中。あんな細い腕してるくせにこのパンチ力、やってらんないわね」

瓦礫の中から出てきたマージョリーは殴られた頬をさすりながら溜め息をついた。

「まったく、レディーの顔を殴るなんてどういう神経してんのかしら」

『ヒヤハハハハ！戦闘中にぼーっとしてっから殴られたんじゃねえか。だからあのガキに三下とか言われんだよ。えっ、我が親愛なる契約者マージョリー・ドーよお。ヒヤハハハハハハ、ぐへっ！』

「おだまり馬鹿マルコ」

マージョリーはグリモアを殴りつけマルコシアスを黙らせた。

「……！マルコ」

『ああ、フレイムヘイズともう一匹の気配だ。気配のからしてこいつも能力者かもしれねえな』

「冗談じゃないわ。あんな奴と戦った直後にフレイムヘイズと能力者だなんて。ここは一旦退くわよ」

『そうした方が良さそうだな』

そう言うとマーシヨリーは存在の力で街をある程度修復しグリモアの上に乗るとすぐにその場を後にした。

続・最強の超能力者

一方通行とマージョリーが戦っている頃、封絶の気配を感じたシヤナと悠二は帰路を引き返し現場へと向かっていた。

『あのフレームヘイズ、どうやら立ち去らなかった様だな』

「そのフレームヘイズが封絶を張ったってことは徒が現れたってことかな？」

走りながら悠二が尋ねる。しかしシヤナは首を横に振った。

「いや、多分……」

答えようとした時、正面の建物の陰から垣根が走って行くのが見えた。

「垣根！」

シヤナの声に垣根は振り返る。あまりにも大きな声で呼んだため近くを歩いていた通行人から注目を浴びるがそんなことを気にしている場合ではなかった。

「あ？シヤナに悠二じゃねえか」

垣根も封絶の方へと足を進めていた。シヤナが垣根に事情を聞くと一方通行はコーヒーを買いにコンビニへ出かけたらしいのだがその直後に彼の行った方で封絶が張られたのが見えたというのだ。

「じゃあ例のフレイムヘイズの相手って……」

悠二が言いかけて口をつぐむ。その後に出てくる名前など分かっているからだ。

「間違いない、一方通行よ」

3人は封絶へと急ぐ。封絶の中に入るとシャナの髪や目の色が紅蓮に染まった。向こうの建物からは時々群青色の閃光が見える。

『群青色の炎……!』

「アラストール、知ってる奴？」

『恐らく蹂躞の爪牙マルコシアスと弔詞の詠み手マージョリー・ドーの様だな。奴等は己の闘争心を満たす為だけに戦う、いわゆる戦闘狂だ』

「えっ!? それってヤバいんじゃない?もしかしたらもう一方通行と戦ってるんじゃない?……」

悠二が戸惑うように言う。確か一方通行は垣根と同じレベル5だと悠二に話した。しかしその実力をまだシャナも悠二も知らない。

「アイツなら心配ねえよ」

垣根がそう言って少し表情を曇らせた。

「どうして? 垣根は第2位の能力者なんですよ? 垣根より弱い奴がフレイムヘイズ相手に戦える訳ない」

シヤナがきつぱりと言う。遠回しに垣根「弱い」という風に言っているが垣根はそれをスルーした。

「違う。2人はアイツの能力を知らねえ。知ってたならそんなことは言えねえからな」

「え？それって……」

悠二もシヤナは悟ったようだ。

「ああ、アイツは学園都市に7人しかいないレベル5の頂点、学園都市最強の能力者だ」

3人が到着した時にちょうど封絶が解けた。その5分後、左手にコンビニのビニール袋を持った一方通行がこちらに歩いて来るのが見えた。

「よお、コーヒー買うのに馬鹿に時間がかかったな」

コンビニ袋に少しではあるが埃付いているのを指差して垣根がわざとらしく言う。

「ああ、随分と面白エ三下と暇潰しをしていただけだ」

そう言いながらも退屈そうな表情の一方通行。

「どんな奴だった？」

シヤナが問いかける。一方通行はビニールから缶コーヒーを取りだし一本開けると

「馬鹿みてエな笑い方をするでけエ本を抱えた女だ」

そう言ってコーヒーを飲む。

「ねえアラストール」

『間違いない。弔詞の詠み手と蹂躪の爪牙だ』

「でもコイツには傷1つ付いてない」

『……………』

「ねえ、一方通行の能力ってどんな能力なの？」

悠二が訊ねる。一方通行はもうコーヒーを飲んでしまったらしく空になったアルミ缶を握り潰すと悠二からの問いかけに答えた。

「俺の能力の名は一方通行だ^{アクセラレータ}」

「は？え、えつと……………」

「そもそも一方通行ってのは俺の名前じゃねエ。名前なンざとつくに忘れちゃった。他の連中がそオ呼ぶだけだ」

「そんなことはいい。お前はどんな能力を持つてるの？」

悠二ではなくシャナが訊ねる。

「俺の能力は『ベクトル操作』。俺が触れているあらゆる物のベクトルを操ることができる能力だ」

それはつまり運動量、熱量、電気量といったベクトルを持つ物なら触れただけで操ることのできる力である。しかしベクトルという言葉に馴染みのないシャナと悠二は首を傾げる。

「その能力が学園都市で一番なのか？」

「なんかよく分かんない」

悠二もシャナも想像がつかないらしい。一方通行は溜め息をつくと言葉を潰した缶コーヒーを悠二に投げ、背を向ける。

「それを俺に投げてみなア」

「えっ？でも……」

「さっさとしろ」

一方通行に言われた通り悠二は缶コーヒーを一方通行に投げる。缶は一方通行に当たる直前に跳ね返り悠二に向かって飛んできた。

「うわっ！」

「ベクトルつてのは向きと大きさのことだ。今俺は生活するのに必要な物以外のベクトルを反射してる訳だ。だから炎だろオが核ミサイルだろオが直撃しても傷1つつかねエ」

悠二もシヤナも驚きで言葉を失った。理由は1つ、目の前にいる少年の能力が最強と呼ばれる力であると理解したからだ。弔詞の詠み手が戦闘狂と呼ばれる程の実力者でもそう簡単には倒せないと思った。

「それで弔詞の詠み手は？」

シヤナが今、一番気になっていたことを訊ねた。

「あの三下ならどっか行っちゃまった。今頃その辺をふらついてンじやねエのか」

「ああ、もうっ！イライラするわね！」

『まあまあ落ち着けよ相棒』

「落ち着ける訳ないでしょ！この私があんなガキに負けたのよ！？屍拾いの奴も見つからないしホント最悪」

マージョリーは苛ついた表情を見せながら路地裏を歩いていた。

『で、今夜はどこで寝るんだ？適当に男でも作って泊めてもらうか？』

マルコシアスがそう言った時、制服を着た2人の少年が大勢の不良に囲まれているのが見えた。1人は愛嬌のある顔をした大柄な少年、もう1人は不良っぽい華奢な美少年だった。もともとイライラしていたマージョリーはそのストレスを発散すべく不良達に突撃していく。

「アンタ誰だ？」

少し不良っぽい顔の美少年が訊ねた。結局、1人で不良達を壊滅させたマージョリーは結果として2人の恩人の様な形になった。

「あらあら、助けてあげたんだからお礼くらい言ったらどう？」

「別に助けてくれなんて頼んだ覚えはねえよ」

不良っぽい美少年はそう言って顔を背けたが愛嬌のある顔をした少年は

「あ、ありがとうございます。あの、アナタを姐さんと呼ばせてください」

「別にいいわよ。そうだ、ねえアンタ達ちょっとこれから私の仕事に付き合ってくれない？」

マージョリーはこの街に逃げ込んだ『屍拾いラミー』という徒を追

っていた。迅速かつ効率的に討滅するには土地勘のあるこの街の人間の協力が必要なのだ。

「え？いいですけど……」

「アンタ達の名前は？」

先に愛嬌のある少年が名乗った。

「俺は田中栄太」

「俺は佐藤啓作だ」

続いて美少年。見た目によらず素直な性格らしい。

「栄太と啓作ね。私はマージョリー・ドー。コイツはマルコシアス。」

『よろしくなあご両人。ヒヤハハハハハハハハハハ！』

驚く栄太と啓作を無視してマージョリーは話を進める。

「コイツのことと仕事のことについては後で説明するわ。その前に

……」

そう言って考える様な仕草を取ると2人に訊ねた。

「まず酒が飲めて広くてくつろげる場所知らない？」

御崎高校の昼休み

吉田一美はクラスの中でも比較のおとなしく内気な少女である。翌日、御崎高校へ登校途中の悠二とシヤナは『たまたま』彼女と出会った。まるで謀ったかのようなタイミングで曲がり角から出てきた一美に鋭い視線を向けるシヤナ。

「お、おはようございます坂井君、ゆかりちゃん」

シヤナの視線など気にせず挨拶をする悠二。

「おはよう吉田さん」

挨拶を返された内気な少女は可愛らしい笑みを浮かべて去っていった。2人が学校に着くと校門の前で一方通行と垣根が生活指導担当の教師に説教を食らっていた。制服のボタン全開でその下に白地にグレーのラインの入った服を着ていた一方通行は街で不良に絡まれ全員病院送りにしたのである。否、病院送りにしたというより勝手に勝手になったというのが正しいのかもしれない（ベクトルを反射している為、彼を殴った不良の手首が有らぬ方向へ折れたのだ）。垣根もまた朝っぱらから不良とケンカし（本人曰くムカついたから）全員病院送りにした。登校2日目教師に説教を食らう生徒は珍しくはない。しかし登校2日目という前に2人はこの街に来て2日目なのだが（当然ながら2人とも話は聞いていない）。

「おはよう、垣根に一方通行」

悠二が挨拶すると垣根は説教している教師を無視し悠二の方を向いた。

「おーす、悠二にシヤナ」

一方通行はというと目を閉じたまま動かない。立ったまま眠っているのだろうかと思うほどだ。説教は終わったらしく生活指導担当教師は職員室へと戻っていった。しかし一方通行はそこに立ったままだ。シヤナ達が首を傾げていると目を開けた一方通行はシヤナ達と目が合った。

「よオ」

「もしかして寝てたの」

シヤナの問いかけに一方通行は首を横に振った。

「面倒だったから耳に入ってくる音を反射してただけだ」

要は何も聞いてなかったのかと苦笑いする悠二。4人はすぐに教室へと向かった。

「頭痛い〜！割れる〜！頭の中で星がぐるぐる回ってるう〜！」

単語の詠み手マージョリー・ドーは佐藤家のソファアの上で二日酔いに苦しんでいた。啓作の家で居候することになったマージョリーは栄太と啓作に紅世について説明するついでに盛大に酒盛りを始め、

この有り様である。

『大して酒に強くねえ癖にあんなに飲むからだ。我が泥酔なる天使
マージョリー・ドーよお。ヒヤハハハハハハハハハハ！ぐへっ！』

「うるさい馬鹿マルコ！耳元で大きい声出さないでよ！！」

枕代わりに使用したグリモアを殴りつけうるさい契約者を黙らせる
マージョリー。戦闘狂と呼ばれる彼らだが今はその欠片すらない。

「大丈夫ですか姐さん」

声をかけたのは栄太だ。結局一晩紅世について説明された啓作と栄
太はマージョリーの酒盛りにつき合わされる羽目になったのだ。

「マルコシアス頼む！姐さんを楽にしてやってくれ！」

『ダメだダメだ。ここで甘やかしたらまた調子に乗るぜ？』

「馬鹿マルコ！殺す！」

マージョリーはわめくがマルコシアスはそれを楽しんでいる様だ。
啓作は溜め息をつくとマージョリーの傍にコップ一杯の水をテーブ
ルに置く

「じゃあそろそろ学校行くんで」

「おい姐さんを放っておくのかよ？」

「俺達がいたところで二日酔いは治りやしねえよ」

『コイツはいつもこうなんだよ。今に始まった訳じゃねえから気にせず行きな』

栄太は少し躊躇いながらも啓作の後を追った。

「おい！垣根に一方通行！お前らちゃんと授業を受けろ！」

転校してからまだ2日なのにも関わらず職員室でも噂される不良少年、一方通行と垣根帝督はともに授業を受けていなかった。彼らは登校初日に授業をサボり朝っぱらから不良を病院送りにして説教された2人である。さらにケンカを売ってきた上級生を振り返りにしするなど2人の評判は学校中に広がっていた。

「面倒臭エ……………」

眠たそうな表情の一方通行。垣根に至っては授業中に音楽プレイヤーで音楽鑑賞中である。

「お前達この問題が解けるのか？」

数学の授業担当の教師は黒板をバシバシ叩きながら問いかける。しかし一方通行は表情ひとつ変えず、

「そんな問題解けるに決まってるだろオが」

垣根も、

「楽勝だな」

こんな調子である。最も学園都市で頂点に君臨する彼らは能力使用の際に高度な演算を行っている。彼らにとって理数教科はお手の物なのだ。悠二は隣に座っているシャナを見る。シャナもシャナでまともに授業を受けている様子はなく、ムスツとした顔のままだ。悠二は深々と溜め息をついた。

気づけば昼休みの時間となっていた。悠二とシャナ、池、一美は机をくっ付ける。相変わらず悠二はコンビニのおにぎり、シャナはメロンパンである。

「俺たちもいいかー？」

栄太と啓作、緒方真竹も弁当片手にその輪に混ざった。

「ねえ垣根も一緒に食べない？」

池が一人でカップラーメンをすすする垣根に声をかける。学校に来て昼食がカップ麺ってどうよ、と思うメガネマンこと池速人。垣根は池に視線を移すと

「いや俺は遠慮する」

そう言いながら具材の肉を口に入れた。池としては垣根や一方通行に学園都市についての話を聞きたかったというのもあり少し残念そうな顔をした。

「あ、あの……坂井君っていつもコンビニのおにぎりなんですね
少し顔を赤らめながら一美が言う。

「まあね、母さんにいろいろ言われてるんだ」

笑いながらコンビニおにぎりを頬張る悠二。そしてこの場にはない少年のことを口にした。

「ところで一方通行は？」「ああ、アイツなら一人で屋上で飯食ってたぞ」

啓作が思い出したように言う。昼食を済ませた悠二とシャナの2人は屋上に様子を見に行った。そこでは一方通行が屋上から見える御崎市の景色を眺めながら缶コーヒーを飲んでいた。

「何してるんだ？」

「よオ坂井に炎髪か……見ての通り飯食ってんだよ」

ぶっきらぼうに答えると串に刺さった唐揚げを頬張る。

「どうして一人で食べてるの？」

「オマエの知ったことじゃねエだろ」

そう答える一方通行が悠二にはどこことなく寂しげに見えた。

「用がねエならさっさと消えろ」

一方通行はそう言って空になった缶コーヒーを握り潰す。2人はその場を後にした。

「アイツのことなら気にすんなよ」

屋上の物陰から垣根が出てきた。

「アイツはいつもああなんだ。自分の力で他人を傷つけるのが恐いのさ。だから友達も作らない、まあ同じレベル5の俺は別だがな」

「どづいつこと?」

シヤナが訊ねると垣根は一方通行の過去について語った。幼い頃、能力の制御ができず周りの人間を傷つけ軍隊を敵に回しても傷1つつかなかった。大人達は彼を指差して言った。『化け物』と。学園都市に行っても研究所を転々とした、そんな過去が今の一方通行を作っているのだと垣根は言った。

「俺も似たようなモンだ。だからアイツの気持ちはよく分かる」

キーンコーン

その時、昼休み終了のチャイムが鳴った。

「さて、また面倒な授業を受けますか」

垣根は笑いながら階段を降りて行った。2人が振り返ると屋上で天を仰ぐ白髪の少年の姿がとて小さく見えた。

銀色の炎を持つ徒

家に帰った啓作は栄太と共にマージョリーの様子を見に行った。ドアを開けると何かがぶつかる音と『あ痛っ!?!』という声が聞こえた。ドアの傍にグリモアが落ちていたのだ。

「マルコシアス?何でこんなところに?」

『おお、帰ってきたのかご兩人。親愛なる契約者マージョリー・ドーは今安らかに眠っているところだぜ』

栄太はグリモアを拾い上げるとマージョリーが眠っているソファアの傍のテーブルの上に置く。

『ありがとよ。コイツさつき寝ぼけて俺のこと投げやがったからな』

「なあマルコシアス」

啓作が真面目な顔で訊ねた。マージョリーから紅世について聞かされた時からずっと疑問に思ってたことだ。

「フレイルムヘイズってのは復讐者なんだろ?じゃあマージョリーさんも紅世の徒に大切な人を奪われたのか?」

『オイオイ気になるのか?』

「……………」

『なら見せてやるよご兩人』

啓作と栄太が「え？」と聞き返す間もなかった。まず2人の目に映ったのは炎。辺り一帯が燃えている。その中に銀の炎を吹き上げる西洋の鎧が立っていた。鎧の隙間から虫の足が這い出し、まびさしからは無数の目が嘲笑に染まった目を覗かせている……………。

「……………っ!？」

2人がハツとした時、マージョリーが腕を組んで仁王立ちしていた。

「馬鹿マルコ、アンタ何勝手なことしてんのよ」

そう言っつてグリモアに拳をぶつけるマージョリー。

『いいじゃねえか我が怒れる淑女マージョリー・ドー。俺だつて久しぶりにこのご両人と語りたい気分なんだよ』

溜め息をつくマージョリーに栄太が訊ねた。

「今の奴が姐さんの大切な人を？」

マージョリーは無言のまま首を横に振った。

「あの銀の徒はどうなつたんですか？」

啓作がマージョリーに訊ねるが代わりにマルコシアスが答えた。

『まだ見つからねえ。俺が現世こいしちに渡ってきた時には奴はすでに姿を消してた。徒つてのはそれぞれ炎の色が違っんだが銀色の炎なんて聞いたことがねえしな』

「姐さん！俺どこまでもついていきます！」

突然栄太が宣言した。唐突な宣言にマージョリーは目を丸くして栄太を見てそして軽く笑った。

「銀の前にまずはこの街にいる屍拾いの奴からよ。この前は邪魔が入ったし他にフレームヘイズがいるみたいだし面倒だけどね」

彼女の脳裏に一瞬、あの白髪の少年の姿が過った。どんな攻撃も跳ね返すあの少年。

「はあゝ厄介ね」

マージョリーは深々と溜め息をついた。

「いい？しっかり相手の『殺し』を感じて」

坂井家の庭でシヤナと悠二が鍛練をしていた。勿論悠二がシヤナに頼んだからである。

ドガッ！

「痛っ！」

シヤナの振り回す棒を避けきれずに頭に思い切り攻撃を食らってその場に倒れる悠二。アラストールが呆れた声で言った。

『まったく、何度言えば分かるのだ。目を閉じるなど先ほどから言っているだろう』

「全然進歩してない」

シヤナも持っていた棒を置くと溜め息をつく。

「そんなこと言ったって……」

「なかなか面白いことやってるな」

気づくと庭の扉に垣根が座っていた。頭を押さえてうずくまる悠二をニヤニヤしながら見ている。

「垣根はそんなとこで何してるの？」

シヤナが垣根に鋭い視線を向ける。

「そう睨むなよ。まったくフレームヘイズってのはどいつもこいつもそうなのかアラストール？」

『……………』

垣根はアラストールと直に話すのは初めてだったがまるで仲の良い友人に声をかけるように訊ねた。が、アラストールも何も答ええない。垣根はやれやれと言いたげな顔を見ると悠二に視線を移す。

「アンタも大変だな。零時迷子のミステスってのはこんなこともしなきゃいけねえのか？」

『こやつが頼んだのだ。我らが強制した訳ではない』

ふーん、と曖昧な反応をすすると思い出したように言った。

「そう言えばさ、昨日一方通行に奇妙な奴に会ったって聞いたんだよ」

「奇妙な奴？」

悠二が聞き返す。

「なんか杖をついた老人だとき。変わった名前だったから紅世の徒じゃねえのかって」

「そいつの名は？」

「確か…………『屍拾いラミー』とか言ってたか？」

「！」

『！』

垣根の発したその名にシヤナとアラストールが反応する。

『屍拾いだと？彼を一体どこで？』

「あ？一方通行の話だと俺達が屋上から立ち去った後らしいぜ？」

『あの戦闘狂の狙いは屍拾いラミーか………！』

シヤナも険しい表情だ。悠二も垣根も「え？誰それすごいのか？」と今にも言い出しそうな顔をする。

「ラミーは消えかけのトーチしか喰わないの」

『長い間、奴が溜めてきた存在の力は膨大だ。奴が消えればその存在の力が行き場をなくし世界のバランスにかなりの影響を与えるだろっ』

「つまり一触即発の核弾頭ってワケかア？」

気づくと垣根が座っている塀から一方通行が顔を出した。

「あ、一方通行！？どうしてここに」

「オマエ達の会話が聞こえたただけだ。ツたく声がでか過ぎンだよ」

やれやれといった様子の一方通行。しかし話が理解できているのは

シヤナ達にとっては大きい。

「とにかくやることは一つ」

シヤナが険しい表情のまま呟く。彼らはこれから屍拾いラミーを見つけないければならない。しかも戦闘狂であるマージヨリーより早くだ。

「よりもよってこれからかよ。ホント退屈しねえな」

垣根は楽しそうに笑ったがシヤナは首を横に振った。

「今から探しても見つかる可能性は低すぎる」

「じゃアどオスンだ？」

一方通行の問いかけに悠二が答える。

「弔詞の詠み手もラミーの場所はまだ分かってないんだろ？なら待っていれば気配察知の自在法を使うはず。僕たちが動くのはその時だよ」

なかなかの案だと感心する2人のレベル5だったがシヤナがその考えに反論する。

「でもラミーの戦闘力は0に等しいのよ？相手が動くのを待ってたら間に合わない」

シヤナの意見を聞き考えをまとめた垣根が発言する。

「なら一方通行、俺、シヤナと悠二の三組に分かれてそれぞれのエリアで待機つてのはどうだ？」

マージョリーが気配察知を使用し、ラミーの場所が分かった時点で一番近い者がマージョリーと交戦するというのが垣根の考えだった。

「まア学校なんてつまんねエとこに行くよりはマシだ」

なんだかんだで今日の午後の授業を全てサボった一方通行。出席日数大丈夫かよコイツと変な心配をしながら一方通行を見る悠二。

「シヤナと悠二は学校に行くだろうから俺と一方通行で何とかする」
垣根がにやにやしながら言う。垣根も暴れたくてうずうずしていたのだ。

「さアて愉快的な三下狩りを楽しむとするかア」

翌朝、マージョリーは啓作と栄太が御崎市の廃デパートの高層階で発見したある宝具を前に不気味な笑みを浮かべていた。

「玻璃壇ねえ……狩人の奴いいもの残してくれたじゃない」

彼女の目の前にある宝具、それは狩人フリアグネの所持していた銅鏡型宝具、名を『玻璃壇』という代物であった。これは周囲の物体を集めて巨大な箱庭を形成し一定区域（今は御崎市）の人間と存在の力を監視する物だ。

『これで屍拾いのクソ野郎を見つけられるぜ』

マージョリーは啓作と栄太に護符を渡す。

「これで私と連絡が取れるからこの玻璃壇を見ながら私に屍拾いの場所を教えなさい」

そう言うなりマージョリーはグリモアに乗って廃デパートの屋上へ昇ると気配察知の自在法を使用した。

「姐さん！反応がありました！そこから東の方向……ってあれっ！？」

「どっしたのよ？」

「反応が……消えた？」

護符から栄太の戸惑う声が聞こえてくる。

「もう一度使うから今度は見失うんじゃないわよ？」

「動いたな」

『あア、だが俺達より坂井と炎髪の方が近エ。』

それぞれ担当のエリアから携帯で連絡を取り合っていた一方通行と垣根（当然ながら学校はサボリである）は空を見上げて行動を開始した。

通常の間人は紅世に関わる物に干渉はできないがこの2人は違う。封絶の中で動けるし徒だつて見え気配まで感じ取れる。（あくまで少しである）それは2人が放つAIM拡散力場が原因なのだが詳しいことはまだ分かっていない。

「……………！悠二」

学校で授業中だったシヤナと悠二も自在法の気配を感じ取っていた。シヤナは悠二が何か言う前に立ち上がる。

「ど、どうした平井？」

びくびくしながら先生が質問する。

「私体調が悪いから早退する」

そう言うなり悠二を引っ張って教室を出て行ってしまった。その出来事を啞然としたまま見ていたクラスメイト＋先生。もはや授業どころではなくなっている。「平井いいいいいいいいいい！どうしてくれるんだよこの空気を！！」そう言いたい、先生の心の叫びであった。

シヤナと悠二は学校を出るとマージョリーの気配察知の自在法を利用してラミীর場所へと急ぐ。

「……………！」

2度目の気配察知の自在法が発動した。しかもラミীর気配は先ほどの場所からさらに数km離れた場所にあった。

「ラミীর移動してる！」

『なんとという速さだ』

これでは追っても追っても追いつくはずがない。マージョリーが追撃に苦戦するのも頷ける。

「ねえシヤナ！これじゃあ僕らも甲詞の詠み手と同じなんじゃないかな？」

悠二の言葉にシヤナは足を止める。

「ラミীরこんなに速く移動できるのならとっくに逃げ切れてるはずだよ。つまり自在法が何かで動きを攪乱してるんじゃないかな？」

『なるほど』

「じゃあ……………！」

シヤナが何か察したようだ。悠二が自信の籠った声で言った。

「リミィー自身は動いていない！」

「……………ッ！」

その時、建物の向こうで封絶が張られたのが見えた。

蹂躪の爪牙マルコシアス

封絶を張ったのはマジヨリーだ。ラミーの気配のトリックを見破ったのだ。きっかけは啓作の一言だった。

「なあマジヨリーさん、トーチって人間以外にいるのか？」

「はあ？いるわけないじゃない」

「いや……………鳥が……………鳥が映ってるんですけど」

「鳥のトーチですって？」

ホントだ、という栄太の声も聞こえる。玻璃壇に鳥が映ってるのは本当らしい。

『おいおい玻璃壇がイカれちまつたってか？』

マジヨリーは少し考えると

「なるほどね……………そういうことか。啓作！栄太！鳥がどの方向へ向かっているか教えなさい！」

マジヨリーは気づいたのだ。屍拾いラミーがどんなトリックを使用していたのかが。町中のトーチに寄生させた自らのダミーを巧みに利用し自らの気配を移動させる。そうすることで気配察知の自在法を誤魔化すことが可能だったのだ。

『ちょこまかしゃがって……………！本当にムカつく野郎だなオイ！』

マルコシアスが怒りを露にする。しかし、トリックが分かってしまった以上、惑わされることはない。

「姐さん！鳥は美術館の方へ向かっています」

栄太の声を聞くと同時にグリモアは美術館の方へと進んでいた。

『あくイライラするぜ』

「啓作、栄太。今のうちに言っておくわ」

「？」

「ありがとう。この仕事が終わったらこの街を出ていくわ」

護符から2人の戸惑いの声が聞こえる。それを聞いてマージョリーは軽く笑う。

「だから姐さん、俺達も一緒に……」

「ダメよ」

栄太の言葉はマージョリーのぴしゃりとした一言に遮られる。

「徒なんて生きてる内はなかなか会わない。むしろ会わない方がいいのよ」

『じゃあなご両人。残りの人生に幸あれヒャーツハハハハハハハハハハハハハハ！』

マルコシアスの笑い声を最後に護符から声はもう聞こえなかった。

「勝手すぎんだよ……人のこと使っただけ使っというよ……マ―
ジヨリーの馬鹿野郎が……」

クシャツという音がした。啓作はもう聞こえなくなった護符を握りしめながら悪態をついた。

「オイオイ、炎髪と坂井は間に合うのかア？」

「知らねーよ。つーか何で弔詞の詠み手は俺達より先に屍拾いを見つけたんだよ？」

「それこそ知らねエよ」

一方通行と合流した垣根は封絶の中へ入り弔詞の詠み手の気配のする方へと急いでいた。

「間に合えよクソツたれがア……！」

一方通行は足の裏にかかる運動量のベクトルを操作しビルとビルの間を飛び越えながら移動する。垣根は勿論飛行中だ。

「間に合えよシャナ……」

垣根は齒ぎしりしながら速度を上げた。

御崎市の美術館で弔詞の詠み手マージョリー・ドーは屍拾いラミーの前に立ちはだかつていた。

「こんにちは屍拾い」

『早速だがよ、ここで死ねクソ野郎!!』

マージョリーはトーガを纏うと戦闘態勢に入る。ラミーはそれを無表情の顔で眺めながらマージョリーとは別の方向へ視線を移した。

『……………！来たぜマージョリー!!』

「構わないわ。屍拾い共々叩きのめしてやるわよ!!」

パライイン!!

美術館の天窓を破って現れたのは、

「炎髪……………！」

「灼眼か……………！」

紅蓮に染まった髪や瞳に夜笠を纏った炎髪灼眼の討ち手シャナだった。

「間に合った……………！」

シャナは地面に着地するなり夜笠から大太刀、贄殿遮那を取りだし構える。シャナの肩にしがみついて来た悠二は見事に着地に失敗したがすぐに立ち上がりラミーの傍へと走る。

「はあく、いきなり現れてその上武器まで構えるなんて礼儀知らずなガキンちゃんね。せめて『こんにちは』ぐらいあってもいいんじゃない？」

マージョリーはトーガから顔を出しやれやれと言いたげな表情をする。

『ヒヤハハハハハハハ！久しぶりだな天壤の劫火。そいつがお前の契約者、炎髪灼眼の討ち手か？』

マルコシアスの問いかけにアラストールは答えない。

「先に名乗らせてもらおうわ、私は天壤の劫火アラストールの契約者、炎髪灼眼の討ち手名前はシャナ！！」

「アンタが炎髪灼眼の討ち手ねえ……。どうでもいいけどアンタの後ろにいる屍拾いをこっちに渡してもらえるかしら？」

「断る！」

2人のフレイムヘイズの間をピリピリとした緊張感が走る。それは離れた場所で見えていた悠二もラミーも感じとれた。

「アンタもフレイムヘイズなら分かるでしょ？ 徒は殺すしかないってことぐらい」

「ラミーの討滅はこの街に被害を及ぼす可能性がある。私達フレイムヘイズの使命は紅世とこの世のバランスを保つことよ」

「俺達は仕事熱心なフレイムヘイズだからなあ。後顧の憂いは断っておかねえと。ヒヤハハハハハハハハハ！」

『黙れこの戦闘狂が！』

『言ってくれるねえ天壤の劫火』

マージョリーはトーガから顔を出したままシャナに問いかける。

「アンタ、フレイムヘイズのくせに徒を庇うの？」

その問いかけに表情一つ変えずに答える。

「私は世界のバランスを保つために害となる徒を討滅している。でもお前は殺したいから殺しているだけよ！」

その一言にマージョリーの表情が怒りで歪む。

「その何が悪いのよ!」

マージョリーはトーガを纏いシャナに炎弾を放った。シャナはそれをかわすと一気に間合いを詰める。

(力が湧く。今なら何でもできる!)

群青の炎弾をかわしトーガに斬りかかった。

スバァ!!

完全には捉えきれなかったが贅殿遮那の切っ先はトーガをかすった。

「(速い……!)」

『なかなかやるじゃねえか!』

シャナの速度に目が追いつかなかったマージョリーは若干の焦りを覚える。しかしすぐに次の一手を打つ。トーガの分身を作るとその分身が一斉にシャナを包囲した。

「さあ、どれが本体か分かるかしら?」

シャナは鋭い視線で複数に分かれたトーガを見渡し、

「やああああああああああっ!!」

飛び上がったかと思うと大太刀をトーガの一体に振り下ろした。

『なっ……!? 馬鹿な……!?』

「当り……!?」

シヤナの一撃はマージョリーの本体を捉えていた。

『このガキがあ!!』

マージョリーは先ほど放った炎弾を連射する。しかしシヤナはその攻撃を避けながら再びマージョリーとの間合いを詰めた。

(悠二がいる……。私は何でもできる!)

炎弾を避けながらついにマージョリーの懐へと入った。

「しまった……!」

マージョリーがそう思うのと贅殿遮那がトーガを貫くのはほぼ同時だった。

「あああああああああああ!!!!」

群青色の炎が傷口から溢れていく。トーガからマージョリーの姿が出てきた。右肩を押さえて痛みで顔を歪めている。

にラミーが立っていた。

「久しぶりだな天壤の劫火アラストール」

ラミーはアラストールに声をかけた。

『久しぶりだな、と言いたところなのだがな。その前にあの戦闘狂を何とかしなければ』

シヤナと悠二は美術館の方へと視線を移しそして目を見開いた。視線の先には群青色の巨大な狼の姿があった。近くの建物が狼から発せられる炎で倒壊する。

「何だよあれ？」

戸惑いの声で訊ねる悠二にアラストールが答えた。

『蹂躞の爪牙マルコシアスの顕現だ』

暴れる群青の狼を見てラミーが解析する。

「マズイな……このままでは封絶が解けるぞ」

「解けるとどうなるの？」

「封絶が解けたら修復は不可能だ。封絶内にいる人間で何人も死者が出るだろう」

悠二が何か言う前に背後から声がした。

「オイオイ、何か随分と愉快なことになってンじゃねエかよ」

「もう少し見物しとくか？」

一方通行と背中から白い翼が生えた垣根だった。ラミーは一方通行を見て声をかけた。

「昨日の少年か？これはまた珍しい所で会ったな」

「オマエが屍拾いかア、昨日の段階でオマエの名前を知ってりゃア苦勞することはなかったのによオ」

一方通行は愉しそうな笑みを浮かべると再びマルコシアスへと視線を移した。

「さて、あの馬鹿でけエ奴をどオ料理スンだア？」

誰に訊ねた訳でもないが思ったままのことを口にした一方通行。

「私がやる」

全員の視線がシャナに集まる。シャナは悠二と向き合った。

「シャナ、僕にもできることはあるかな？」

「ある。私達ならきつとやれる」

そう言って笑った彼女の顔は自信に満ち溢れていた。

蹂躪の爪牙マルコシアス（後書き）

この話以降の更新のペースが落ちます。最低でも1週間に一話更新できるように頑張ります。

今そこにいる意味（前書き）

いつも以上にグダってますが温かい目で見てやって下さい！

それではどうぞ

今そこにいる意味

「悠二、アズユールは今持つてる？」

火避けの指輪アズユール、紅世の王狩人フリアグネの所持していた宝具の1つだ。その名の通りフレイムヘイズや紅世の徒の炎に対する絶対的な防御を誇る宝具である。悠二は頷くとポケットからアズユールを取り出した。シャナが悠二に説明をする。

「私がいって言ったらアズユールで最小限の結界を張って」

「わかった」

突然シャナが顔を赤らめる。首を傾げる悠二だったが理由を悟り同じように顔を真っ赤にした。「オイオイそんなことしてる時間ねエだろオ」と言いたげな一方通行。

「えっと……しがみつけどいいかな？」

若干戸惑いながら悠二が問いかける。シャナは顔を真っ赤にしたまま、

「早く！」

悠二を急かす。照れながらも悠二はシャナにしがみついた。しがみついたといってもシャナの背中からは紅蓮の翼が生えているため背中にしがみつくのは無理だ。必然的に前となる。悠二なりに考えて『しがみついた』結果、垣根や一方通行から見た『ツンデレ少女シャナを抱きしめる坂井悠二の図』が完成した。

「ちよつと！これじゃ前が見えない！」

明らかに悠二の方が身長は高い。普通にしがみつい（抱きしめ）たりなんかしたら身長差がでるのは当然だ。

「そ、そっか、ごめん」

別に悪くもないのに謝る悠二。俺達がやった方が早かったかな、と思うホスト風少年垣根帝督。シヤナは視界確保の為に悠二の頭の位置を下げる。そうなると悠二の顔の前にあるのは、

「痛っ！」

シヤナの肘が悠二の脳天に落下した。こんな状況でも本人は意識しているらしい。

バサア！！

2人は空中へと飛び立つと群青の狼マルコシアスに向かって突っ込んでいく。

バオ！！

マルコシアスが2人に炎弾を連射する。シャナは悠二の体重でバランスを崩しながらも炎弾の嵐を回避しマルコシアスに急接近した。

「悠二！結界張って！」

アズールで結界を張ると炎の体のマルコシアスの中に2人の体は入って行った。悠二の目に最後に映ったのは群青の炎の中でグリモアを抱えるマージョリーに大太刀を振り下ろすシャナの姿だった。

「……………生きてる？」

『みてえだな』

目を覚ましたマージョリーが倒れていた体を起こすと傍らにグリモアが落ちていた。軽く笑い辺りを見渡すとシャナに悠二、屍拾いラミー、そして垣根に一方通行の5人の姿があった。

「アンタ……………」

「よオ三下。オマエ随分面白エ奴だったンだなア」

一方通行が笑いながら言う。マージョリーとしてはこの得体の知れない少年に炎弾を撃ち込みたい気分だがそんな力は残っていない。

「お前さん達、銀を探しているのだろう？」

「！」

『テメエ、銀を知ってんのか！？』

ラミーの一言にマージョリーの表情が一変する。

「あれは追うな。いずれ関わることになる、それまで待て」

その言葉を聞いてマージョリーは唇をきつく結ぶと拳を握りしめた。

「そんな……………」

シヤナが鋭い視線を向けたまま告げる。

「今回は見逃してあげる」

だが、とアラストールが続ける。

『貴様らがまた世界のバランスに影響を及ぼすのなら我らが相手になる』

そう言い終わると5人はその場を立ち去った。残ったマージョリーは不意に笑いが込み上げてきて大声で笑った。

「ラミィを殺すな、世界のバランスを崩すな、銀を追うな、じゃあ他に何が残ってるのかしらね」

5人は美術館から離れた建物の屋上にいた。これから壊れた建物の修復をしなければならないのだ。

「ねえ、僕の存在の力を使ってよ」

悠二が進言するとラミィは首を横に振った。

「やはり君は零時迷子のミステスか。しかし君の力でなくとも私の溜めてきた力で十分だ」

『しかしお主の力は大切な絵を修復する為に集めてきたのだろうか？』

アラストールの言葉にラミィはにっこりと笑うと

「いいのだよ、私はこの力をずっと溜めてきたのだ。たまには無駄遣いしてもよかるう」

そう言って街の修復に取りかかった。修復が終わると同時に封絶が

解ける。

「それでは私は失礼するでしょう。さらばだ零時迷子の少年、天壤の劫火、そして炎髪灼眼の討ち手よ。いやシャナと言うのが正しいのかな？」

そう言った後、一方通行に視線を移し、

「そしてさらばだ、不思議な少年よ」

一方通行は何も答えなかった。しかしラミーは微笑んだまま5人に背を向けた。

『さらばだ、螺旋の風琴リヤナンシー』

「螺旋の風琴!？」

アラストールの言葉にシャナが反応した。悠二と垣根は不思議そうな顔でシャナを見る。一方通行は興味がないらしく眠たそうな顔で空を見上げていた。

「誰なんだそりゃ？」

「封絶をはじめとする様々な自在法を編み出してきた高名な自在師よ」

垣根にも一方通行にもその言葉の意味は解らなかったがこれだけは理解していた。「アイツってスゲエ奴だったんだなあ」と、そう思いながら去っていくラミーの背中を見ていた。

マージョリーはグリモアを抱えてのんびりと街中を歩いていた。とくに行く宛もない彼女は自分がどこを歩いているのか認識すらしていなかった。

「これからどうしよつか……」

『どうしよじやねえだろ？前見てみな』

マルコシアスの言葉でマージョリーが前を見ると汗だくでこちらに走ってくる佐藤啓作と田中栄太の姿が見えた。2人はマージョリーの姿を見つけるなり笑みをこぼした。

『どこに行くかってのははっきりしてんじやねえか？』

「そつね……」

戦闘狂と呼ばれた女は優しい笑みを浮かべるところちらに向かって手を振る2人の少年の元へと進んでいった。

翌日、自らに課せられた大量の課題を前に学園都市第1位と第2位の2人はげんなりした顔で放課後を過ごしていた。垣根は3日で学校を2日無断欠席、一方通行に至っては受けた授業はたったの3コマのみ、しかもそれすらまともに受けていないという有り様だ。

「オイオイ、これは新手の嫌がらせかア？」

ぶつぶつ言いながら課題のプリントにペンを走らせる一方通行。2人ともなんだかんだで真面目にやっているのだ。

「あの教師ムカついた。後で芸術的な死体オラジエに変えてやる」

こまかみに青筋を浮かばせながら猟奇的な台詞を口にする垣根。

「で……聞きてえんだが……何でシャナと悠二は残ってたよ。さっさと帰れーっ！気が散るだろうが！」

ホスト少年はにやにやしながら自分と一方通行を眺める炎髪灼眼少女を睨み付ける。悠二はというと苦笑いしたまま山積みされた課題を見ている。

「意識はしてんだなア、オマエ。まさか炎髪に気があのかア？」

「残念だな、俺のストライクゾーンを外れてんだよ。ところでさ、シャナと悠二って付き合ってたの？」

垣根にとっては何気ない一言だったのだが言われた2人は顔を真っ赤にした。

「そんな訳……」

「ち、違うー!」

予想より大きな声で悠二の言葉が遮られる。しかし垣根はシャナの反応を見てにやりとするとさらなる一言をぶつける。

「じゃあ何で顔が真っ赤なんだよ。口で誤魔化せても表情に出てるぞ」

「うるさいうるさいうるさい!! 違うって言ったら違うー!」

何もそこまで否定しなくても、と落ち込む悠二をよそにこのままいくと贅殿遮那で一刀両断されかねないと思った垣根はそれ以上の追及はしなかった。

「なァ第2位、俺たちはここで一体何やってンだろオナ」

「まあいいじゃねえか、退屈しねえしよ」

結局課題を全て終わらせた2人は帰路を歩いていた。帰路といってもただ下校しているだけで帰宅している訳ではない。

「何しにここに来たのか……忘れちゃったなァ」

一方通行はそう言うと夕焼け色に染まった空を見上げた。

水中騎馬戦

朝、夏の制服の着心地に顔をしかめながら登校する垣根帝督の姿があった。隣を歩く一方通行はあまり気にしていないが相変わらずポタン全開で下には黒地に白のラインの入ったTシャツを着ている。御崎高校でいえば間違いなく不良に部類するだろう。しかし学園都市では滅多に見られない垣根と一方通行の制服姿である。

「何でアイツらはこんな面倒な物を毎日着てんだよ？気持ちわりい」
学園都市ではこんなのがなかったぞ、と垣根。レベル5の彼らには服装についてはあまりいろいろ言われていなかった。

「大体、学園都市も変に準備がいいんだよなア」
呆れた顔で一方通行が言う。2人が今着ている御崎高校の制服は学園都市が準備した物だ。この街に入る前に荷物と一緒に渡されたのだ。まるでこちらに長期滞在するのを見越していたように。

「あゝ面倒くせえ」
登校ついでに不良狩りでもしようかな、と思っていた垣根の顔を顔に遠くから見ても分かりやすいくらい大きな痣を作った悠二とそれを作ったであろう張本人、シヤナが登校しているのが見えた。

「朝っぱらからお熱いことで」
一方通行がにやにやしながら言う。「鍛錬が……」とか「進歩していない……」とか聞こえてくるが何を言っているのかはよく聞こえない。

2人が学校へ着くと池速人がクラスメイトに何か配っていた。

「あ、おはよう。一方通行に垣根」

池は会うなり2人に何かを渡していった。

「何なんだこりゃア？」

貰った物は何かのチケットのようだ。

「……………御崎ウォーターランド？」

垣根がそのチケットらしき紙に書いてあった文字を読み上げる。後で悠二に聞くと最近できた遊泳施設で、池が父親から大量に入場券を買ったのでクラスメイトに配っているらしい。

「くっだらねエ」

一方通行がぼそりと呟くが垣根は行く気満々である。学園都市にも遊泳施設はあるし、一般の施設より設備がいい所も多い。しかしレベル5の2人はプールに行くことがあまりなかった。

「いいんじゃないね？久々に羽根を伸ばしても」

「ならオマエ1人で行きやがれ」

あくまで行かないつもりの方通行。ちょうどその頃シヤナも迷っていた。悠二は行くつもりらしいが彼女はあと一步の決断ができていなかった。

「ねえアラストール、どうしようか」

『遊泳施設の入場券か？人間は水と戯れるのを好むからな』

「……………」

『垣根や一方通行に聞いてみればよからう。坂井悠二が行くのならお前も行く必要があるがあのだちらかが行くのなら坂井悠二の監視はそちらに任せてもいいだろう。お前も行くのなら別だがな』
迷える少女はとりあえず考えをまとめるべく自らの好物であるメロンパンを買いに行った。

昼休み、悠二、シャナ、一美、池の4人はいつものように机をくっ付けて昼食を食べていた。今回は垣根も一緒である（悠二が無理に誘ったのだ）。相変わらずコンビニおにぎりの悠二、弁当の池と一美、今日はコンビニ弁当の垣根、やっぱりメロンパンのシャナ、といったところだ。シャナは授業をサボりわざわざ隣町までメロンパンを買いに行っていたのだという。満面の笑みでメロンパンを頬張るシャナの顔に垣根は不覚にも見とれてしまった。

「垣根？」

「あ？な、何だ？」

突然、池に名前を呼ばれ動揺する垣根。まさかシャナの横顔に見とれてしまったなどとは言えない垣根であった。気づけば緒方が立っていた。ぼーっとしていたので話すら聞いていない。

「だから今度の日曜日にみんなで御崎ウォーターランドに行こうっ

て話なんだけどどうする？」

「俺は構わないぜ。どうせ暇だしよ」

実際、学園都市から仕事内容の聞かされていないため時間に余裕はある。

「田中、佐藤！アンタ達も一緒に行くよね？」

緒方は近くでのんびり弁当を食べている2人に声をかける。

「悪いが俺はパス」

「俺もちよつと用事があつてさ」

そう言つて栄太と啓作は教室を出ていった。一瞬、緒方が寂しそうな表情をしたのを垣根は見逃さなかった。結局、行くメンバーは緒方を含む6人となった。

「まあ一方通行も連れて来る。アイツもどうせ暇人だろうしな」

垣根が笑いながら空になったコンビニ弁当をビニール袋にしまう。その後、一方通行にそのことを話し、「何勝手に決めてンだよクソ野郎！」という言葉と共にベクトル操作された拳を食らって倒れた垣根を抱え悠二と池は保健室に突撃していった。

当日、集まったメンバーは7人となった。

「結局、来たのね」

その言葉を言われた人物、一方通行は盛大に溜め息をついた。その顔には「何で来ちまったんだア？」と分かりやすく書いてある。学園都市の頂点、レベル5の2人が、しかも第1位と第2位がこうしてプールに遊びに来るのも珍しい光景かもしれない。

「とりあえず入ろうよ」

入り口へと向かうメンバーをよそに一美は壁に貼り付けてあったチラシを見ていた。

「どうしたの？」

池が訊ねると一美はチラシを指差す。

「これ何かな？」

「水中騎馬戦？イベントか何かかア？」

確かにチラシには水中騎馬戦と書いてあった。男女ペアで騎馬戦をして優勝者には夜景の見えるレストラン無料招待券や手作りパン食べ放題の他にもろもろの景品があるらしい。

「午後からみたいだし、みんなで参加してみない？」

緒方が全員に賛否をとる。参加に手を上げたのは一美、シャナ、池、悠二、緒方の5人、垣根と一方通行は不参加だ。

「じゃあ細かいことは後で決めよう」

そう言つて7人は更衣室へ向かった。

「俺にも詳しいことはわかンねエけどよ、こりゃア能力の弊害つてヤツじゃねエのか？前にも説明したが俺は生きるのに必要なモン以外のベクトルは反射してる。余計な紫外線も全部反射してる訳だから体が色素を必要としてねエンだろオ」

しかも彼は驚くほどに体が細い。つい女だと思ってしまっほどだ。一方通行曰くこれも能力の弊害らしい。

「おい、悠二に池！今から400mメドレーで勝負しようぜ！」

一方通行に比べ、垣根は凄い盛り上がり様である。彼を知る者が見れば目を疑うだろう。

「…………！」

突然、シヤナの目付きが鋭くなった。

「どっしたア？」

「弔詞の詠み手が来た」

「あの三下が？」

辺りを見渡すが人が多すぎて見つけれられない。

「殺気は感じないから大丈夫だと思うけど…………、ぎゃふ！？」

突然、シヤナの顔面にビニールのボールが直撃した。マージョリーの気配に気を取られてボールに気づかなかったのだ。

「大丈夫？」

悠二が近くに寄る。そんな情けない姿を見られたのが恥ずかしいのか、シャナは顔を真っ赤にすると、

「うるさいうるさいうるさい！！」

と叫び、ウサイン・ボルト顔負けの速度で走り出すとバツシャーンという凄まじい音を立ててプールに飛び込んだ。

騎馬戦の直前、不機嫌そうな顔のシャナを肩車して一方通行は本日で一番大きな溜め息をついた。

（何でこうなったんだア？）

先ほど垣根と騎馬戦には不参加という一方通行だったが男子の人数が足りず垣根とジャンケンをした結果、一方通行が参加することになったのだ。さらにくじ引きで組み合わせを決めた結果、悠二と一美、緒方と池、そして一方通行とシャナというペアになった。当然、悠二と一美がペアということが気に入らないシャナはふてくされてる。一方通行にしてみれば迷惑極まりないがそんなことを気にする彼女ではない。

「お前能力使えば楽勝じゃねえか？」

垣根がにやにやしながら言う。確かにベクトル操作を使えば優勝は

確定である。しかし優勝など興味のない一方通行は派手に能力を使
うつもりはなかった。元々反射はしているため、他の参加者よりあ
る程度優位であるのは明らかだ。

「それでは水中騎馬戦を開始いたします。位置について……よい
……」

ピーツ！

ホイッスルの音で騎馬戦は始まった。悠二・一美ペアは相手のハチ
マキを取りには行かず、来た相手のみを相手にしている。池・緒方
ペアは頭を使った頭脳プレーで順調にハチマキを取っていく。

「面倒くせエ……」

そんなことを呟いていると4組ほどのペアに包囲されていた。

「私の言う通りに動いて！」

仕方なくシャナの指示通りに動く。ベクトルを反射しているので水
の抵抗を受けず他のペアより速く移動するとシャナはあっという間
に周りの騎馬を討ち取った。

「どう？まだやる？」

全く疲れを見せない2人。周りの騎馬たちは勝てないと思ったのか

シヤナを諦め他のターゲットを探しに散った。

「ねえ吉田さん。このまま時間が経つのを待とうよ。残っていれば参加賞か何かももらえるかも」

「そ、そうですね……」

顔を赤らめながら答える一美。悠二に肩車されているだけでドキドキなのだ。彼女にとってこの時間は幸せだった。しかしその時間を終わらせようとする者がいた。

「悠二ー!!」

その者は凄まじい速度で悠二たちに接近する一方通行の上に乗る長い髪をなびかせながら2人に迫ってきた。彼女から殺気迫るものを感じた悠二は動物の本能であわてて逃走する。

「待ちなさい悠二ー!!」

「こっち来んなよ!!」

悠二がどれだけ速く逃げても水の抵抗を受けない一方通行には敵わない。すぐ後ろに付くと一美のハチマキにシヤナが手を伸ばす。

「吉田さん!姿勢を低くして!!」

「はいっ!?!」

言われた通り姿勢を低くする。その時、悠二の頭に大きな2つの塊が当たった。悠二は顔を真っ赤にしながら逃げるがそれはシヤナの

闘争心を煽る結果となった。

「一方通行！もっと速度あげて！」

「俺に命令すんじゃないよ」

そもそも仕方なく参加した一方通行は頭の上からいろいろ指示するシヤナに苛立ちを感じていた。

「もっと速く追って！」

「人の話を聞けこのクソガキ！」
シヤナは悠二を追いかけることに必死である。一方通行のことなど気にしていない。

「もっと速く！」

ついに一方通行の苛立ちが頂点に達した。

「あア！うざってエ！！！」

一方通行はシヤナを抱えると前を走る悠二・一美ペアへと投じた。

ドッパン！！

一美を乗せた悠二は一方通行から放たれたシヤナという名の弾丸を食らって撃沈した。こうして波乱万丈の騎馬戦は幕を閉じ、短かったように長かった日曜日は終わりを迎えた。

ちなみについっかかり緒方に姿を見られてしまった栄太と啓作はそのことについて問い詰められ、必死に言い訳を並べた結果、3日間昼食を奢らされる羽目に合った。

水中騎馬戦（後書き）

今さらですが吉田一美が和美になっていたの訂正しました。ご迷惑をかけて申し訳ありません。

愛染の兄妹

波乱万丈の日曜日から4日、シャナと悠二がいつものように鍛錬をしている頃、垣根帝督は夜の御崎市を歩いていた。学園都市からの連絡もなく暇を持て余していた垣根はどこから見ても『THE・暇人』である。

「何か面白えことねえかな」

何の目的もなく歩き回るが面白いことなどない。気づけば時計は日付変更直前を指していた。これではただの深夜徘徊する少年である。そろそろ帰ろうかな、と思っていた彼の視線の先に3人の不良に絡まれる少年の姿が見えた。

不良に絡まれていたのは金髪碧眼の少年だった。暇人垣根は助けてやろうかな、と思いつながら近くに歩み寄る。

スパッ!!

突然、不良達がバラバラになった。垣根はその光景に目を疑う。よく見ると少年の手には大きな剣が握られている。さらに、斬られた不良達が炎となり少年はそれを吸い込んだ。存在を喰らった、垣根はその存在を知っている。

「テメエ……紅世の徒って奴か？」

少年は垣根に視線を向け、次に背後に視線を移した。

「ティリエル、こいつ食べていい？」

少年の背後から少年に瓜二つの少女が姿を見せた。

「どうぞお兄様」

その言葉の直後に少年は垣根に斬りかかった。垣根は未元物質を使用し背中から白い翼を顕現させると少年の一撃を防ぐ。しかし……

「うっ!？」

斬られていないのに垣根はダメージを受けた。肩や足に傷ができている。

「人のこと指さして食べていいだあ？その上斬りかかって来やがって……ムカついたぜクソガキ。丁度いい、暇潰し程度に遊んでやるよ!」

ゴォー!!

垣根は三対の白い翼を少年に叩きつけた。一本の剣では6方向の同

時攻撃は防げない。

ドゴオン！！

攻撃を防げなかった少年は6枚の翼による打撃を受けた。常人なら元の原形すら留めることのできない攻撃を受けたが少年はよろよると立ち上がる。

「お兄様！」

後ろで見ていたティリエルがとつさに封絶を張った。しかし、垣根は封絶とは違う雰囲気を感じ取る。しかし目の前にいる徒を逃がすつもりはなかった。

「やっぱりお前も徒か。わりいがここでくたばってもらう」

垣根が未元物質をさらに展開させようとした次の瞬間、背後から殺気を感じた彼は振り返る。そこにはプラチナブロンドをオールバックにしサングラスをかけた長身の男が立っていた。

「おいおいまだいるのかよ……今日は随分と多いな」

余裕そうな口調で言う垣根だったが男から放たれる異常なまでに強大な気配を肌で感じ取っていた。コイツはやバい、と頭の中で警報

が鳴るがそれを気にせず男と対峙する。

「邪魔すんなよ。コイツらが終わったら相手してやる」

「残念だがそうはいかんだ。依頼主を守ることが俺の仕事でね」

「そうかよ、ならお前はその2人の前に順番変更だぜ!!」

垣根は白い翼で凄まじい暴風を起こす。男は暴風に吞まれ宙へ舞う。

「……………!?!」

突然、男の姿が変化した。垣根の視線の先には長身の男の姿はなく、代わりに巨大な鷲の姿があった。鷲は凄まじい速度で垣根に襲いかかった。

「へえ、変わった奴もいるんだな」

垣根は空中に飛び上がると大鷲の攻撃を翼で防御しながらポケットからマッチを取り出した。

「焼き鳥になりやがれこのデカブツが!」

マッチに火を灯しそれを放り投げ再び暴風を起こす。

ゴバァ!!

マッチの炎が炸裂し巨大な壁となって大鷲を包み込んだ。垣根が生み出した暴風は『燃えやすい風』。この世に存在しない物質を作り出す能力だからこそできる技である。

「なるほど、貴様超能力者か」

炎の中から声がしたかと思うと

「……っ!？」

炎に包まれていたハズの男が背後に立っていた。気づけば兄妹の姿が消えている。

「チツ……逃げられたか。でもまあ、代わりにお前をバラバラにするやあいいか」

「俺を倒せると思うのか？おめでたい奴だ。人間ごときにこの千変は倒せない」

「ほざけ、お前が何であろうと死体になることには変わりはない」

垣根が男に突っ込むが男は嘲笑すると

「悪いが俺も忙しいのだ。ここは退かせてもらおう」

どこからか巨大な槍を取りだし垣根に振り下ろす。垣根は6枚全ての翼でその攻撃を防ぐが勢いに圧され数メートルほど後ろに吹き飛

んだ。

「くそっ！」

翼を開いた垣根の前に男の姿はなかった。

その頃、悠二とシヤナは鍛錬を終えて部屋でドラマを見ていた。ちょうど主人公とその彼女のキスシーンが映っている。悠二が顔を赤らめながらカップ麺をすすする。

「キスなんて挨拶みたいなものでしょ？なんでこんな場面をクライマックスで使うのよ？」

何も知らないシヤナが悠二に問いかける。フレイムヘイズとしては優秀な彼女だがそれ以外のことは何も知らないのだ。

「それ本気で言ってるのか？」

マジかよ、と言わんばかりの悠二。彼女と悠二はキスの価値観が違うのだ。

「どうして顔が赤いのよ？」

「べ、別に」

シヤナの顔を見ることすら恥ずかしくなった悠二は目を背けてカッ
プ麺をすすった。

「見つからないなあ贄殿遮那」

「大丈夫ですわお兄様。すぐに見つかりますわよ」

金髪の双子、徒『愛染の兄妹』のソラトとティリエルは公園のベン
チで腰を下ろしていた。超能力者というイレギュラーな存在に戸惑
ったがこちらには強力な護衛がいるのだ。

「ところで、あの少年はどうだったの？」

サングラスの男はコーヒーを片手に答える。

「久しぶりに興味が沸いた。超能力者つてのは厄介だからな。それ
にこの街にはフレイムヘイズもいるようだ、まとめて始末する方が
いいだろう」

フレイムヘイズということばにソラトが反応する。

「えっ、フレイムヘイズ？どこ？どこにいるの？欲しいよ、贄殿遮
那が欲しいよ！」

ティリエルはまるで大きな幼児のような兄を優しい笑顔で見つめながら彼の唇に自分の唇をおしあてた。

「（まったく、この兄妹ときたらすぐこれだ）」

男が呆れたような顔で溜め息をつく。この2人は場所を考えずにこういった行為に走る。お互いを求め合うのだ。街中でもしよっちゅうであるため通行人からの視線が集中する。人間など気にかけないがじろじろ見られているのはいい気分ではない。

「ねえ、オルゴールって知っているかしら？」

ティリエルが男に問いかけた。

「オルゴール？ミュージックボックスのことか？」

「それもそうだけどこれは少し違うわ」

ティリエルは小さなオルゴールを取りだし不敵に笑う。

「それがお前達の宝具か？」

「ええ、このオルゴールはあらかじめ打ち込んでおけばどんなに複雑な自在法でも奏でてくれるの」

そう言って兄ソラトの顔を見てそれから男に視線を移す。

「貴方にはこれを守ってもらいたいのよ」

「これを？」

「細かいことは後で伝えるわ。だから頼んだわよシュドナイ」
シュドナイと呼ばれた男はやれやれと言いたげな表情をした。

愛染の兄妹（後書き）

ここまでで何かありましたらコメントよろしくお願いいたします。

揺りかごの園クレイドルガーデン

悠二とシヤナはいつものように鍛練を終えるとダウンがてらに散歩に出ていた。河原から眺める御崎市の夜景はともロマンチックな雰囲気を演出していたが今、この2人にロマンチックな言葉は似合わない。しかし、今日の夜空には天の川が出ていて2人は目の前に広がる光景について見入ってしまった。

だが不運にもその2人の姿を目撃してしまった人物がいた。吉田一美である。愛犬エカテリーナの散歩に来ていた一美はたまたま2人を発見したのだ。池から以前、悠二とシヤナの関係はただの友達だと聞いていたがその言葉が逆に重くのしかかる。つい涙を流しながら帰宅した一美だった。

悠二とシヤナがしばらく景色を眺めていると向こうから垣根が歩いてくるのが見えた。

「おーす、熱いねえ御二人さん」

こちらを見るなりニヤニヤしながら垣根が言う。

「垣根はこんなところで何してるの？」

シヤナの問いかけに一瞬、表情が歪んだが笑いながら答える。

「徒狩り。昨日の夜奴らに逃げられちゃったんだよ」

「奴ら？」

悠二が話に食いつく。シヤナも真剣な表情で垣根に訊ねた。

「徒に会ったの？」

「3匹も仕留め損なつた。畜生、アイツさえいなけりゃあの気持ちわりい兄妹を殺れたのによ。あ、そうだアラストール」

垣根は思い出したようにアラストールに訊ねた。

「アンタ、千変つて奴知ってるか？」

『何、千変だと……！奴に会ったのか？』

アラストールの反応をから察するにヤバい奴何だなと垣根は悟つた。

「あの野郎にまんまと逃げられたんだよ」

『むう……奴がこの街に……しかし何故だ？』

「さあな、つーか千変つて強い奴なのか？」

アラストールは何かを考えているようだったが

『貴様には関係のないことだ。それ以上首を突っ込まない方がいい』

そう言つて黙ってしまった。垣根は少し不満だったがシヤナも悠二も分からないのならこれ以上問いただしても無駄だと思ひそれ以上の追及はやめた。

「じゃあまた明日な」

そう言いながら手を振ってその場を後にする垣根。しかしその表情にはいつものような笑みはなく険しい表情であった。

翌日の昼休み、いつもの面々の昼食は何やらどんよりとした空気が漂っていた。理由は悠二とシャナと一美のことである。昨日の光景を見た一美が池に相談し、そのことに腹を立てた池が悠二を凄い形相で睨んでいるのだ。妙な空気が漂って当然である。池は一美に好意を抱いていた。その彼女が泣きながら相談すれば機嫌がいい訳がない。

「なあ坂井、お前平井さんと付き合ってるのか？」

池が突然切り出した。一美もその言葉にビクツとする。

「なあ坂井!どうなんだよ!」

いきなり声を荒げる池に3人の視点が集まる。気づけば近くで垣根がニヤニヤしながらこちらを見ていた。一美は突然立ち上がると教室から出ていった。池は頭を抱えると力なく椅子に腰を下ろした。

「ごめん坂井、僕つい……」

「いいよ池。気にすんなよ」

垣根がこちらにゆつくりと近づいてきた。意地悪そうな笑みを浮かべて池に一言放った。

「池、お前吉田が好きなんだろ？」

学校の屋上の扉を開いた吉田一美は泣いていた。悠二とシヤナの姿を見て不安になったのは確かだ。池の一言で悠二との関係は終わってしまったと思ったのだ。屋上には先客がいた。白い髪に赤い瞳、一方通行である。彼はこちらには目もくれず横になって空を見上げていた。

ガチャ……

後ろから扉が開く音がした。続いて聞こえたのは少女の声だった。

「どうして逃げたの？」

声の持ち主はシヤナだった。確かに悠二とシヤナの関係を知りたかったのは一美である。しかし、それを聞く前に教室を飛び出した自分は逃げたという言葉が相応しいのかもしれない。一美の返事を待たずにシヤナはその場を去ろうとする。

「ゆかりちゃんはずるいよ！坂井君にいつも冷たくあたるくせに……私なんかよらずっと仲が良くて……」

「お前には関係ないでしょ」

「関係あるよ！私……私、坂井君のことが好きだからっ！」

シヤナの心に今の一言が重くのしかかった。

「ゆかりちゃんは坂井君に好きって伝えたことあるの？」

「……………っ！」

「私、坂井君に好きだってちゃんと伝える。伝えてもないゆかりちゃんには負けない」

シヤナが何か言おうとした直後に突然、自在法が発動した。

「邪魔してんじゃないわよ！」

シヤナの髪が紅蓮に染まる。一方通行もゆっくり起き上がると

「徒かア？面倒くせエ」

眠そうな顔で呟く。ちなみに彼は今の2人のやり取りを全て聞いていたのでシヤナが何故怒っているのかについて何も言わなかった。

しばらくすると悠二と垣根も屋上へ上がってきた。

「これ何なんだ？封絶？」

垣根が興味深そうに周りを見渡す。確かに封絶のような自在法だが明らかに封絶と異なっていた。

「気配が3つ、こっちに2つ近づいてくる。1つは動いていない」
「3つか……」

垣根が拳をパキパキと鳴らす。千変や愛染の兄妹を殺れると思うと自然と笑みがこぼれていた。

「2つはあの兄妹、1つはあの千変って奴だな。シヤナ、千変の野郎は俺がやる」

そう言うなり垣根の翼から白い翼が顕現する。

『これだけの術式、維持するためには何か仕掛けがあるのだろう。』

垣根、貴様は坂井悠二と共にそれを探せ』

垣根は不満たらたらだったが溜め息をつくと悠二と共にその場を後にした。この場に残ったシヤナと一方通行は近づいてくる気配の方へと向かった。

「なア俺も行く必要あンのかア？」

「ならその辺で見れば？」

シヤナは面倒くさそうな一方通行を置いてさっさと行ってしまった。しばらくすると凄まじい轟音を纏って竜巻がこちらに近づいてきた。

「見てよティリエル！贗殿遮那だ、贗殿遮那があるよ！」

「ええ、もう少しお待ちくださいお兄様」

竜巻の中から愛染の兄妹、愛染自ソラトと愛染他ティリエルが姿を見せた。

「はじめまして、こちらの方は私の兄愛染自ソラト、私は愛染他ティリエル。貴女はどちらの王のフレイムヘイズなのかしら？」

シヤナは贅殿遮那を構えると

「私は天壤の劫火アラストールのフレイムヘイズ、炎髪灼眼の討ち手シヤナ！」

「天壤の劫火……古い名前ですこと。そんなことはどうでもいいわ、貴女のその刀を頂きたいのだけど」

「奪ってみなさい！」

そう言うと2人に突っ込む。ソラトはどこからか剣を取り出すとシヤナの攻撃を受ける。

「っ!?!？」

いきなり肩に激痛が走った。

「お兄様の剣『ブルートザオガー吸血鬼』のお味はどうかしら？存在の力を剣に込めることで剣に触れた相手に手傷を負わせることができるのよ」

シヤナは後ろに跳び下がりソラトから間合いを取る。

「厄介ね」

シュルシュル！

突然、何本もの巨大な植物のつたがシャナを襲った。贄殿遮那で切り払うが数が多すぎる。つたは縄のように巻き付くとシャナの動きを封じる。

シュルシュル！

突然、何本もの巨大な植物のつたがシャナを襲った。贄殿遮那で切り払うが数が多すぎる。つたは縄のように巻き付くとシャナの動きを封じる。

「くっ……」

「贄殿遮那は僕のものだ。欲しい、欲しいよ」

ソラトがゆっくりとこちらに近づいてくる。シャナは剣を振るうとするが身動きが取れない。

「贄殿遮那だ……贄殿遮那の……」

ソラトの手が贄殿遮那に届こうとしたその時だった。

「ッたくうるせエガキだな。ちったア黙るってことを知らねエのか

？」

愛染の兄妹を衝撃波が襲った。何が起こったのか分からない2人は声のした方を向く。

「さつさと1人で行ってそのザマか？こんな雑魚どもに手こずってんじゃないよ」

学園都市最強の能力者一方通行だ。いろいろ言っていたが結局来たことに本人は溜め息をつきながら自分自身に呆れていた。

「貴方はもしかして能力者という人間かしら？」

「だったら何だっつてんだ？」

「人間ごときに私たちの相手ができるのかしら？私のお兄様の餌食になるのがオチよ？」

一方通行は首をコキコキと鳴らすと

「哀れだなアお前、本気で言っつてんのなら抱きしめたくなくなっちまうくらい哀れだわ」

足の裏にかかる運動量のベクトルを操作し凄まじい速度でソラトに突っ込み一気に間合いを詰める。次の瞬間、

ドバァ！！

ソラトの体が山吹色の炎となって爆ぜた。シャナやティリエルには一方通行がソラトに触れたようにしか見えなかった。

「お兄様ああああああああああああああああああ！！！！」

ティリエルの悲鳴に近い叫びが響き渡る。シャナも何が起こったのかわからなかった。シャナは自分に絡みつくツタを振りほどく一方通行に問いかける。

「今、アイツに何をしたの？」

一方通行はシャナに背を向けたまま答えた。

「アイツの体を内側から爆破してやった」

「でもどうやって？」

「アイツの体を流れる存在の力ってヤツのベクトルを操作しただけだ」

ブウォーン！！

ガキーン！！

一方通行が突然の攻撃を反射する。驚く2人の背後にソラトが立っていた。

『馬鹿な！再生が早すぎる！？』

「……………！アラストール、この自在法は多分奴らの力を永遠に作り出す物よ」

『なるほど、ならば今の超速再生も納得がいく』

「ならコイツらの核を潰さねエと無駄なことかア？」

ティリエルが一方通行に怒りの眼差しを向ける。

「よくもお兄様を……………！絶対に許さない！」

そう言うとソラトの元へと駆け寄る。

「お兄様大丈夫ですか？」

「大丈夫だよティリエル」

突然、兄妹はシャナと一方通行の前でキスを始めた。

「なアアイツら2人ともぶっ殺していいんだよな？」

シヤナの答えを待たず一方通行は2人に突っ込むとベクトル操作された拳で殴りかかった。2人はそれをかわすと余裕そうな笑みを浮かべた。

「この揺りかごの園クレイドルガーデンの中では私たちは無敵よ。例え貴方が強くても何度でも再生できる」

一方通行はにやりと笑うと

「ならテメエらがくたばるまで殺し続けてやるぜこの三下どもがア
!!!!!!!!!!」

揺りかごの園クレイドルガーデン（後書き）

気づけばお気に入り登録件数20件、こんな駄作をお気に入り登録して下さっている方々に本当に感謝しています。いろいろ省いたり登場人物のセリフが少なかったりしますがこれからも温かい目で見つけてください。

千変シュドナイ(前書き)

いつもより短いです。

それではどうぞ。

千変シュドナイ

ビルの屋上から弔詞の詠み手マージョリー・ドーは戦況を見つめていた。

「なんかいろいろ面白くなってきたけど私の出番はなさそうね」

『おいおい、こんな祭りに参加しねえでどうする我が親愛なる契約者マージョリー・ドーよ?』

「チビジャリもあの超能力者もいるみたいだし私に何があるってのよ? 敗戦処理?」

後ろから聞こえた足音に振り返ると啓作と栄太の姿があった。マージョリーの自在法で封絶の中でも動けるのだ。

「姐さんは行かないんですか?」

「行くわけないでしょ? 今回の徒は私が狙いじゃないみたいだしわざわざ行く必要がないのよ」

やる気のないマージョリーを見て栄太はその背中に一言放った。

「俺たちが足手まといだからですか?」

「……」

啓作はマージョリーに背を向けると

「なら俺たちだけで徒をぶっ飛ばしてきます」

どこから取り出したのか金属バットを握りしめ栄太と一緒に行くこととする。マジヨリーは溜め息をつく

「わかったわ。2人とも、とりあえず玻璃壇の所まで行くわよ」

グリモアに乗って廃デパートへと向かった。

「ったく、どこにあるんだよ!」

愛染の兄妹の自在法『揺りかごの園』を維持するための宝具を探していた悠二と垣根だったが何の当てもなく探し続けていた。

「待て、何かいる」

垣根が指さしながら悠二に言う。視線の先には奇妙な形をした巨大植物がいた。

「何だあれ、もしかして燐子かな?」

「何はともあれ消しておくに越したことはねえよ」

垣根は能力を行使し背中から白い翼を発現させると6枚の翼を巨大

植物に叩きつける。植物はバラバラに弾け垣根はつまらなそうな表情をするが

「垣根！」

悠二の声に辺りを見渡すとすぐ傍で新たな巨大植物が生えてきた。

「やっぱり核を潰さねえとダメか……」

垣根は新たに生えてきた植物型燐子を再び能力で吹き飛ばす。その光景を見ていた悠二の肩を後ろから誰かが掴んだ。

「徒っ！？」

振り返るとそこには驚いた様子の弔詞の詠み手マージョリー・ドーの姿があった。玻璃壇を使って敵の自在法を確認していたのだが封絶の中で動くトーチを発見し様子を見に来たのだ。

「アンタ、やっぱりミスステスね？前に会った時に薄々気づいてはいただけど」

『しかも封絶の中で動いてるってことは……！』

マージョリーが垣根に気づきまじまじとその姿を眺める。

「アンタも能力者？前に会った時とはイメージ違うわね」

「そりゃこっちのセリフだ。何だよその闘争心のねえ腑抜けた面は？」

「だがそれも今日で見納めだ蹂躪の爪牙！」

シユドナイ
鶴が3人に殴りかかった。垣根は反応が遅れた悠二を引つ張ると

「悠二、お前は奴らの宝具をさがせ。コイツは俺たちが何とかする」

「わかった」

悠二は千変の死角へと進み難なくその場を突破し走って行った。マ
ージョリーはトーガを纏い戦闘態勢に入る。垣根も能力を使用しシ
ユドナイに突っ込んだ。手には拾い上げた木の枝を持っている。

「そんなもので何ができる！」

すると垣根は槍投げ選手のように枝をシユドナイに投げつけた。避
ける必要すらないと思ったシユドナイはその枝を手で払った。

「そんな物でもいろいろ使い道があるんだよ」

「何!?!」

ドゴォ!!!

枝はシユドナイの腕に突き刺さりそして爆発した。シユドナイも、
それを見ていたマージョリーも今何が起きたのか解らなかった。

「俺の未元物質は元々この世に存在しない物質を作り出す能力、つまり俺がここに立ってる時点でここはすでにお前の知る空間じゃねえんだよ！！」

ゴォ！！

6枚の翼がシュドナイに襲いかかる。シュドナイは姿を玄武のような姿へと変えると垣根の攻撃を防ぐ。さらにマジヨリーがシュドナイに炎弾を連射し反撃の余地を与えない。

「あまり調子に乗るな！！！」

気づけばマジヨリーの背後に鶴の姿があった。シュドナイは凄まじい速度でマジヨリーに突っ込むと鷲の爪をトーガに突き立てた。

「ぐあああああああつ！！！」

『おいマジヨリー！』

トーガからマジヨリーが出てきた。左肩に傷ができ血が流れている。しかし垣根はマジヨリーを心配する様子もなくシュドナイに

翼を叩きつける。

「随分と面白え体だな。アンタを見せ物にすりゃあ金儲けできそう
だぜ」

「そんな奴に貴様は敗北するのだ、哀れな能力者よ」

マルコシアスが自在法でマジヨリーの傷を治療する間、垣根とシ
ュドナイの戦いは激しさを増していた。

強力な紅世の王『千変シュドナイ』と学園都市第2位の能力者垣根
帝督、たった一度お互いの攻撃がぶつかり合うその衝撃波で鉄橋を
支える柱に亀裂が入る。シュドナイが垣根に炎弾を放つが垣根はそ
れを翼で難なくかき消すと暴風を起こして攻撃する。

「いい加減にくたばれこの千変万化の面白野郎が」

「人間にしてはなかなかの腕前だ。だが俺の敵ではないな」

シュドナイは暴風の中を突っ切ると鋭い爪で垣根に襲いかかる。相
手を簡単にバラバラにしてしまうような一撃を垣根は白い翼で防ぐ
が勢いに圧され数メートル吹き飛ばされビルに叩きつけられた。

「……畜生、ムカついた。お前相当なムカつきっぷりだ……」

そう言いながら垣根は意識を手放した。シュドナイはまだ治療中の
マジヨリーをつかみあげる。

「残念だよ弔詞の詠み手、貴様がこれほど弱くなっていたとはな」

「ええ、今は反撃する力も残っていないわ」

「さらばだ弔詞の詠み手、蹂躞の爪牙」

シュドナイはマージョリーをビルの壁に叩きつけた。垣根、マージョリーを撃退しシュドナイは宝具のオルゴールへと戻ろうとしたその時、

「何だあれは？」

シュドナイの視線の先には彼が守るべき宝具へと近づくと悠二の姿があった。

■ 零時迷子の戒禁（前書き）

最近、文の質が落ちてきています。読んで下さる方々に申し訳がな
いです。今回もぐだつてますが温かい目で見えてやってください。

零時迷子の戒禁

ビルの瓦礫の中でマージョリーは目を覚ました。最後に覚えているのは自分を投げる千変シユドナイの姿だ。

『よおお目覚めかい相棒』

「私、生きてるのね……」

マージョリーが辺りを見渡すと自分の頭に包帯を巻く垣根帝督の姿があった。

「アンタも生きてたのね」

「余計なお世話だ、落ちこぼれのフレームヘイズ」

垣根を無視しマージョリーは啓作と栄太の護符に声をかけたが反応がない。

「一体どうしたのよ……」

『さつきからずっと反応がねえんだよ』

「マルコそれって……」

グリモアに拳を叩きつけマルコシアスの返答を待つマージョリー。

『相棒、よく考えてみる。自分の仕事にアイツらを巻き込んだのはお前の責任だ。子分を守るのは親分の仕事、なのにお前ときたら完璧に墮落しやがって子分どもに無駄な心配させやがる』

「でも、少しくらい休んだっていいでしょ？何百年も戦ってきたのよっ。」

『フレイムヘイズには休みは許されねえ。戦い続けるしかねえんだよ！』

「またいつものように立ち上がるのね……」

マージョリーの周りで群青の炎が渦を巻く。渦はマージョリーを包み込むと瓦礫を吹き飛ばし瓦礫の山の上にマージョリーは降り立った。

「姐さん！」

声のした先には栄太と啓作の姿があった。着ている制服は泥にまみれ所々破れている。

「マルコシアス、アンタ……！」

『ヒヤハハハハハ！俺はただお前がここに埋まってるよと2人に教えただけだぜ？その後の反応はなかったがな』

マージョリーは舌打ちすると先ほどシュドナイと交戦した方へと視線を移す。

「2人とも、玻璃壇の所に戻りなさい」

「えっ……でも……」

『ヒヤハハハハハ！気にするなよご兩人。いつもこんな感じだからよ』

ゴバア！！

瓦礫の山が弾け中から垣根が出てきた。

「垣根！？」

啓作が名を呼ぶと垣根はゆっくりと振り返り栄太と啓作の2人に笑いかけると背中から白い翼を発現させると鉄橋を目指して飛び立った。マジヨリーもグリモアの上に乗ると2人へと視線を移した。

「姐さん！徒なんかぶっ飛ばしてください！」

2人に微笑みかけ、自分勝手な親分は戦場へと戻って行った。

「貴様、何をしている？」

シュドナイは悠二をつかみあげる。

「は、放せ！」

「何故封絶の中で動いている……。封絶の中で動けるミステス？まさか貴様は……！」

そう言つて鶴の中から人間の姿が出てくる。人間の腕をシュドナイは悠二の腹に突っ込んだ。

「貴様の中にある物が分かった以上、それを貰う他あるまい」

悠二の体の中にシュドナイの腕が入る。シュドナイは悠二の零時迷子へと手を伸ばす……

「ぐあっ……！？」

シュドナイが突然、手を悠二の腹から引き抜いた。手を押さえ苦しそうな声を上げる。

「ば、馬鹿な！？戒禁だと……しかも、この千変を退けるほどの……」

ドゴオンー!!

動揺するシュドナイの背中に群青色の炎弾が直撃する。さらに『異物』の混ざった衝撃波がシュドナイを襲った。

「ぐっ……!? 弔詞の詠み手! それに能力者! ?」

「垣根帝督だ、ちゃんと覚えてからくたばれよ千変! !」

垣根は炎を作り出しシュドナイに放つ。シュドナイは悠二を放すとマージョリーと垣根に向かい合う。

「くたばり損ないが2匹か、貴様らがどれだけ足掻いても俺は倒せんぞ! !」

「ほざけ寄せ集めのびっくりお化けが。未元物質の真髓つてやつを味わってから死にやがれ! !」

垣根は翼を巨大化するとシュドナイに襲いかかる。シュドナイは先ほどの打撃攻撃をイメージし翼を受け止めようとしたが

スパア!

シュドナイの鷲の腕が2本とも切り落ちた。

「馬鹿な!?……くっ!」

シュドナイが苦痛の声を上げる間もなくトーガに身を包んだマージョリーが炎弾を放つ。爆煙が立ち込め鷲の姿が見えなくなる。

ドドドドドドドドド!!

立ち込める爆煙の中からシュドナイが飛び出した。彼は切り落とされた両腕を再生させると悠二の姿を探す。

(くそっ、逃げられたか……)

「余所見してる余裕があるのかよ!」

再び垣根が刃と化した6枚の翼でシュドナイに切りかかる。シュドナイはそれを回避し垣根とマージョリーに炎弾を放った。垣根は炎弾を翼で防ぎマージョリーは炎弾をかわしシュドナイとの間合いを

詰めた。

「…………！」

「これはさっきの借りよ」

ドゴオン……

「この三下はあと何回殺せばくだばンだよ」

一方通行はソラトを地面に叩きつけると飽き飽きした表情でぼやいた。シャナは巨大植物の輪廻を操るティリエルと交戦中である。

「一方通行！そこどいて！」

シャナは背中から紅蓮の翼を生やすと空中へ飛び上がり贅殿遮那に炎を纏わせると

「やああああああああああっ！！！！！！」

広範囲に巨大な炎の塊を放った。ソラトとティリエルは炎に呑み込まれたが揺りかごの園の効果でソラトは無傷で炎の中から出てきた。

しかしそれとは対称的にティリエルは体が透けている。

「お前体が……」

「お兄様を助ける為なら私はこの身を捧げますわ。全てはお兄様の為……」

ティリエルはソラトを守る為に自分の力を使用したのだ。

「オイ炎髪！俺がコイツらの相手するからテメエはさっさと宝具をぶっ壊してこい！」

一方通行の言葉にシャナは首を振ると

「コイツらは私が遣る！」

そう言っただ太刀を構えた。一方通行は溜め息をつくときシャナの顔を見て

「聞き分けのねエガキが強がってンじゃねエよ」

楽しみに笑うと彼女の前に立つ。

「ここはこの俺が後片付けしといてやるって言ってんだ。オマエは坂井と宝具を破壊してこい」

言うのが早いか一方通行はシャナの言葉を待たずにソラトに突っ込んだ。シャナはそんな一方通行を見て軽く笑うと悠二の気配のする方へと飛び立った。

「あつ、待ってよ贄殿遮那！」

ソラトがシャナの後を追おうとするが一方通行の拳が彼の頬を捉えた。

ドゴオ！！

ソラトの体が地面に叩きつけられる。さらに一方通行はソラトを叩きつけた際に宙を舞った小石を金髪の少年に向かって蹴る。

ゴオ！という音を立てて小石はソラトに直撃した。

「お兄様！」

「大丈夫だよティリエル」

ティリエルが慌てて近寄るがソラトは平気そうな表情で起き上がるフルートザオガと吸血鬼を構える。

「お前邪魔」

「うっせエンだよ、でけエ赤ん坊が。いい加減黙ってたばりやがれ」

一方通行が上にかざす。すると彼の頭上でプラズマが発生し始めた。

「もうオマエで遊ぶのはやめだ。ここを破壊してやる」

ゴォー！！

辺り一帯が吹き飛んだ。ソラトとティリエルはプラズマによる攻撃を受けたが存在の力を上手く使うことで攻撃を防いだ。

（この方と戦っているのは時間の無駄ですわ。さっきのフレイムヘイズを追うとしましょう）

ティリエルはソラトの手を引きシャナの後を追う。しかしそれを見つて見過ごす一方通行ではない。

「ここまで遣つといてそりゃねエだろ」

風のベクトルを操作し空中飛行を行うと愛染の兄妹を追撃する。

一方、シャナは悠二と合流することに成功していた。

「悠二！宝具は！？」

「多分あそこだよ」

悠二は鉄橋を支える柱のてっぺんを指差した。先ほどから妙な感覚を感じていたのだ。

「行こう悠二」

「うん」

悠二は差し出されたシャナの手をしっかりと握った。

それぞれの思い

シヤナと悠二は鉄橋を支える柱のてっぺんへと移動すると視線の先に山吹色に輝くオルゴールが置いてあった。

「シヤナ、あれが……」

「うん、あれが奴らの自在法を制御する為の宝具」

ドゴオン！！

愛染の兄妹、ソラトとティリエルが一方通行に追われる形でこちらにやって来た。揺りかごの園の効果で何度も再生を繰り返しているが一方通行は容赦なく攻撃を続けていた。しかし、兄妹の行く先にシヤナと悠二の姿があるのを見つけた一方通行は追撃を止め、近くに降り立った。後は任せた、ということらしい。

ゴォー！！

シヤナは贅殿遮那に炎を纏わせるところらに向かってくる愛染の兄妹へ炎を放った。

そのすぐ傍で垣根・マージョリーとシユドナイは戦いを続けていた。

マージョリーはトーガの分身を作り出し全方向からシユドナイに炎弾を放った。さらに垣根が未元物質で『燃えやすい風』を作り出すとマージョリーの炎弾と融合しシユドナイを炎の壁が包み込んだ。

「くっ………！」

ゴォー！！

「（おのれ……このままでは依頼も遂行できん。千変の名折れだ）」

シユドナイはオルゴールを設置した場所を見る。オルゴールの守護は彼の仕事である。暇潰しの感覚で垣根やマージョリーと戦っていたシユドナイだったがここにきて焦りを覚えていた。鉄橋の上の方で火柱が上がっているのが見える。炎の色は、

「紅蓮の炎……！！？炎髪灼眼の討ち手だと！？」

「正解だぜクソ野郎！」

垣根が背後から刃と化した翼でシュドナイに切りかかる。不意を突かれたシュドナイは垣根の攻撃をまともに食らい川の中に落下した。

「（愛染の兄妹も相手があれでは敵わないだろう。不本意ではあるがここは退かせてもらう）」

シュドナイは鶴の姿から大蛇の姿へと変わると水中を凄まじい速度で移動する。

『オイオイ、あの千変が撤退してやがる』

「……………」

マージョリーは遠ざかる蛇の影を見ていた。しかし垣根は違った。水面に映る影に向かって突撃していく。

「今度こそ逃がさねえぞ！！」

垣根は翼で起こした衝撃波を水面に叩きつける。水面が割れ一瞬、シュドナイの姿を目で捉えた。

「逃げんじゃねえぞコラ！」

垣根はシュドナイにさらに続けて衝撃波を放った。轟音とともにいくつもの水柱が上がる。しかし垣根の視線の先には千変シュドナイの姿はなかった。

「あのクソ野郎がああああああああああああああああああああああ

「！！！！！！」

垣根の怒りの叫びが響き渡った。

シヤナの放った炎は愛染の兄妹を包み込んだ。

「お兄様……」

自分の力を削って兄へと注いでいたテイリエルは優しい笑顔を浮かべてゆつくりと消えていった。さらにシヤナの炎はオルゴールを破壊し自在法を解く。

「やああああああああああああつ！！！！」

ソラトが吸血鬼フルートザオガーを構え突っ込んでくる。しかしシヤナは贄殿遮那の上に放り投げた。

「あ！贄殿遮那！」

元々、贄殿遮那が目当てだったソラトは視線をシヤナから贄殿遮那へと移す。その隙だらけの体にシヤナの拳が入った。ソラトがバランスを崩してよろめく間に落ちてきた贄殿遮那をキャッチすると

「(……………「うめん」)」

ズパア！

金髪の少年の体は十字に切り捨てられた。体が山吹色の炎となって消えていくソラトの姿を見て一方通行がシャナに問いかけた。

「も才終わったのかア？」

シャナは無言で頷く。一方通行はソラトが残した吸血鬼を拾い上げ（本来、かなりの重量だが重力のベクトルを操作している）シャナ、悠二と共に下へ降りると疲れた顔で座り込む垣根と傷口を軽く手当てしているマージョリーの姿があった。

「お疲れさん、もう終わりか？」

「うん、もう終わり。後は壊れた部分を修復するだけ」

シャナが悠二の存在の力を使用して修復を行っている間、マージョリーが一方通行が手にしている吸血鬼を指差した。

「アンタそれは？」

「あのクソガキの所持品だ。俺には必要ねエからテメエにくれてやる」

そう言って一方通行は吸血鬼をマージョリーに手渡した。マージョ

リーは剣を軽く振ると肩に担ぐようにして自分の帰りを待つ2人の少年の元へと戻っていった。

街の修復が終わると4人は学校へと向かった。一方通行とシヤナは屋上へ、悠二と垣根は教室へと足を運ぶ。それぞれの思いを胸に……

「私、ゆかりちゃんには絶対負けない！」

「私だつてお前なんかには負けない！」

屋上で一美の宣戦布告を受け取るシヤナ、

「池、お前……」

池の思いを知る悠二とそれを察していた垣根。そして真つ昼間なのにも関わらずマジヨリーの酒盛りに付き合わされる啓作と栄太。先ほどまでの戦いが嘘のように日常の中でよくある光景が広がっている。いつものように何も変わらず。

ただ1人を除いては。

「実験だと？」

シヤナと一美が去った後、一方通行は屋上で学園都市からの連絡を受けていた。電話の相手は学園都市の研究員からである。

「その実験の内容は？」

「……………」

「本気で言っただがンのか？俺がそんな実験受けてでも？」

「……………」

「チツ、分かった。今から戻ってその実験ってのを受けてやる。細
けエことは後で聞く」

携帯の通話ボタンを切ると一方通行は空を見上げた。

「絶対能力者（レベル6）かア……………」

翌朝、一方通行は学園都市からの呼び出しに応じ御崎市を後にした。誰にも一言も話していなかったため垣根ですら突然の呼び出しに首を傾げた。

「俺には何の連絡もなかったんだがな」

先ほどから垣根は携帯の画面とにらめっこしながら愚痴をこぼしている。どうやら一方通行だけ、というのが気に入らないらしい。垣根は垣根で一方通行をライバル視しているし一方通行も垣根を第2位と呼ぶものの対等な関係として見ていた。2人とも、第1位の一方通行だからとか第2位の垣根帝督だからということでは区別されるのは嫌いなのだ。

「また戻ってくるかな？」

悠二が垣根に問いかける。

「さあな」

素っ気なく答え教室を見渡すと啓作と目があった。垣根は溜め息を吐いて教室を出ていく。屋上へ上がると啓作と栄太の2人が後から来た。

「俺に何か聞きてえんだろ？言ってみな」

「お前もフレイムヘイズなのか？」

栄太が訊ねた。昨日、瓦礫の山の上に立つ垣根を2人は見ている。封絶の干渉を受けず背中に白い翼を生やした垣根の姿はどう見ても普通の人間ではなかったハズだ。

「そんな訳あるかよ。俺はただの人間、細かく言えば学園都市産の超能力者だ」

「それは絶対ただの人間じゃねえよ」とつつこみたいのを抑え、啓作は垣根に問いかける。

「じゃあ何で封絶の中で動けたんだ？」

「俺にも分からん」

あくびをしながら垣根は屋上の上で真ん中で横になる。

「お前たちはどうなんだ？見たところフレイムヘイズでもねえ俺と同じただの人間みてえだが弔詞の詠み手のこと姐さんって読んでなかったか？」

栄太は垣根にマージョリーとの出会い、紅世の世界について彼女に学んだこと等を簡単に説明した。マージョリーの過去や徒に対する憎しみなど詳しく語った。

「なるほどな、アイツの自在式で2人とも封絶の中でも動けるってことか」

垣根がむくりと体を起こすと同時にチャイムが鳴った。昼休み終了のチャイムだが垣根は啓作と栄太の方を向くと

「次の授業って確か英語だったよな？面倒だからここでサボっていいよっぜ」

笑いながらそう言った。垣根は学園都市について2人に語って聞かせた。能力者のレベルの分類、7人のレベル5の能力者について（自分と一方通行については伏せているが）等のことを話した。普段の垣根ならこんなにおしゃべりではないが気分がいいからかいろいろなことを話した。

こつして垣根、啓作と栄太の仲は今まで以上によくなった。勿論、授業をサボった罰として担当教師から大量の課題を課せられたのは言つまでもない。

それぞれの思い（後書き）

ここまでシャナの原作に沿ってストーリーを進めてきましたが作者の気分で少し禁書の方へ脱線します。（一方通行と垣根だけでは何だか寂しいからです。）もしかしたらこれを機にここまでの駄作がより一層悪くなるかもしれません。温かい目で読んで頂けるとありがたいです。

垣根帝督

一方通行が御崎市を去ってから早3日。御崎高校のあるクラスでこれから戦争でも起きるんじゃないかねえの、と思えるようなピリピリとした緊張感が漂っていた。

その理由は宿泊研修のグループ決めであるが理由はグループの面子ではなく行く場所である。

全員決められた場所へ研修に行くのだが一方通行や垣根が御崎に訪れたことで御崎高校側も学園都市の研修を行うため学園都市に研修の許可を申請。学園都市から返ってきた答えは『教員を除く5名の学生のみ』というものだった。つまり、ラッキーな1グループのみが学園都市へ研修へ行けることになる。田舎に研修へ行くより科学の進んだ学園都市へ行く方がいいという学生が多いのだ。

1グループ5人から7人という班分けで悠二の班にはシャナ、一美、池、緒方といったお馴染みのメンバーとなった。班長は勿論、池速人である。(ちなみにこのグループも他の意味で緊張感MAXである)

「垣根はどこのグループになった？」

「俺？俺はどこのグループでもねえよ」

「え？」

悠二の質問に垣根はあっさりと答えた。言われてみれば彼はこのグループ決めの時間、音楽プレイヤーで音楽を聞きながら漫画を読ん

でいたような気がする。しかし研修はどうするのだろうか。悠二が訊ねる前に垣根が述べた。

「俺は元々学園都市の学生だから学園都市に戻るのが当たり前だろう？つーことで学園都市行きの奴らのガイドみたいな役回りになるんでよろしく」

そんなこんなでグループ決めも終わり本日最大のイベント、学園都市行きの切符を賭けた戦いが始まるうとしていた。と言っても実際は公平にくじ引きなのだが各グループ長が順番にくじを引くだけでも凄い緊張感が漂う。ドラフトで1位指名の選手をどの球団が取るかをくじ引きで決定するのと同じだ。

「じゃあ同時に開いてください」

先生の声にクラスの視線がグループ長たちを集まる。まさに『世紀の一瞬』みたいな光景だ。くじを開き手を上げたのは、

「おいおいそりゃないぜ」

「くそー結局メガネマンのところがよ」

「酷いわ池君」

クラスに広がる落胆の渦。くじを引き当てた池は喜ぶこともできずたったそれだけのことでブライニングを受けるということに苦笑いする。

その日、このクラスでは放課後までメガネマンブライニングが止まらなかったそうなの。

「お前らはどこのグループになったんだ？」

垣根が栄太と啓作の2人に訊ねた。啓作と栄太は同じグループになったらしいのだが他の面々があまりパツとせず萎えているらしい。

「それならお前ら、俺が担任に言っというてやるから研修当日は学園都市に行かねえか？」

垣根が笑いながら（あくまで他のクラスメイトに聞こえないように）2人に提案した。随分ワガママなレベル5である。しかし彼の提案は萎えている2人にしてみればかなりいい提案であった。

「いい考えだろ？」

「確かにあの面子で面倒くさい研修に行くよりはマシだよな」

垣根の提案に2人は顔を見合わせる。

「でもどこに泊まるんだ？池たちは学園都市が準備するらしいけど……」

栄太がそう言っって垣根の顔を見る。ホスト風の少年はにやりとすると

「俺の部屋に泊まればいいんだよ。元々俺は学園都市に住んでたんだからな」

「おおーなるほど。なら少しは楽しくなりそうだな」

啓作は表情を明るくすると思い出したように言った。

「マージョリーさんに一言言つとかねえと」

居候の大酒豪を想像し軽くわらう啓作。そんなこんなで啓作、栄太
学園都市研修の計画は着々と進められていった。

学園都市のとある路地裏である実験が行われていた。

「オイオイ！何だ何だよ何ですかア！？こんなことで俺を殺せると
思ってるのかア！？」

ゴォ！

「がっ………!!」

「何度も何度も同じことを繰り返しやがって、学習能力つてもンが
ねエのかよ!!」

ドガッ！

「ぐぐっ！」

「もオつまんねエから終わりにしてやる。お疲れさん出来損ない」

血にまみれ、真っ赤に染まった路地裏を返り血も浴びずに静かに歩く白髪の少年。赤い色とは対称的な真っ白い風貌のその少年は実験を続ける。最強から無敵になるために、誰かに認めてもらうために。

「あと11306回かア……」

どこか寂しげな少年は誰もいなかった路地裏を進む。聞こえてくるのは彼の足音と溜め息だけだった。

翌日の朝、垣根帝督は坂井家の庭で悠二の鍛錬を見学していた。

「学園都市ってどんな所なの？」

学園都市行きの決まったシヤナが木刀を振り回しながら塀の上に座っている垣根に訊ねた。学園都市は科学の進んだ街である。多少のカルチャーショックはあるかもしれない。

「行けばわかる、変わった街だぜ？何せ学生の街だからな」

塀の上から飛び下りると悠二の隣に立つ。

「悠二、交代だ。俺もお前がいつもやってる鍛錬ってやつに挑戦してみてえ」

シヤナは軽く笑うと垣根が何か言う前に木刀を垣根に振り下ろした。垣根は馬鹿にしたような笑顔のまま振り下ろされた木刀を避ける。

「ハハハハッ！いきなりかよオイ！」

声をあげて笑いながらシヤナの攻撃を避ける垣根。どことなく楽しんでるようにも見える。

『（この男、本当に人間なのだろうか）』

アラストールは黙ったまま垣根帝督という人物について思索していた。シヤナはあまり気にしていないがこの少年、普通の人間とかわせる反面、人間とは思えない禍々しい雰囲気や常にかかっている。一方通行に至っては垣根の纏うそれを遥かに凌駕している。

どちらにしる2人を相手にしてシヤナは勝つことができるだろうか？アラストールがそんなことを考えている間に登校時刻になった。

「学校か、面倒くせえな」

垣根はげんなりした顔で呟いた。まともに授業を受けていないが成績はすこぶるいい垣根は学校へ行って授業を受けることに疑問を抱いていた。（それは一方通行も同様である）

「だいたい御崎高校にまともな教師がいねえんだよ。学園都市でもお目にかからねえような三流ばかりだ」

鞆を拾い上げると塀を乗り越えてさっさと行ってしまった。

『シヤナ、もし仮に垣根や一方通行と戦うことになったとしたらお前はあの者達に勝てるか？』

アラストールはシヤナに問いかける。予想外の質問にシヤナと悠二は顔を見合わせる。そしてあの2人を思い浮かべた。

『ダークマター未元物質』の垣根帝督、この世に存在しない物質を作り出しこの世の法則すら塗り替える能力。それは第2位として「神が住む天界の片鱗を振るう者」と称される理由である。

以前、垣根と腕試し程度に戦った時は垣根の経験不足が響いたが実力は五分五分、否、それ以上かもしれない。

さらに学園都市最強の能力者である一方通行は垣根をも上回る実力の持ち主だ。「神にも等しい力の片鱗を振るう者」といわれる彼も

応用の利く能力を使用する。

戦闘狂、殺し屋といった異名を持つ弔詞の詠み手マージョリーすら簡単に退ける実力者だ。

そう考えると自分たちはとんでもない奴らと関わっているのだということを今さらながら気づく悠二。シャナはアラストールからの問いには答えずに仕度を済ませると

「悠二、行くよ」

そう言っただけ悠二を急かす。悠二はあわてて制服に着替え、鞆をひっ掴むとシャナの後を追った。

ちなみに2人並んで登校するシャナと悠二を電柱の影から見つめる吉田一美の姿があったが2人は知る由もなかった。

教室に入ると頭を抱えながらプリントの問題を解いているホスト少年の姿が目に入った。

「ちくしょう……何で俺がこんなことを……」

前記の通り垣根と一方通行はこの学校においてかなりの成績を誇っていた。しかし実は例外となる教科が存在した。

それは国語である。

垣根は頭はいいが言葉の使い道を選ばない。そのせいで記述問題で

当然ながら、その日の6コマあった授業のほとんどが自習時間だったそう。

カムシン・ネブハーウ

学園都市へ宿泊研修に行くグループは他のグループと異なり夏休みの間ということになった。悠二としては夏休み前が良かったのだが学園都市からの条件なので仕方がない。日曜日の朝、起きるとシヤナがコキユートスを悠二に手渡した。

「今日は一人で鍛錬してきて」

そう言うと悠二の返事を待たずに部屋を後にした。疑問はあったが悠二はジャージに着替えるとコキユートスを首にかけランニングに行った。

坂井家の台所にシヤナと悠二の母、千草の姿があった。シヤナが千草に弁当の作り方を教えてほしいと頼んだからだ。垣根の一言がきっかけである。

昨日の放課後、職員室に呼ばれた悠二を待っていたシヤナに垣根がにやにやしながら問いかけた。

「お前悠二のこと好きだろ？」

「なっ………!？」

顔を真っ赤にして目をパチパチさせるシヤナ。どうやら凶星らしい。

「好きなら好きってちゃんと言っとけよ?じゃねえと他の子に盗られちまうぞ。例えば吉田一美とかな」

一美の名前を聞いて不機嫌な様子のシャナ。垣根はやれやれと言いたげな顔をする。

「恋敵相手に先手を打つならまずは手作り弁当からだろうな。吉田は悠二が毎日コンビニのおにぎりってことを知ってる訳だから向こうが悠二に弁当作ってくる前にお前が作って渡せばいいんだよ」

そう言って目の前の少女の顔を見て確認した。

「一応聞くけどお前料理できんの？」

首を横に振るシャナ。垣根は頭を抱えると

「じゃあ誰か料理ができる人に習うしかねえか」

「てゆうかどうして弁当を作ること前提で話をしてるのよ」

「じゃあお前は悠二が吉田一美の手作り弁当を食べていても何とも思わないのか？」

この言葉がシャナの決意を固めるきつかけとなり悠二の母、千草に料理を習っているという訳だ。一方、アラストールに散々しごかれた悠二は荒い息づかいでゆっくり河原を歩いていた。

『歩くな、走り続ける』

「はあ……む、無理を言うなよ……はあ……かれこれ30分くらい走ったじゃないか……」

『仕方のない奴だな。少しだけなら休んでよかるっ』

悠二が顔を上げると向こうで大勢の人が何やら祭りの用意をしているのが見えた。

「うわっ、ミサゴ祭りか。もうそんな時期なんだな」

『何だそれは？』

「毎年この時期に祭りがあるんだよ。よく父さんや母さんで行ってたっけ」

「シヤナや垣根は行くかな……って行かないか」

『もう休憩は終わりだ。あと1時間くらい走れ』

「冗談じゃない！そんなに走りたけりゃアラストールが走れよ」

『本当に仕様のない奴だな。少しは自覚を持ってもらいたいものだ』

呆れたように言うアラストールを無視して祭りの飾り付け等に視線を移す悠二。祭りの準備をしている大人に混ざってホスト風ヤクザ予備軍少年の姿が見えた気がするが悠二はそれに気づかずランニングを再開した。

垣根帝督は明日に行われるミサゴ祭りの準備に参加させられていた。ケンカを売ってきた不良を返り討ちにして病院送りにしたところ、その不良が祭りの準備に参加する予定だったことを知り、珍しく罪悪感に駆られて手伝いをしているという訳だ。

「ん？アイツ……」

垣根の視線の先にはフードをかぶり、背中に布でぐるぐる巻きにした大きな何かを背負った少年の姿があった。

「おい、そこのお前」

垣根は手に持っていた道具を置くと少年に声をかけた。少年はこちらに気づくと面倒くさそうに聞き返す。「何か用ですか？」

垣根は少年の顔を見て目を丸くした。少年の顔には数多くの傷痕があったからだ。事故で縫ったとかそんなレベルではない。垣根は可能性の意味を込めて問いかける。

「ひょっとしてお前、フレイムヘイズ？」

「ああ、貴方は紅世について知っているのか。しかしフレイムヘイズでも徒でもないが貴方は何者だ？」

少年は鋭い視線で垣根を見る。またこのやり取りかよ、と思いつつ垣根は名乗る。

「垣根帝督、学園都市の能力者だ」

「能力者……」

少年は少し考える仕草をとったが何かを納得すると、

「僕の名は儀装の駆り手カムシン、カムシン・ネブハーウ。不抜の

尖嶺ベヘモットのフレイムヘイズです」

そう言つて手を差し出した。垣根は何の疑いもなくその手を握つて握手をする。

「しかし、これで3人目か。この街にはどうしてこんなにフレイムヘイズが集まるのかねえ」

「3人？ああ確かに他にもフレイムヘイズがいるみたいですが……」
カムシンと名乗つた少年はそう言つて街を見渡すと再び垣根に視線を移す。

「ちなみに誰なんですか？他のフレイムヘイズは」

「炎髪灼眼の討ち手と確かアイツは弔詞の詠み手だったか？その2人だ」

「ああなるほど。ところで少し頼みたいことがあるんですがいいですか？」

「何だ？」

「この祭りの会場から妙な気配を感じます。念のため貴方に監視をしておいてほしいんです。学園都市の能力者ならそれくらいの仕事は楽勝でしょう。僕はこれからやらなきやいけないことがあります」

垣根はげんなりした表情をすると

「結局こういう役回りなんだよな」

と言うと再び祭りの準備へと向かった。垣根が振り返った時、傷だらけの少年の姿はすでになかった。

翌日の放課後、たまたま1人で下校途中の悠二を発見した一美は決意を胸に秘め、彼に声をかけた。シャナに宣戦布告してから悠二にアタックする機会をずっと探していた一美はミサゴ祭りというイベントをフル活用しようという策に出たのだ。

「あ、あの…坂井君」

「吉田さん、どうしたの？」

「あの…よかったら今日一緒にミサゴ祭りに行きませんか？」

恥ずかしさで少し顔を赤らめながらうつむく一美。悠二はそんな一美に優しく笑うと

「うん、いいよ」

悠二の返事に一美は今までにない喜びを感じていたが今は気持ちを抑える。こんなところで失敗する訳にはいかないからだ。

その後、悠二と別れて今にもスキップでもするのでは？と思うくら

いのテンションで帰路を歩く一美の前に少年が現れた。カムシンである。

「あの、どちら様？」

「ああ、それより貴女にやってほしいことがあります」

カムシンはポケットからある宝具を取り出すと彼女に手渡すと

「今から僕が話すことをしっかりと頭に入れてください」

坂井家にて一美と約束をして帰宅した悠二を待っていたのは台所に散らばった黒焦げの物体の片付けだった。結局、シャナのお料理スキルは上達しなかったのだ。

「まったく母さん、何をやったらこんなことになるのさ？」

この惨状を引き起こしたのはシャナだということを知らない。文句を言いながら片付けを済ませると悠二は一美との約束のため祭りの会場へと出かけた。悠二がどこに行くかを知らなかったシャナは悠二の後を追おうとしたが『ある人物の気配』を感じ振り向いた。

「何だか久しぶりね、戻らないと思ってた」

「俺だつてこんな街に戻る予定なンざなかつたツつーの。ただ実験の休みてエなモンをもらったから暇潰しに来たつてとこかア」

実験のために学園都市へと帰った男、一方通行が御崎市に戻ってきた。

現実と幻想

「嘘……」

吉田一美は目の前にいる人物の言葉を疑った。紅世がどうかこの街の歪みの話とかそんなことはあまり理解できなかったがはっきりと分かったのはこの少年の言っていることに嘘偽りはないということとを覚ったからだ。

動揺を隠せない一美にカムシンは先ほど渡した宝具について説明をする。勿論、封絶内で徒に襲われないためにだ。

「もし封絶が張られたら他の人は気にせずすぐに隠れてください。貴女に死なれるといろいろ厄介なので」

突然、カムシンの目付きが変わる。何やら鋭い眼差しで辺りを見渡している。

「しなければならなかったのができたので歪みを正すのは後にします。それではまた後で」

そう言つてカムシンは一美に背を向ける。彼に聞きたいことは山程あったが遠ざかる背中をただ見ていることしかできなかった。

しばらくその場に立ち尽くしていた一美はおそろおそろ右手に握っている物を見た。

それは先ほど彼に渡された宝具だ。小さなレンズのような物だがカムシンから渡されたれっきとした宝具だ。カムシンの話ではこのレ

ンズを透して人を見るとトーチなのかどうか分かるらしい。一美は勇気を出してレンズを透して近所の住人を見る……

が、何の変化もない。ホツとした一美だったが安堵の時間も刹那だった。犬の散歩をしていた通行人が映ったとき一美は自分の世界が崩れていくような音を確かに聞いた。

映った通行人に青白い炎がぼんやりと見えたのだ。小さく今にも消えそう炎は静かに燃えている。

目の前の現実を理解し、深呼吸をして心を落ち着かせると悠二との約束を思い出し急いで帰宅して準備を済ませると祭りの会場へ向かった。

浴衣に着替えたシャナは一方通行と共に祭りの会場にいた。悠二もここに来ているのなら行ってみようかなという好奇心らしい。どうせ暇なら、ということと一方通行と一緒にいるという訳だ。

「オマエよく食うよなア」

本日3本目のりんごあめをなめているシャナに呆れた顔で言う一方通行。

「屋台の焼きそばの味に感動していた一方通行に言われたくない」

一方通行も学園都市では味わえない雰囲気珍しく興味津々だった。祭りに来ること自体が初めての2人は無自覚に祭りを楽しんでいるようだった。そんな2人は端から見れば一組のカップルのようにも見えなくもないし、同じく祭りに来ていた緒方やマージョリー、彼女に連れられている啓作や栄太も「あの2人ってそんな関係なんだ」と思うほどであった。（本人達は気づいていないが）

「おーす久しぶりだな一方通行」

カムシンの頼み通り人混みに紛れて祭りを監視していた垣根が2人に気づき声をかけた。

「よ才第2位、まあ久しぶりってほどではねエがな」

「熱いねえ〜シャナ、今度は一方通行にも手をだしたのか？」

垣根がシャナをからかう。顔を真っ赤にしながら残像が残るほど高速で首を横に振ると

「うるさいうるさいうるさい！これは、その……たまたまよ！」

垣根は一方通行に視線を移すとにやにやしなから

「お前も久しぶりに会ったと思っただらこれかよ。まったく羨ましいぜ」

「俺の知ったことが。大体コイツが変に意識し過ぎてンじゃねエかア？」

真っ赤になったシャナを見ながら溜め息をつく一方通行。

「つーかお前、何の実験で学園都市に戻った訳？」

垣根の質問で一瞬、一方通行の表情が陰る。が、すぐにいつものような無表情に戻ると

「馬鹿みてエな研究者どもの暇潰しみてエなモンだ。まだ終わってねエから明後日にはまた学園都市に戻らねエといけねエ」

そう言う一方通行はどこか寂しげだった。しかしシャナはそれに気づかず手に持つりんごあめのように真っ赤になった顔のまま垣根に訊ねた。

「垣根は1人でここに来たの？」

「あ？まあな」

苦笑いしながら答える垣根。まさかフレームヘイズのパシリとは言えなかった。

一方、一美との約束で会場に来た悠二はなかなか現れない一美を探していた。彼女に何かあったのではないのかと心配になったのだ。しばらくすると何やら3人で話すシャナ、垣根、一方通行の姿を見つけた。悠二は3人に歩み寄る。

「ねえ吉田さん見なかった？つて一方通行！？何でここに？」

「あア？何だ坂井か、どこにいよオが俺の自由だろオが」

フン、と鼻を鳴らす一方通行。

「それより吉田さんを見なかった？」

「吉田つて……吉田一美？」

シヤナの視線が鋭くなる。以前ライバル発言した彼女の名前を聞くだけでこの有り様である。

「吉田がどうかしたのか？まさかお前、約束をすっぱかされたとか？」

からかうように言う垣根だが悠二は結構真剣である。

「まあそう言われればそうなんだけど……」

カラン！

何か落ちる音に振り向く4人。そこには件の吉田一美が立っていた。足下には彼女がカムシンからもらったレンズのような宝具が転

がっている。

彼女はあわててそれを拾い上げると目に涙を浮かべ、何やらぶつぶつ呟きながら人混みの中に姿を消した。

「シヤナ、今のつて……」

「多分、宝具の一部ね。人間とトーチを見分けることができる物だと思っ」

悠二も以前、その存在を喰われて今はミスレスとなっている。しかしミスレスといってもトーチであることに変わりはない。シヤナの言うことが本当なら一美がレンズを透して悠二を見た時、そこに映った物は当然……

悠二は急いで後を追おうとしたが、

「追っ必要なンざねエンじゃねエのか？」

その一言で悠二の足が止まる。シヤナも垣根も意外そうな顔で白髪の少年を見る。

「アイツはオマエがトーチであることを知った。紅世ってヤツをどおやって知ったのかは知らねエがアイツはオマエがトーチであるという現実から目を背けたンだろオが」

一方通行の真っ赤な瞳は真っ直ぐに、そして冷たく悠二の姿を捉えていた。

「目を背けることでしか現実と付き合えねエ奴にかまう理由が俺に

は理解できねエな」

「一方通行……！お前……」

悠二の顔から怒りが感じとられる。一美が今、どんな思いなのかを考えると目の前に立つ一方通行が人ではなく機械に見えた。

心を持たないただの機械のようだと悠二は思った。

「まさか一方通行がそんなことを言うとは思わなかったよ。お前には心がないのか？吉田さんが今……」

「現実から目を背けた奴に残るのはちっぽけな幻想しかねエ。そんなモンしかねエ奴に何ができるってんだ？」

耐えきれずに悠二は一方通行に掴みかかるが反射で撥ね飛ばされる。

「現実からはどう足掻いても逃げられねエ。幻想しか持てねエ奴に進むことなンざできねエンだよ」

一方通行の言葉に何か引つ掛かるような気がした垣根。何かを言おうとした瞬間、封絶が張られた。

「……！」

4人はすぐに辺りを見渡す。すると、祭りの飾りだった鳥が動き始めたのだ。それもかなりの数だ。

「アラストール、フレイムヘイズの気配が2つ……！弔詞の詠み手

の他に誰が……」

シヤナが呟くと垣根が答えた。

「確か儀装の駆り手って言ってたぞ」

『貴様、儀装の駆り手に会ったのか？』

「ああ」

『ならもつと早く言え』

アラストールが呆れたように言う。マージョリーもカムシンも同じ場所にいるようだ。4人は2人のフレイムヘイズと合流すべくその場を後にした。

「へえ……これが封絶ってヤツかい。こりゃあ確かに科学じゃ証明できねえな」

白衣を纏い、顔の左側に刺青の入った男が封絶の張られた空を見上げていた。両腕には奇妙な金属のグローブを装備している。

「まあいいか、俺の仕事は2つだ。この現象に興味はあるが時間に余裕はねえからな」

男は溜め息をつくどポケットからモニターを取り出す。そこに書かれていたのは、

『1・零時迷子の回収、または器である坂井悠二の破壊2・炎髪灼眼の討ち手及び、一方通行、垣根帝督の殺害』

御崎市に訪れた研究者達

4人の向かった先には弔詞の詠み手マージョリー・ドーと儀装の駆り手カムシン・ネブハーウの姿があった。

「ああ、貴女が炎髪灼眼の討ち手ですか」

『お主も来ていたのだな天壤の劫火』

『不拔の尖嶺よ、なぜこの街に？』

アラストールの問いかけにカムシンが答える。

「僕らはこの街の歪みを正す為にここに来ました」

カムシン・ネブハーウ、世界でも数少ない歪みを正すことのできる調律師の1人である。

「歪みを正すにはこの街の住人の協力が不可欠です。なので僕は彼女に協力をお願いした」

そう言つて4人の後ろを指差した。そこには先ほど走り去った一美がおどおどした様子で立っていた。

「吉田さん……」

悠二は彼女を見るが彼女はすぐに視線を反らした。悠二は一美に声をかけようとしたが一方通行の声に遮られた。

「放っておけ、ソイツに構ってたら話が進まねエだろオが。言いてエことがあんなら後にしろ」

一方通行はカムシンの方を向くと

「で、誰が封絶を張ったんだ？」

「おそらく徒でしょう。どんな奴かはまだわかりませんが」

垣根が背中から白い翼を顕現させると楽しそうな笑みを浮かべる。

「さっき見た鳥の燐子どもは消していいんだよな？」

そんな垣根を呆れたように見るマージョリー。戦闘狂と呼ばれる彼女だが垣根はそれ以上に好戦的な性格をしている。マルコシアスと気が合いそうだ。

「あれは燐子なので別に構いません。ですが相手の目的が分かるまで勝手な行動は慎んでいただきたい」

不満そうな垣根だがしぶしぶ従った。何にせよ封絶を張った徒と燐子を討滅しなければこの街の歪みを直す邪魔をする可能性がある。なので悠二、一美を除く5人は徒の討滅と燐子の殲滅の2組に別れた。徒の討滅がカムシンとマージョリー、燐子の殲滅が残る3人だ。

討滅組がその場を去った直後に啓作と栄太が悠二達の元へと走ってきた。2人は悠二を見て目を丸くする。一美のことはマージョリーから連絡を受けていたが彼女は悠二のことをミスレスとしか言わなかったためこの場面で悠二の登場は予想外だったのだ。

「坂井！？何でお前がここに！？」

「佐藤に田中！？そつちこそ何で……」

悠二にしても2人の登場は予想外だった。まさかこの2人も！？といった感じだ。しばらく4人の間に沈黙が流れる。しかし向こうで響く轟音がその沈黙を裂いた。

「まさかお前がマージョリーさんの言ってたミステスなのか？」

悠二は無言のまま頷く。

「姐さんはどこに？」

「今、マージョリーさんは他のフレイムヘイズと一緒に徒の討滅に向かっている。シヤナ達も戦っている」

「シヤナって平井さんか？あの子もフレイムヘイズだったなんて……」

田中は意外そうな表情をするが啓作は今の悠二の言葉に食いついた。

「シヤナ達って他に誰がいるんだ？」

「垣根と一方通行だ」

ドゴオ！

燐子を凄まじい勢いで蹴散らす垣根。3人はかなりの数の燐子を倒したが数を競えば間違はなく垣根がナンバーワンだ。戦闘狂もびつくりの能力者である。

「つまんねえな。こんなものかよ」

「何一人でハシャいでんだよくだらねエ」

「もうこの辺りにはいないみたいね」

3人は他の場所の燐子を討滅するため、移動しようとしたその時だった。

「……………！オマエらそこをどけエ！」

一方通行がシャナと垣根に叫んだ次の瞬間、

ドゴオ！

3人の姿は爆発に呑まれた。攻撃を放った顔に刺繍の入った白衣の男は肩にバズーカを担ぎながらゆっくりとこちらに歩いてくるが、

「やっぱこんな甘えモンじゃ死なねえよな」

炎の中に見える3人の影を見て溜め息をついた。先に炎の中から出てきたのは一方通行だ。

「ホイイイ原クンよオ！その生ぬりイー撃は一体何だア？長エこと見ねエ間に随分と面が変わっちまったじゃねエかよ！？」

「相変わらず口の悪いクソガキだなテメエは」

「クソ……ムカついたぜ木原数多！」

白い翼で身を守った垣根は苛立ちを全面に出しながら木原数多を睨み付けた。

「お前もいるんだったな第2位。隣にいる奴が炎髪灼眼の討ち手つて奴か？全員まとまっつて助かるぜ」

シヤナが贔殿遮那を構えながら2人に訊ねる。

「アイツは誰？」

「奴は木原数多。学園都市じゃ有名な研究者で一方通行の研究に関わっていた1人だ」

「でもアイツはただの人間でしょ？」

なのに何故、封絶の中でも動けるのだろうか？そんなことを気にせず木原に敵意をむき出しにする垣根と一方通行。

「で、テメエはこんなところで何やってやがんだア？」

「こつちもいろいろ事情があんだよ。悪いけどテメエら3人にはここで死んでもらう」

そう言うなり木原は一方通行に殴りかかった。害となるベクトルを反射している一方通行には効かない、ハズだった。

ガッ！

「……！？」

木原の拳が一方通行の頬を捉えた。その光景に垣根もシャナも、そして一方通行本人も何が起きたのか理解できなかった。一方通行は殴られた頬に手をやる。

「反射が効いてない！？」

木原は呆れた顔で一方通行を見ると

「おいこのクソガキ、よく考える。その最強って言われてる能力は誰が発現させてやったと思ってるんだ？テメエの演算パターンなんざ

手に取るように分かるんだよ！」

木原が再び一方通行に殴りかかる。しかし垣根が木原より速く動き一方通行の前に立つと彼を庇うように翼で木原の拳を防ぐ。

「……………あ？」

しかし翼に殴られたような衝撃はなかった。

「テメエまさか……………！」

垣根はハツとした。木原に一方通行の反射が効かなかった理由、それは……………

「オイ、クソガキ。お前は害となるベクトルを反射してんだろ？なら簡単だ、拳が当たる直前で手首を引けば拳は自然にお前に当たって訳だ」

拳は垣根の翼に当たっていなかったのだ。木原は腕を鳴らしながら2人に近づく。

「そっぴや第2位、お前の能力は未元物質だったな」

そう言いながらポケットから何かを取り出した。垣根は気にせず6枚の翼を木原に叩きつける。しかし……………

「なっ……………！？」

垣根の白い翼は木原に届くことなく消滅した。さらに目の前の現象

に目を疑った垣根の頬に木原の拳が入った。垣根は衝撃でバランスを崩しながらも上手く体勢を整える。

「チツ、テメエ何をしやがった!？」

「やっぱ未完成か、もう少し調整が必要だな」

木原の手には小さな機械が握られていた。一方通行はその機械を憎々しげに睨み付ける。

「AIMジャマーかア……」

木原の持っていた機械、それは最近彼が開発した試作品だ。AIM拡散力場に干渉し能力者の演算の障害をするという物だ。試作品であるため、完全には障害できていないが垣根から能力を奪うには充分だった。

「2人ともどいて!」

シヤナは一気に間合いを詰めると贅殿遮那を木原に振り下ろした。しかし木原はそれを難なく避けるとシヤナに殴りかかる。シヤナは上手く木原の拳をはじくと木原に蹴りを入れる。

「アンタなかなかやるねえ。しかしアンタを殺さねえと俺のダチにわりいんだよ」

「オマエにダチなンざいたのかよ？」

一方通行が敵意むき出しの視線で問いかける。木原は鬱陶しそうに一方通行を見ると

「名はダンタリオン、通称教授。俺はお前の能力を発現させるために奴の力を借りたんだよ」

ミサゴ祭りの会場の上空を飛ぶ飛行船に1人の研究者マッドサイエンティストが乗っていた。眼鏡をかけ、白衣を纏うその者は高らかに笑った。

「ハハハハハ！これからエ〜クセレントなショーの始まりですよ
」！」

絶対能力者

「オイオイこれで終いか？」

呆れたように言う木原数多の前にシヤナ、一方通行、垣根の3人は呼吸を荒くしながら白衣の研究者と対峙していた。素手なのに unrelated わらずフレームヘイズ1人と超能力者2人を同時に相手にしている木原は空を見上げる。

「おつ、あの野郎もう始める気か？」

そう言いながらポケットから携帯電話を取りだし

「オイオイ、結局何の実験をするんだよ？」

『あゝ数多ア！何を言っているのですかアナタは。何か解らないからこそ実験するのではないですか！』

「相変わらずだなテメエも」

『それより私の依頼は達成したのですか！？私はこれからエークセレントな実験をしなければならぬのです。彼らに邪魔されたくないのですよ！？』

「わかったわかった。さっさと済ませる」

木原は電話を切ると再び3人に視線を移す。AIMジャマーの効果で垣根の翼は今にも消えそうなくらいぼんやりしている。一方通行は反射をはじめとするベクトル操作が上手く使えない。

先ほどから聞きなれない単語に垣根は口を開いた。

「一体何の話だ？」

木原は意外そうな顔をする

「あ？何だよコイツから聞いてなかったのか？コイツは絶対能力進化（レベル6シフト）実験の被験者だ」

「レベル6だと……？」

学園都市ではまだ存在しないレベル6、一方通行がレベル6になる為に実験を受けていたことを初めて知る垣根。

「まあ実験の内容は第3位御坂美琴のクローンを2万人ぶつ殺すっていう簡単な内容なんだがな」

垣根は目を見開いて倒れている一方通行を見た。彼の中での一方通行はクローンとはいえ2万人の人間を殺してまでレベル6を求めるような男ではなかった。その彼がそんなことをしてまでレベル6になろうとする理由が垣根にはすぐに思い浮かんだ。

学園都市最強の座に君臨する一方通行はその強さと肩書きから対等と呼べる存在はほとんどいなかった。興味本位で彼にケンカを売る^{スキルアウト}無能力者も多いらしい。本当はそんな日々を変えたかったのではないだろうか。

「まあ俺はコイツがレベル6になろうが興味はねえし絶対能力進化実験の研究者とは対立してる立場な訳だからコイツが死んでも困らねえんだよ」

木原は気を失っている一方通行に唾を吐きかけると、視線を垣根に移す。

「まあ俺としてもいろいろ訳ありだよ。だからここでおとなしく殺されてくれ」

「垣根！そこをどいて！」

シヤナの声にハツとし、立っていた位置から横に跳ぶと、

ゴォー！！

紅蓮の炎が木原に襲いかかった。さすがの木原もこの一撃を食らう訳にもいかず瞬時に横へ跳び、炎を回避する。

「チツ、全く厄介なガキだぜ。アンタを殺すのは手間がかかりそうだな」

木原は忌々しげにシヤナを見ると先ほど投げ捨てたバズーカを拾い上げ2人に放った。未元物質がうまく使用できない垣根では木原の一撃は防げない、そう判断したシヤナは贅殿遮那で弾丸を真つ二つに切り捨てた。

ドゴオンー!!

真つ二つになった弾丸が爆発し爆煙が立ち込める。

「……………！」

ゴォー!!

煙の中から紅蓮の炎弾が木原に向かって放たれた。木原はそれを鬱陶しそうに避けるが、

「……………！このクソガキ……………！」

炎弾を囷にシヤナが突っ込んできた。炎弾に意識を向けていた木原は反応が遅れる。しかし、こちらに突っ込んでくるシヤナを見て不気味な笑みを浮かべる。

「くっ……………！」

贅殿遮那の切っ先は木原には届かなかった。シヤナの前には意識を失っている一方通行を盾のように持つ木原数多の姿があったからだ。

本来なら掴むことすらできない一方通行だが意識を失っている上にAIMジャマーで演算の阻害をされている。勿論、木原はそれを理

解していた。3人の中で最も嫌な相手はシャナだ。彼女の攻撃を何としても防ぐ必要がある。（垣根や一方通行と違い能力者ではないため、彼女の攻撃は致命傷になりかねないからだ）

つまり、どんなことがあってもシャナの攻撃を受けることだけは避けなければならないのだ。

「危ねえ、こんなクズにも使い道があるモンだな」

木原はシャナの顔を見て笑うと、

「オイ、どうした？俺を殺したくないのか？遣れよ。ただしコイツがどうなるかは知らねえがな」

ちょうどこのタイミングで一方通行が意識を取り戻した。彼は自分を掴む感覚と、目の前で自分に贄殿遮那を向けるシャナを見て現状を理解する。

「おっと、気がついちゃったか。何ならずと眠っててくれてもよかったのによ」

「テメエ……！」

「ほら、返してやるよ」

木原は一方通行の背中に蹴りを入れる。シャナは咄嗟に贄殿遮那を引く。しかし一方通行の影に隠れて木原が懐から拳銃を取り出したのが見えなかった。

「シャナ！危ねえ！」

ブオン！！

「！」

何らかの自在法が発動した。シャナはそれを感じ取っていたが目の前の出来事にパニックを起こしていた。普段の冷静な炎髪灼眼の姿はどこにもない。

『シャナ！』

アラストールの声でハツとすると木原が再び銃口をこちらに向けているのが見えた。

パン！

銃撃を回避すると垣根に向かって叫ぶ。

「垣根！お前は自在法を止めに行つて！私はコイツを何とかする！」

「次はテメエか？まあ誰でもいいけど」

木原はゆっくりとシャナに近づく。シャナは贄殿遮那を構えるが木原の背後に目を奪われた。

「テメエみたいなクズがどれだけ足掻いたところでテメエを認めてくれる奴らなんかいねんだよ！テメエは一生闇の中でもがいて終わるんだ！」

木原は笑いながら吐き捨てるように言った。

「分かってんだよ、そんなこと。俺はこのまま地獄に墮ちる。テメエにはその道連れになってもらうぞ木原数多ア！」

「ハハハハハハハ！道連れは断るぜ。その代わりに俺がお前を地獄に送ってやる！」

木原は懐から手榴弾を取り出すと一方通行に投げつけた。

「あばよクソガキ」

ドゴオオオオン！！

一方、マーシヨリー達と合流することができたシャナと垣根は御崎市上空に浮かぶ飛行船を見上げる。

『探耽求究か、嫌な奴が出てきたモンだな。さっさとアイツを落として終いにしようぜ』

マージョリーはトーガを纏い戦闘態勢に入る。

「私、アイツとは二度と関わりたくなかったのに」

溜め息混じりのマージョリー。垣根は能力がうまく使えるか確認すると背中から翼を生やし宙へ飛び立つ。シヤナも紅蓮の翼を羽ばたかせ飛行船へと突撃していった。

探耽求究

シヤナ、垣根、マージョリーの3人は宙を飛んで飛行船へと接近する。アラストール曰く『探耽求究は何を考えているのかわからないため予想外の攻撃に対し、ある程度の距離を保ち、飛行船の周りを3人で取り囲む。』

『あゝ数多ア！どういうことですか！？何故、炎髪灼眼の討ち手とあの能力者がここにいますか！？』

飛行船内で紅世の王『ダンタリオン』、探耽求究は友人の名を通信機に向かって叫ぶ。しかし通信機は沈黙を保ったままだ。

『こおゝなつたらこちらも総力戦でいきますよ。ドオオオミノオ！』

『ハイハイ教授』

ゼンマイロボットのような燐子が返事をした。名はドミノ、探耽求究の助手を勤めている燐子である。

『今すぐ奴らを蹴散らすのです！奴らを私に近づけてはいけません！』

『了解です教授！』

ミサゴ祭りの会場のがらくたが一点に集まり奇妙な形の巨人が姿を見せた。が……

『あ、あれ？コントロールがうまくいかないです！？』

がらくたの巨人はふらふらしながら明後日の方向へと進んでいく。
3人はそれを無視して飛行船に攻撃を開始した。

ドゴォ！

紅蓮、群青の炎弾が飛行船に直撃し垣根の未元物質が飛行船に襲いかかる。しかし自在式が施してあるらしくなかなか飛行船にダメージを与えられない。

「チツ、埒が明かねえ。シャナ！そっちは任せた」

そう言うと垣根はがらくたの巨人へと急降下し、

「よお三下あ！」

ガァン！

「……………!?!」

ゴォー!!

聞いたことのない凄まじい轟音がしたかと思うと、

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおオ!!!!!!!!!!」

木原の耳に最強の能力者の咆哮が聞こえてきた。まさかと思いつつ
振り返る木原。

「オイ……………何だそれは!?!」

木原の視線の先には一方通行の姿があつた。額から血を流し、顔が
真っ赤に染まっているがそれでも手榴弾による傷らしき物はなかつ
た。木原は先ほどポケットに入れたAIMジャマーを取り出す。

AIMジャマーはしっかりと機能している。能力の使用は不可能だ。
なのに何故、彼は手榴弾による攻撃で無傷なのだ? いや、それより
も……………

「何なんだ！？その背中に生えている真つ黒な翼は！？テメエ一体……」

彼の背中には真つ黒な翼が顕現していた。長年、彼を研究していた木原数多でさえ見たことのない現象だった。

背中に翼を生やした一方通行は凄まじい速度で木原との間合いを詰めると彼の顔面に拳を叩き込んだ。

「チツ、このガキ！」

木原は体勢を立て直そうとするがその前に一方通行は木原の胸ぐらを掴み上げる。

「（このガキ……一体、何の能力を使ってやがる……！？）」

研究者、木原数多には解らなかった。目の前の説明不可能の現象は何なのかを必死に考える。噴射に似た一對の漆黒の翼、その翼の正体は……

「（新たな制御領域^{クリアランス}拡大の所得……！コイツ、まさか……！）」

「……ihbf殺wq」

木原数多が最後に聞いたのはノイズの混じったような一方通行の声

と耳元に近づく轟音、そして自分に迫る死神の足音だった。

「……………！」

シヤナは先ほどまで自分たちがいた方向へと視線を移した。がらくたの巨人を相手にしていた垣根がシヤナに問いかける。

「どうした？」

「一方通行の気配が凄く小さくなってる」

気配が小さくなっている、それはすなわち、生命の危機を意味する。確かに彼はシヤナを庇って弾丸を頭に食らった。生きているのかどうかも怪しまれる一発だった。シヤナ達に「ここは俺が遣る」と言ったが逆に殺られた可能性もある。フレームヘイズにはただの人間（あの人物を『ただの』という曖昧な表現で片付けていいのかは分からないが）である木原数多の気配がどこにあるのか等は分からないのだ。

「オイオイ大丈夫かよ？」

少し呆れたように言う垣根だったが妙な胸騒ぎがして、不安が募っ

ていたことをシャナに悟られないようにしていたのは秘密である。

『オイ、お二方！さっさと離れる！ジジイがぶっ放すぞ！』

マルコシアスの声にハツとし、地上に目をやると、儀装の駆り手、カムシン・ネブハーウがその力を行使しようとしているのが見えた。岩や砂がカムシンの周りに集まり、瓦礫の巨人の姿となった。先ほどドミノが迎撃用装置に使用していたがらくたの巨人に少し似ている。

「何あれ？」

『あれは儀装だ。儀装の駆り手の神器を使用した物だと聞いている』

カムシンは遠隔操作で巨人を操る。巨人は拳を飛行船へと向けた。

「オイオイまさか……！！」

垣根は嘘だろ！？と言わんばかりの表情をし、飛行船の傍から離れる。シャナやマージョリーも同じように飛行船から距離を取る。カムシンはそれを確認すると、

「ここは一つ、『アテンの拳』で派手に終わらせましょう」

瓦礫の巨人の腕が飛行船に放たれ、粉碎を目的とするロケットパンチと化した。

『こゝれはマズイですねえ〜！ドオオオオミノオオオオオオオ！
こゝは一時撤退しますよ』

『了解です！』

飛行船に乗っていた探耽求究は慌てて脱出装置のスイッチを押す。

ドゴオオオオオオオオン！！！！！！！！！！

ロケットパンチを食らった飛行船は跡形もなく爆発した。あまりの破壊力に垣根は呆れながら言った。

「あの飛行船、防御の自在法がかかってたハズなのに……」

どんな破壊力だよ、と垣根は溜め息をついた。3人は地上に降り立つとカムシンの元へと集まる。

「ああ、お疲れ様です。面倒な奴らが片付いたところでそろそろ『調律』を始めます」

そう言つてカムシンは一美や悠二達を待機させている場所へと向かった。マジヨリーも後に続く。しかしシヤナは迷っていた。悠二

と一美を一緒にさせているのは気分が悪いが一方通行のことも気になっただけだ。

「行けよシャナ。一方通行の所には俺が行つといてやるよ」

そう言つてシャナが何か言う前に垣根は翼を生やして飛び立った。それでも迷つたシャナはとりあえず一方通行の様子を知るために垣根の後を追つた。

「垣根や一方通行が紅世と関わつてたのは意外だったな」

啓作が笑いながら悠二に言った。一美は今、カムシンの調律の手伝いをしているらしい。悠二、啓作、栄太の3人は紅世についての話で盛り上がっていた。

「あの2人、かなり強いんだよ。学園都市で1位と2位らしいし」

「おいおい、垣根はそんなこと言つてなかつたぞ？」

栄太は驚きを隠せないようだ。クラスメイトが軍隊を1人で相手にできるような猛者だと知つたら驚くなと言う方が無理かもしれない。

「いろいろ事情があるんじゃないか？」

「でもスゲエよな。羨ましいぜ」

そんなくだらないやりとりで時間は過ぎてゆく。他の者の思いとは

別に。

「随分、遅かったね」

垣根とシヤナが先ほどの場所に着くと、ちょうど近くに止まっていた救急車が走り去った。封絶は解かれていた為、2人の前にはかなりの数の医者がうろついていた。

「アンタは確か、『冥土返し』（ヘヴンキャンセラー）。学園都市の名医が何故ここに？」

垣根が問いかけると冥土返しは落ち着いた様子で答える。

「この街に木原数多がいる、と学園都市上層部は連絡を受けてね。君らとぶつかる可能性もあるから念のため、学園都市から派遣されたんだよ」

「一方通行は？」

シヤナが訊ねる。

「かなり危険な状態だね。今、応急措置をしているところだよ」

カエルそっくりな名医は心配そうなシヤナの顔を見て優しく笑うと、

「彼は大丈夫だよ。死なない限りは助けてあげられるからね」

そう言って手を振りながらその場を後にした。少し安心したようなシヤナの顔を見て、

「あの野郎、退院したら地獄を見せてやる」

と、笑いながら垣根は夜空を見上げた。

探耽求究（後書き）

探耽求究やミサゴ祭りについての話が適當になってしまいました。

（汗）

木原数多もお早い退場でさらにカムシンやマージョリーの出番少ない！と自分でも思っています。（笑）

文の質が落ちつつありますが精一杯頑張らせていただきます。

学園都市

悠二、シヤナ、一美、池、緒方の5人は学園都市のゲートをくぐって絶句した。彼らの顔には同じ台詞が分かりやすく書いてある。「何なんだこれ!？」と。

特別宿泊研修ということで学園都市に来た5人は学園都市と御崎市との、否、現代との違いに衝撃を受けた。

多少のカルチャーショックがあるのは理解できる。学園都市は今より数十年科学が進んだ街だ。初めて来た者なら驚くのは当然だろう。しかし、学園都市という街は彼らの想像を遥かに凌駕していた。人生でこんな光景を目にするのは今回が最初で最後だろう。

「うわぁ……」

皆、言葉が続かない。それを見て垣根が呆れたような顔で言う。

「オイオイ、いつまでそんな面してるつもりだ?特に池、お前グループ長だろ?すっかりしろ」

垣根の言葉でカルチャーショック状態から脱け出した池はポケットから手帳を取り出して予定の確認をする。

「えーっと、今から男女別に学園都市の学校の授業を見学しに行つて、その後、夕方まで自由行動。今日はそんな感じかな」

大まかに予定を説明し手帳をポケットに入れる池。シヤナや悠二、一美はまだ辺りをキョロキョロと見回しているが緒方真竹の視線は一点に釘付けになった。

「ねえ、垣根。1つ聞きたいんだけど」

「何だ？」

「どうして当たり前のように佐藤と田中がいるのよ!？」

垣根の後ろで辺りを見回していた啓作と栄太は名前を呼ばれたことに反応して緒方の方を見る。2人の代わりに垣根が理由を説明する。

「この2人は俺が招待したんだ。学園都市側も承認してくれたし、御崎高校の教師どももちゃんとOKしてくれたぜ？」

嘘である。

笑いながら説明する垣根だが啓作と栄太が学園都市へ行くということを担当を脅してまで承認させたことを誰も知らない。担任も担任で垣根が職員室で暴れたことがトラウマになっているらしい。

ふーん、とあまり納得のいかない表情の緒方だったがあまり関心がなかったらしくそれ以上の言及はしなかった。

5人は男子と女子に別れてそれぞれの場所へと向かった。池と悠二、啓作、栄太の4人は『とある高校』、シヤナ、一美、緒方の3人は『霧ヶ丘女学院』への研修を予定している。垣根はその間、自由行動である。

「なあ、学園都市の学校ってどんなことを勉強してんだろうな」

栄太が少しわくわくしたように言う。

「難しいことばっかり勉強してそうだよな」

「超能力の練習とかしてるんじゃないかな。垣根とか一方通行とかみたいな感じで」

「えっ、あの2人ってやっぱり超能力者だったのか？」

悠二の一言に食いついたのは池だ。彼だけが一方通行と垣根が超能力者だということをもとに知らなかったのだ。そんな会話をしながら目的地へと向かう4人。その途中で……

「なあいいだろ？」

「俺達と遊びに行こうぜ」

5人の不良に絡まれる少女、という場面に遭遇した悠二たち。どう見ても困惑して泣きそうな少女を見て、

「おい佐藤、あの子、助けてやろうぜ」

「ああ、俺もそう言おうと思ってたとこだ」

喧嘩っ早い2名に呆れる悠二と池。研修中に騒動を起こしたくない池は、

「でも相手は5人だよ？2人对5人は歩が悪すぎる」

池の忠告に啓作はにやりとすると悠二たちを指さし、

「4人对5人なら勝算はあるだろ？」

そう言つて不良達へと突撃していく。栄太も啓作に続いて走り出す。

「おい、その子嫌がつてるだろ。女の子1人を集団で囲んで恥ずかしくねえのかよ」

不良たちが何かを言う前に啓作は不良の1人に殴りかかった。中学では『狂犬』と呼ばれた彼の拳を食らった不良は一発でノックアウトする。

「この野郎……ぐはあ!？」

啓作の背後で鉄パイプを振り上げた少年の脇腹に栄太の蹴りが入った。そのままバランスを崩し倒れ込む不良少年。その隙に少女は不良達から離れ啓作達の後ろに隠れるように立つ。悠二と池も合流し数の差ではこちらに有利な状況となった。

それを見た不良のリーダーのような男が前に出る。

「何だテメエら。正義のヒーロー気取りつてか？笑えねえ」

そう言つとボウツ、という音と共に手のひらから火の玉が現れた。

「これでも俺は強能力者（レベル3）の発火能力だ。パイロキネシステメエら全員、大火傷させてやるよ！」

不良は5人に向かって火の玉を投げつける。5人は慌ててそれを避

けると路地裏へと逃げ込んだ。

「おいおい、あんなのアリかよ!？」

栄太が走りながら呟く。池と悠二は盛大に溜め息をついた。

「だから止めとこうって言ったのに」

「何だよ、それなら見て見ぬ振りすればよかったのか？」

「そこまで言わないけど……」

路地裏に入れば視界は悪くなる。火の玉の命中率はかなり低下するハズ、というのが啓作の読みだったが、その読みは予期せぬ形で裏目に出た。

「しまった……！行き止まりだ！」

彼らは今日、初めて学園都市に訪れたのだ。地理的感觉で言えば不利なのは明らかだった。

「ハハハハハッ！観念しな！」

気づけば背後に先ほどの不良が立っていた。勝ち誇ったような表情で両手に炎を揺らめかせながらゆっくりと近づいてくる。

「正義のヒーローなんて俺様の敵じゃねえんだ！弱えくせに正義面しやがってよ！」

不良は炎を投げつけようと手を後ろに振りかぶる。

「なら、ちいつと悪党と遊んでいけよ」

不良が動きを止めた。振り返るとそこには現代的な杖をつき、チョーカー型デヴァイスを着けている一方通行が呆れた表情で立っていた。不良は一方通行を見て目を見開くと、

「あ、一方通行？何でここに？」

「ああ？テメエはこの前、俺にケンカを売ってきた馬鹿だったか。何だよ、モオリベンジってかア？」

その言葉に不良は顔を真つ青にすると、「覚えてろっつ」という漫画やアニメでよく聞くような捨て台詞を吐いて走り去った。

「何なんだ一体？」

一方通行は溜め息をつきながら悠二たちに視線を向ける。

「久しぶり、一方通行」

悠二が声をかける。ミサゴ祭りでの戦いで、木原数多の放った弾丸を頭に食らった一方通行はその後、御崎市の病院で応急措置をおこない、さらに学園都市で冥土返しにより手術を受けた。頭蓋骨の破片が前頭葉に刺さって計算能力と言語中枢に後遺症が残るだろうと垣根から聞いていたのだ。学園都市に入院していたとは聞いていたがこんなに早く会えるとは思わなかった。

「ところでオマエ達、こんなとこで何やってんだア？」

「いや、研修に行く途中でいろいろあってさ」

苦笑いしながら答える悠二。一方通行は表情を変えないまま、

「まあいい。オマエらをたまたま見かけたから声をかけたっただけだからなア。大した用はねエ、研修に行きなア」

言われてみれば研修の予定時間まであと8分。不良に絡まれて遅れたなど言うわけにはいかない。4人はお礼を言う少女と別れると、研修の場所である『とある高校』へと足を進めた。

一方、悠二たちとは違って無事に霧ヶ丘女学院にたどり着いたシャナ、一美、緒方は学院長から一通りの説明を受けた後、待ち合い室で待機していた。

「こんにちは、貴女たちが御崎高校からの研修生つてことでもいいのかしら？」

ドアが開き、長い赤髪を二つに分けた少女が入ってきた。緒方がい、と返事をする少女は手を差し出した。

「私は貴女たちの案内役を勤める、2年生の結標淡希。よろしく」

学園都市（後書き）

霧ヶ丘か常盤台か（御坂か結標か）を迷いましたが、シャナたちは高校生なので一応、霧ヶ丘にしました。何故結標なのかというところが彼女以外の霧ヶ丘の学生を知らないからです。（笑）

禁書の方のキャラも少しずつ出していく予定です。

幻想殺し

上条当麻は不幸に愛された少年である。その不幸ぶりは学園都市に
いる学生達の頂点と呼ばれても過言ではないと言われるほどの物で
あった。

それは彼の性格が所以しているのだが、しかし彼は彼の性格云々の
話では済まされないレベルの不幸体質だった。能力はレベル0の無
能力者だが『不幸』のレベルはすでにレベル5を飛び越え、レベル
6だろう。

「不幸だー！ーっ！」

当初の目的地、とある高校に着いた悠二達は校門の前で、その上条
当麻にヘッドロックをかける吹寄制理を見て呆然とした。2人は学
校の案内係として抜てきされたのだが（吹寄は別として、上条はク
ラスの男子に押し付けられただけである）、遅刻した上条にキレた
吹寄が制裁を下している最中だった。一般人から見れば『恐ろしい
女子高生と情けない男子高生の図』にしか見えない。呆然とするの
は当然だろう。

「こんにちは、私は一応、案内係を勤める吹寄。よろしく」

上条の意識を落とした吹寄はまるで屍のような彼を無視して自己紹
介をする。

「今日はよろしくお願ひします」

池が挨拶をすると吹寄は上条を指差し、

「コイツは上条、上条当麻。ただの馬鹿だから気にしないで」

気絶している上条の制服の襟首を掴み上げる。悪戯をした猫をつまみ上げるようなイメージが持てるが、現実には首吊り状態で呼吸困難に陥る上条。窒息死寸前で意識を取り戻すと、

「ぶはああっ！死ぬ！吹寄さん、マジで死ぬって！」

吹寄の手を振り払い、気孔を確保する。それを見てチツ、と悪戯っぽく舌打ちをする吹寄を見た上条は彼女に抗議する。

「今の舌打ちは一体！何だかお前からそこはかとなく悪意を感じるぞ！」

そう言っつて悠二達に気づくと（気づくのが遅すぎるが）、

「えーと、この『とある高校』の案内係の上条です」

一応、自己紹介をして握手を求めているのか右手を差し出す。悠二は差し出された手を何気なく握った。

「……………」

握った、という表現は間違っているのかもしれない。単純に握った、と言うより、触れたと言うのが正しいだろう。上条の手に触れるな

り、悠二はすぐに手を放して自分の右手を見る。彼の右手に触れた瞬間、何故だか変な感覚に襲われたのだ。

「（何だ？今の……？）」

上条も首を傾げながら悠二の顔を見ていたが何故か妙に張り切っている吹寄に腕を掴まれ、

「ほら上条、さっさと案内するわよ」

「なんか張り切りすぎじゃね？もっとこう……いつも通りに」

「上条の分際で私に指図するの？」

「いや、指図なんかしてないじゃん」

「あの……、俺たちの存在忘れてませんか？」

2人のやり取りを見ていた栄太が苦笑いしながら言った。吹寄はこほん、と咳払いすると、

「ああ、ごめんなさい。それじゃ私についてきて」

「結標さんも能力者なんですか？」

霧ヶ丘女学院の廊下を歩きながら学校の説明を受けていた緒方が突然問いかけた。彼女の質問に霧ヶ丘女学院案内係、結標淡希は頷く。

「ええ、私も能力者よ」

「どんな能力なんですか？」

結標はにこりと笑うと右手を3人の前に出した。

シュン！

「あ！」

「え！？」

「……………！」

気づくと結標の手のひらにシャナのコキユートスがあった。シャナは自分の首から下げていたハズのそれがなくなっていたことに気づく。偽物等ではなく間違いなく本物のコキユートスだ。

結標は笑顔のまま、3人の顔を見ると、

シュン！

コキユートスが彼女の手のひらから消えた。シヤナは驚きを隠すことなく、

「どこに行ったの？」

シヤナの言葉に緒方も一美も結標の顔を見る。結標はにやにやしながらシヤナの胸元を指差した。

「あら、そこにあるじゃない」

シヤナは自分の胸元に視線を移す。すると先ほどまで結標の手の上にあったコキユートスが元通り、シヤナの首にかかっている。何が起こったのか分からない3人に結標が説明する。

「私の能力はレベル4の座標移動↑ウポイントって言うの。簡単に言えば『物体を瞬間移動させる能力』ってところね」

歩いていると、教室の窓から授業の様子が見えた。黒板には教師が『自分だけの現実』と書いた文字を指さして何かを熱く語っている。「超能力は自分だけの現実、パーソナルリアリティを持つことで発現させるものなのよ。ここに来て学園都市に憧れるかもしれないけど、私たちのような能力者になれない学生は大勢いる」

結標は溜め息混じりに続けた。

「レベルの高い超能力を扱えるってことはそれに値する演算能力があるってこと。この学校はそんな優秀な学生が集められた場所なのよ」

「……………！」

突然、封絶が張られた。徒の気配に気づいたシャナの髪や瞳が紅蓮に染まる。

「ゆかりちゃん……………」

一美もカムシンから渡された宝具の効果で封絶内で動ける。戦闘体勢に入るシャナを見て複雑な気持ちになる一美。自分はどうすればいいのかを考えていると、

「はぁ……………またなの？面倒ね……………」

先ほどまでそこにいて、しかも動けないハズの結標淡希が溜め息をついた。シャナと一美は驚いて結標を見る。

「貴女も動けるの？」

「あら、貴女はもしかしてあのシスコンが言ってたフレイムヘイズ？」

一美の問いかけを無視してシャナに訊ねる結標。

「私は天壤の却火アラストールのフレイムヘイズ。炎髪灼眼の討ち手シャナ」

「へえ、フレイムヘイズってホントにいたのね。てっきりあのシスコンのでまかせかと思ってた」

感心した様子の彼女に一美が問いかけた。

「あの、どうして貴女は封絶内で動けるんですか？」

「私達、能力者は無意識にAIM拡散力場っていうのを放ってる。私たち暗部はそれに自在法っていう仕掛けを施しているの」

結標は窓の外を見て何かを確認すると、

「詳しい説明は後でするわ。今は徒を倒すのが先」

そう言って目の前から姿を消した。シャナも窓から飛び出ると紅蓮の翼を生やして飛び立った。

「封絶!？」

とある高校の、それもとある教室で超能力とは何なのかというレクチャーを受けていた悠二、啓作、栄太の3人は窓の外を見た。封絶のせいで池も吹寄も動かない。しかし、とある少年は違った。

「またこの現象かよ？最近多いよな」

3人は声のした方向へ目を向ける。そこには頭を掻きながら辺りを見渡す上条当麻がいた。

「何で封絶で動いてんだ？」

栄太が訊ねた。上条はきよとんとした表情をする。

「は？封絶？何それ？」

「この現象のことだよ！何でアンタは動けるんだ？」

今度は啓作が訊ねた。上条は訳が分からないと言わんばかりの顔で、

「多分、俺の右手のせいかな？」

「右手？」

悠二が反応した。先ほど握手をした（正確にはしていない。触れただけである）時、彼の右手に触れた瞬間、妙な感覚に襲われたのを感じ出したからだ。

「俺の右手には『幻想殺し（イメージブレイカー）』っていう異能の物なら何でも打ち消す力が宿っているんだ」

ドゴオン！

上条が言い終えたところで大きな揺れと共に外から轟音がした。

「とにかく、外の様子を見に行こう」

「上条、屋上にはどこから上がるんだ？」

「こつちだ、付いて来い！」

そう言つて上条は走り出す。3人はその後を追つた。

上条達が屋上に着く前に、金髪でサングラスをかけた少年が屋上で空を見上げていた。

「俺たち学園都市暗部にケンカを売るとはいい度胸だにやー。盛大に歓迎してやるぜいバル・マスケ仮装舞踏会」

学園都市暗部の実力

屋上上がった上条達は先ほど轟音のした方向を見る。すると向こうで青白い閃光や爆煙が立ち込め、紅蓮の火柱が立つのが見えた。

「何だあれ？」

啓作が目を丸くして呟く。徒の炎か、それとも何らかの自在法が発動したのかは分からないが閃光のほとばしる方向でシャナが徒とすでに交戦中らしい。

「俺たちも行くか？」

栄太の言葉に他の3人は頷くと、振り向いて……その場で凍りついた。そこには錆びた青銅のような不気味な炎を纏った帽子とマント、手袋が浮いていてこちらの様子を伺っていたからだ。

「貴様が零時迷子のミスセスか。悪いが私と一緒に来て貰おうか」

気づけばあつと言う間に、悠二達4人は紙の西洋騎馬隊に包囲されていた。戦闘の経験はなく、さらに栄太と啓作、上条の身の安全を考えると素直に従う他ないだろう。悠二が徒に一步近づこうとしたその時、この空気に似つかわしくないようなちらけた口調で誰かが言った。

「おいおい、お前は千征令じゃないかにやー。確か、虹の翼メリヒムに消されたんじゃないか？」

千征令と呼ばれた徒が振り返ると金髪サングラスに制服の下にアロ

ハシャツを着た少年が立っていた。

「つ、土……御門？」

上条は驚きを隠せないままいつもクラスで上条と並んで^{デルタフォース}馬鹿と呼ばれている少年の名を口にする。

「貴様は以前、イギリスで会った自在師か。なるほど、この封絶も貴様が張ったのだな」

「まあな、この街でお前たちバルマスケに派手に暴れられたらいろいろと迷惑なんだよ。他にも貴様の部下の徒がいたようだがそつちは麦野達『アイテム』に任せてあるからそろそろ終わってる頃だぜい」

シュン！

土御門と呼ばれた少年と千征令の間に突然、紅蓮の炎を纏った少女が現れた。彼女の姿を見て動揺する千征令。

「ば、馬鹿な！？炎髪灼眼の討ち手だと！？一体どこから……」

『千征令オルゴンだと……！バルマスケか……！』

アラストールの声を聞いたシャナは何かを思い出したような表情をする。

「千征令オルゴン……？確かずいぶん前に討滅されたんじゃない……」

疑問ありげな顔で千征令オルゴンを見て、贄殿遮那を構える。動揺しているオルゴンに土御門が言葉を投げ掛けた。

「まあお前みたいなたつ端が来たところで学園都市は崩れはしないぜい。お前レベルなら俺でも始末できるぜよ」

その言葉にオルゴンはシャナから土御門へと視線を移した。

「たかだか人間の自在師ごときにこの私が倒せるとでも？」

「だから、お前は人間の自在師にすら負けちゃうほどの雑魚だって言ってるんだにゃー。イギリスで戦ったことをもう忘れたのかにゃー？」

「おのれ……！この私の実力を身を以て知るがいい！」

土御門の挑発に西洋騎馬隊が土御門に襲いかかる。しかし、金髪サングラスの少年は慌てる様子もなくポケットから折り鶴の入ったケースを取り出す。

「さあて、聞いて驚け、見て驚け。イギリス清教でもトップクラスの自在師、土御門元春さんがド派手な自在法を特別に使ってやるにゃー！」

そう言って折り鶴の入ったケースを前に放り投げる。するとケースの中に入っている折り鶴が輝き、青白い壁を作り出して騎馬隊の行

く手を阻む。土御門はさらに3つのケースを取り出すと同じように前に投じた。3つのケースは1つ目のケースと同じように青白い壁を作り出す。青白い壁は文字通り天を突いた。壁を発現させたまま青白い光はさらに輝きを増す。その結果、オルゴンの騎馬兵達は土御門の自在法によって結界の中に封じられるような形になった。

「なあ千征令」

「……………？」

「前にも言っただかもしれねえが……………」

土御門元春はにやりとした。

「俺ウツツキって天邪鬼キなんだぜい」

その言葉に千征令オルゴンはハツとした。たつた今土御門が発動させた自在法は自分の操る紙の軍勢『レギオン』の動きを封じ、次の攻撃へと繋げるための物だろうと思っていた。

しかし、もし違っていたら？別の自在法なのだとしたらその意味は……………

「残念ながら俺はいろいろ忙しいのにやー。そこに炎髪灼眼のフレームヘイズがいるみたいだけどお前の相手は『アイツ』にやってもらうぜよ」

ゴバア！！！！！！

青白く輝いていた土御門の自在法がオルゴンのレギオンもろとも吹き飛んだ。辺りを見渡すと土御門の姿はなく、代わりに白い翼の生えた少年の姿があった。

「おいおい、これは俺の仕事かよ？」

「垣根！？」

シヤナと悠二が同時に少年の名を呼ぶ。

「垣根だと？そうか、貴様が将軍が言っていた超能力者か」

「あゝあ、何でこんなに徒と遭遇するんだよ！？遭遇率高過ぎだろ……面倒くせえな」

垣根はうんざりした表情をして、

ゴォー！！

凄まじい速度で間合いを詰めると6枚の翼をオルゴンに叩きつけた。

勝負は一撃で決まった。垣根の攻撃を受けたオルゴンは反撃する間もなく消滅した。垣根は服についた埃を払いながらシャナ達に話しかけた。

「話さなきゃならねえことがある。研修が終わったら俺の家に集合な」

そう言つてポケットからメモ用紙を取り出す。

「一方通行のケータイ番号書いてるからアイツと合流してから来い。俺はまだやることがある」

メモ用紙をシャナに渡すと垣根は翼を羽ばたかせてどこかに飛び立った。後に残ったシャナと悠二、啓作、栄太、そして、「一体何だったんだ」と今起きた騒動が全く理解できていない上条当麻はただただ垣根の飛び立った方向を見ているだけだった。

ちなみに封絶が解けた後、シャナの姿が見当たらないことに緒方真竹がパニックを起こして「ゆかりちゃんをどこにやったの!？」と結標に食って掛かったのはまた別の話である。

垣根帝督の家はかなり立派なマンションだった。学生なのに何でこんな立派な所に住んでいるのか疑問を持つほどである。

「全員揃ったな？」

リビングのソファーに腰をかけていた垣根がのんびりと言う。今、この場にいるのはシャナと悠二、一緒に来た一方通行、ここに泊まる予定だった啓作と栄太の合計6名だ。

「まず今日聞いた話だが何故、俺と一方通行が御崎市に派遣されたかについてだ」

全員が腰を下ろすのを確認すると垣根はゆっくりと話し始めた。

「御崎市に狩人って徒が現れたっていう情報を聞いた上層部が俺たちを派遣することに決めたらしい。俺や一方通行みたいなレベル5の能力者は稀有なA I M 拡散力場を放ってる。それは封絶の干渉を受けない、だから御崎市の徒と戦うことで実戦経験を積ませることが目的だったらしい」

結標は自在法を使っていると聞いていたことを思い出したシャナは垣根に訊ねた。

「ねえ、この街に自在師はいるの？」

「俺の聞いた話じゃあ、この街で自在法が使えるのは土御門元春だけだ」

あの金髪サングラスの、と垣根は付け足した。

「上層部だつて命は惜しい、そんな訳でレベル5の能力者を中心に対徒用の組織を結成した。それが学園都市暗部組織、土御門元春は数ある組織をまとめる総帥みたいな存在だ」

「じゃあここは徒と戦える戦力が揃っているのか？」

啓作の質問に垣根は頷く。

「それだけじゃない。ごく稀にだがフレイムヘイズもここを訪れる。ここは情報を仕入れるにはもってこいの街だ。この街には外界宿もアウトロー何か所があるらしい」

「アウトローって何だ？」

「俺にもよく分からねえ」

『アウトロー外界宿とはフレイムヘイズ同士の情報交換の場だ。そこではフレイムヘイズだけでなく人間もいる』

アラストールの話である程度のイメージはできた一同。啓作は何か考えているような様子でぶつぶつと何かを呟いている。

「それとバルマスケってのが不穏な動きを見せてるらしいけどまだ気にすることじゃねえしな」

そこまで言うと垣根は一方通行に視線を向けた。

「ところで一方通行、お前、能力が使えなくなっただってのは本当か？」

「……!？」

一同の視線が一方通行に集まった。皆、一方通行が頭に弾丸を食らって手術をした、ぐらいしか聞いていなかったからだ。

「ああ、全く使えねエ訳じゃねエ。能力の使用はせいぜい30分間だけだ」

首に付けているチョーカーを指差し面倒くさそうな一方通行。

「つか、あの後、木原の野郎はどうしたんだ？」

「……さアな」

素っ気なく答えると一方通行は『あの現象』について考える。頭が真っ白になっていたせいか自分が一体どんな演算をしたのか覚えていないのだ。

「……!」

突然、携帯が鳴った。一方通行はケータイを開くとディスプレイに『打ち止め』と表示されていた。溜め息をつきながら電話に出ると、

「遅い〜! ってミサカはミサカは帰りの遅いアナタに怒ってみたい」

「すぐ帰るつつつたるオが。そんなことでいちいち電話してくんじやねエクソガキ」

そう言うと相手が何かを言う前に電話を切る。学園都市最強の能力者はもう一度盛大に溜め息をつく。

「第2位、悪イが先に帰るぞ」

と何やら怪訝な顔をして出て行ってしまった。その後、悠二とシヤナも宿泊先へと向かい、後に残った垣根、啓作、栄太の3人は夜が明けるまではか騒ぎをしていた。翌日、3人の目の下に大きな隈ができているのは当然の結果であった。

万条の仕手ヴィルヘルミナ・カルメル

万条の仕手ヴィルヘルミナ・カルメル、ならびに夢幻の冠帯ティアマトーと悠二達が出会ったのは今回が初めてである。彼女は今、坂井家のリビングで椅子に座り、向かいの席に座っている悠二、垣根、一方通行を無表情ではあるがまるで嫌な物を見るかのような視線で睨み付けている。

学園都市から戻った悠二達（一方通行と垣根を含む）は御崎市の入り口で警察から事情聴取を受けた。何でもミサゴ祭りの翌日、つまり悠二達が学園都市へと向かった日に、血まみれでズタズタに引き裂かれた白衣が祭りの会場で発見されたらしい（ちなみにこの話を聞いた垣根も一方通行もひきつったような苦笑いを浮かべていた）。御崎市では警察沙汰になるほどの事件はほとんどなかったために街中が混乱しているのだ。祭りの片付けにすら手が回らないほどである。

「あれ？あの飾りは……」

以前、探耽求究の実験を弔詞の詠み手マージョリー・ドーと儀装の駆り手カムシン・ネブハーウと共に阻んだ時に隣子として暴れまわった鳥の飾りも片付けられることなく残っていた。悠二は積み上げられた飾り物から何やら妙な胸騒ぎを感じ取ったが、

「気のせいかな……」

「じゃあまた明日」

学園都市から戻った一同は解散した。シャナと悠二は坂井家へと向かう。すると坂井家の前で奇妙な格好をした女性が立っていた。人形のような端正な顔だち、ヘッドドレス、メイド服、背中に背負っている大きなリュック。彼女を知らない一般人が見れば怪しさ全開の雰囲気を漂わせているその女性がこちらに気付く。シャナにはその顔に見覚えがあった。

「ヴィルヘルミナ……！」

シャナの幼少時、お世話係でありそれと同時に夢幻の冠帯ティアマトーと契約している優秀なフレームヘイズ、ヴィルヘルミナ・カメルは微笑みを浮かべる。

「お久しぶりなのであります」

『本当に久しぶりだな、万条の仕手、夢幻の冠帯。わざわざここまで来るとは何か急用でもあるのか？』

「いろいろと報告しなければならぬことがあるのであります」
そう言うとシャナの隣に立っている悠二に気づくと微笑みは消えて無表情になると、

「貴方が零時迷子のミステスでありますか」

「……！知ってるんですか？」

「アウトローからの情報でこの街に零時迷子のミステスがいるとの連絡を受けているのであります。報告によればこの街には他に弔詞

の詠み手と蹂躪の爪牙、それと超能力者なる者がいると」

『掌握』

ヘッドドレス型の神器、ティアマトーがぼそつと言う。アラストー
ルは感心したようにうむ、と言うと、

『話があるのならばその2人の超能力者も同席させるべきだ。奴らは強い。これまで何度も共闘してきたが、あ奴らが話を理解していれば心強い』

「天壤の却火がそう言うのなら私はいつこうに構わないのであります」

『承認』

そんな訳で垣根と一方通行を坂井家に呼び、説明をしようとしたのだが2人を見て無表情の顔に妙な陰りが入る。

「あなた方が超能力者の……」

「俺は垣根帝督だ、よろしくな、万条の助手」

「一方通行だア、ヨロシク」

シヤナは平井ゆかりの存在に割り込み、平井ゆかりとして御崎市で過ごしている。当然ながら帰る家も平井家であるハズなのだが最近
はよく悠二の家に泊まっている。

そのことを先ほど知ったヴェルヘルミナはすこぶる機嫌が悪い。以

前からシャナの養育係をしてきたヴィルヘルミナには悠二が完全無欠のフレイムヘイズであるシャナに悪影響を及ぼすのでは？と思っているのだ。

それは垣根や一方通行とて例外ではない。悠二もそうだがこの2人はなお警戒しなければならない。そんな訳で鋭い眼差しで3人に視線を走らせているヴィルヘルミナ・カルメル。

「オイオイ、ナ二人のことそんな鋭い眼光で睨み付けてくれちゃつてるワケ？」

一方通行がうんざりしたように言う。向かいの席に座る人間に鋭い視線をずっと向けられていては気分がいいはずがない。ヴィルヘルミナは黙ったまま視線を悠二の隣で苦笑いを浮かべているシャナに向ける。

「私がこの街に来た理由はバル・マスクに関することなのであります」

「バル・マスク？」

「以前、この街に千変シュドナイが現れたとの情報を聞いたのであります」

「……………！」

千変シュドナイ、強大なる紅世の王。徒の集団『バルマスク仮装舞踏会』の三柱臣リニティの1人で將軍と呼ばれるほどの実力者。以前、愛染の兄妹と共にこの街を訪れたことを思い出す。

「その時から、この街に零時迷子のミステスがいると知ったバル・マスケに不穏な動きありとの知らせが入ったのであります」

その言葉に悠二もシャナも反応する。学園都市で千征令オルゴンと遭遇したのを思い出したからだ。オルゴンもバル・マスケに所属する徒であった。

「そのバル・マスケって奴らは強いのか？」

垣根が興味深そうに問いかける。その問いにヴィルヘルミナの代わりにアラストールが答えた。

「バル・マスケは徒で組織された集団で現在の徒の集団の中で最も強大な組織だ」

「千変シュドナイ、逆理の裁者ベルペオル、頂の座ヘカターの三柱^{トリ}を中心とした巨大な組織であります」

ヴィルヘルミナが補足する。垣根は前に千変シュドナイに逃げられているため、彼に対する闘争心は並ではない。

「そのバル・マスケって奴らが零時迷子を手に入れるために動いているってんなら叩き潰せばイイだろオが」

一方通行が面倒くさそうに言ったがヴィルヘルミナは首を横に振った。

「バル・マスケとの全面衝突は世界のバランスを歪める恐れがあるのであります。簡単にぶつかる訳にはいかないのであります」

『理解要求』

それを聞いて盛大に溜め息をつく一方通行。

「私はバル・マスクとの全面衝突を防ぐために、そして零時迷子の監視をするためにここまで来たのであります」

ヴィルヘルミナの視線に気圧される悠二を見て、アラストールが呆れたように言う。

『鍛錬不足だな』

「そうね」

シヤナもぼそりと呟く。言い訳をする悠二を無視して垣根はヴィルヘルミナに訊ねた。

「アンタ、強いのか？」

ヴィルヘルミナはその問いには答えず急に椅子から立ち上がると興味がないのかさっさと部屋から出て行ってしまった。

その直後、一方通行の携帯がなった。面倒くさそうな表情で電話に出る。

「……………」

「ああ。……………待て、どオいうことだ？」

「……………」

「わかった」

彼は電話を切ると垣根の方を向き、そして言った。

「オイ、第2位。話がある」

ミステスの破壊

「何だよ第1位。さっきの電話、学園都市からの指示って訳じゃねえよな？」

一方通行に言われて坂井家の屋根の上上がり垣根は怪訝な顔をして問いかける。学園都市にこき使われるのは気に食わないのだ。一方通行は無表情のまま答えた。

「学園都市のクソつたれどもからだ。この御崎市に新たな徒が現れる可能性があるからどの暗部にも属してねエ第7位が来るかもしれないねエらしい」

「第7位って……削板そぎいたが？マジかよ……」

削板軍そぎいたくんは覇、学園都市のレベル5の超能力者で序列は第7位。世界最大の原石と呼ばれる男である。他に銃で頭を撃ち抜かれても（本人曰く根性で）死ななかつたり念動力系の能力者でありながら本人ですらどんな能力なのか理解していないなど、まさに正体不明な人物である。

「まア来るつつつても一時的なモンらしいがな。俺が使えねエ時の保険らしい」

そう言つてチョーカーを指さす一方通行。能力使用に制限があるため、戦闘に関して不安がある。だからこそ、念のためにレベル5の削板軍覇の派遣を決めたらしい。

「あの根性馬鹿がこの街にねえ……。それはそれで面白いかもな」

「ああ……だがさっきの万条の仕手の話と合わせて考えると坂井と炎髪の味方をすりゃア、バル・マスクと学園都市も衝突することになるだろオナ」

徒で構成された巨大組織と学園都市が衝突すれば学園都市側に不利なのは明らかだ。

「その時はバル・マスクと全面戦争といこうじゃねえか。厄介なのは千変と数人の紅世の王だけだぜ？」

「だが学園都市でまともに戦えるのは俺たちレベル5の能力者と暗部に所属している奴らだけだろオガ。向こうは徒の集団、殺り合うには不利すぎだ」

一方通行はそう言うと悠二達のいる部屋へと戻っていった。垣根はやれやれと頭を搔くと一方通行の後に続いた。

その後、一方通行は暇潰しに散歩に出掛けた。脳にダメージを受けたせいで能力使用時以外は杖をつかなければまともに歩くことすらできない。そんな彼だが暇潰しに散歩をすることもあるのである。

「はア、つまんねエ……。……ああ？」

ミサゴ祭りのあった河原を歩いていた一方通行の目にこちらに向かって走ってくる茶髪の小学生くらいの少女の姿が映った。どこかで見たことのあるその少女は一直線に、真っ直ぐに走ってくると杖に体重を乗せている一方通行に跳び付いた。

「やっと見つけた〜！ってミサカはミサカは喜びのあまりあなたに跳び付いてみた〜！」

「あア！？このクソガキ！ここで何してやがる……痛エ！？」

杖に体重を乗せていた一方通行は凄まじい速度で跳び付いた少女の体重に耐えられず、そのまま少女に押し倒されるような形で倒れた。少女はそんな一方通行の上に馬乗りになると、

「ミサカはあなたに会うために学園都市からはるばるやって来たのだ〜ってミサカはミサカはここまでの苦勞を払拭するためにハイテンションであなたに事情を説明してみる」

少女の名は打ち止め（ラストオーダー）。学園都市第3位の能力者である御坂美琴のクローンの1人で製造番号20001号の欠陥電リアルナンバー気だ。レディオン

「だから何しにここに来たかを聞いてンだよ！つかさつさとそこから退け」

馬乗りになっている打ち止めを吹っ飛ばすほどの勢いで立ち上がると、不満そうな顔で文句を言っている打ち止めの向こうに誰かが立っているのが見えた。

「オイ、ガキ。小遣いやるから飲み物でも買ってきな」

そう言って打ち止めに千円札を渡す。

「えっ？やったー！ってミサカはミサカは自動販売機を探さべくミサカのリーダー機能を最大限に利用してこの街の中へと突入してみ

たり」

以外と単純な少女だった。彼女にはリーダー機能なんてものはないし一方通行の知る限り、この近辺に自動販売機は一台もない。打ち止めの姿が街中の景色に消えていくのを確認すると、

「俺に何か話でもあンのかア？俺だって暇じゃねェんだ。話があるならさっさと話せ」

別に忙しい訳でもないが適当に言葉を並べると視線を街中からある人物へと移す。

「貴方にあのミスセスについて話があるのであります」

『意見要請』

相変わらず無表情のまま、ヴィルヘルミナ・カルメルがそこに立っていた。

坂井悠二はシャナと垣根帝督の3人でいつもの様に鍛錬をしていた。かなりシャナの動きについていけるようになりレベルもかなり上がってきている。

「今のよかったんじゃない？」

垣根が少し感心しながら言う。シャナの振り回す物干し竿すら避けられなかった悠二にしてみればかなりの進歩である。

『今までで一番よかったな。今回の出来に満足せずさらに鍛錬を積むが良い』

アラストールからの珍しい評価に少し驚く悠二。自分ではあまり実感できないが少しは良くなってるということに安心を覚える。

「でも満足してるようじゃあもう伸びは期待できない。がむしゃらにやるしかないわね」

見透かしたように言うシャナに少し苦笑いしながら何かを思い出すように彼女に訊ねた。

「ところでカルメルさんはどこに行ったの？」

「分からない。ヴィルヘルミナのことだからこの街の様子を見て回ってるんだと思うけど」

次の瞬間、近くで封絶が張られた。

「オイオイ、これはもしかして……」

「ヴィルヘルミナが張った封絶ね……。でもどうして……？」
「とにかく行ってみよう」

3人は封絶へと向かった。

「本気で言ってるやがンのか？」

「当然であります。バル・マスクとの全面衝突を避けるためには零時迷子の無作為転移、つまりミステスを破壊するしか方法がないのであります」

『手段一択』

ヴィルヘルミナとティアマトーの言葉を聞いた一方通行は鋭い目付きでヴィルヘルミナを睨み付ける。

「なら話は割れた。俺はテメエの話には乗らねえ。だがテメエが坂井を破壊するってんなら……」

さらに首のチョーカーに手を伸ばすと、

「ここにくたばってもらうしかねえんだがな。炎髪だって坂井の破壊は選ばねえだろおし、テメエの都合で坂井を破壊させる訳にはいかねえ。暇潰しに相手してやる」

カチッ！

ゴォー！！

一方通行が能力を使用すると同時に彼の周りで風が渦を巻く。

「こちらもお手並み拝見させてもらうのであります」

『開戦』

ヴィルヘルミナは戦闘態勢に入った。

戦いの序奏

先手を打ったのはヴィルヘルミナだ。神器ペルソナを仮面のように変形させるとペルソナから伸びる無数のリボンが一方通行に襲いかかった。しかし一方通行は退屈そうな顔を見ると、

「そんな攻撃が俺に通用するとても思ってたのかア？くっただらねエ」

「……………!？」

ベクトルを反射しているため、ヴィルヘルミナの攻撃は簡単に防がれる。しかしヴィルヘルミナには何が起こったのかが解らなかった。

「一体、何が起きたのでありますか……………？」

『理解不能』

彼女が考えている間に学園都市最強の能力者は足下のベクトルを操作し、彼女との間合いを一気に詰めると、続いてベクトル操作をした拳でヴィルヘルミナに殴りかかった。

しかしヴィルヘルミナもまた、『無双の舞踏姫』と呼ばれる程の実力者である。一方通行とはぐり抜けてきた修羅場の数が違う。経験のレベルが違うのだ。咄嗟に無数のリボンを幾重にも重ね、一方通行の視界から姿を消す。何も考えずリボンをぶち抜いた一方通行の視線の先には彼女の姿はなく、

「……………!」

ドオ！

リボンが桜色に輝き、そして爆ぜた。ヴィルヘルミナは無表情のまま桜色の爆煙を見つめていたがその顔に驚きが浮かぶのに時間はかからなかった。

「ああ、なかなか面白エ……。だがこれで終わりか？」

桜色の爆煙の中から残忍な笑みを浮かべながら一方通行が出てきた。彼の能力がベクトル操作であることを知らないヴィルヘルミナは驚きを隠せない。

「どうなっているのですか……！？」

『正体不明』

「（彼はフレイムヘイズや徒ではなく能力者であるハズ……。ならばまずはその能力をはっきりと認識するべきでありますな）」

ゴオ！

一方通行が風のベクトルを操ると竜巻が発生しヴィルヘルミナに襲いかかる。彼女は竜巻に吞まれたが自在法を使用したりボンを巧みに駆使することで身を守る。

「……………！」

一方通行が追い討ちをかけるように再びヴィルヘルミナとの間合いを詰めた。

「これで終わりだぜエ！」

一方通行が拳を振りかぶった瞬間、ヴィルヘルミナは身を守るために展開していたリボンを防御から攻撃へと切り替えた。リボンの束が槍となり、一方通行に放たれる。

ゴバア！！

「なっ……………！！？」

しかし、一方通行はリボンの槍を拳で簡単に粉碎した。

「何なんですかア？万条の仕手の実力ってのはこんなモンなのかア？」

退屈そうに言うと一方通行は近くに落ちていた小石を蹴り飛ばす。軽く蹴られた小石は運動量のベクトルを操作されて凄まじい速度でヴィルヘルミナに向かって飛ぶが小石がその速度に耐えられず弾けた。その際に発生した衝撃波がヴィルヘルミナに襲いかかる。

ゴォ！

ヴィルヘルミナは再び無数のリボンを展開させ、衝撃波を防ぐ。

「くっ………（これは………想像以上の強さであります）」

『油断大敵』

ティアマトーに見透かされた様に言われるが今はそんなことを気にしている余裕はない。一方通行は溜め息をつく。

「これでもまだテメエは坂井を破壊するって言うのか？もしそオならその綺麗な顔が誰だったのか分からなくなるぐらい芸術的な死体オブリジェにしてやる」

「……………。零時迷子を破壊することでバル・マスクとの衝突を回避し、世界のバランスを保つことは我々フレイムヘイズの使命なのであります。あの方も、天壤の却火も心得ているハズであります」

「炎髪も坂井の破壊を望んでいるってのかア？くっだらねエ」

「……！」

ちよつと、こちらに向かっていたシャナ、悠二、垣根の3人がこちらにやって来るのが見えた。

「ミステス自ら現れるとは、探す手間が省けたのであります」

『好都合』

シャナはどう見ても戦闘中だった目の前の現状を見て困惑した表情を浮かべる。

「どうしてヴィルヘルミナと一方通行が……？」

「コイツが坂井を破壊するってほざいたからに決まってんだろオが」

鋭い視線をヴィルヘルミナに向けたまま一方通行は吐き捨てるように言った。それを聞いてシャナの顔に浮かぶ戸惑いがさらに深まる。

「どうということ？」

「零時迷子を破壊し、無作為転移を行わなければ恐らく、バル・マスケと全面衝突するという事態を招くことになるのであります」

『しかし、万条の仕手よ。このミステス坂井悠二を破壊したところでバル・マスケは零時迷子を諦めないだろう。こ奴を破壊する必要はない』

アラストールの言葉にそれまで無表情だったヴィルヘルミナは呆れ

たような顔をした。

「天壤の却火ともあるうお方が随分とそのミステスに入れ込んでいるのでありますな」

『想定外』

むう、とアラストールは唸るような声を出す。垣根はシャナに訊ねた。

「なあシャナ、お前はどうしたい？」

「え？」

「フレイムヘイズの使命は世界のバランスを保つことだったよな？ 悠二を破壊することで世界のバランスが保てるならお前は どうする？」

2つに1つだ、と垣根は指を折りながらシャナに問いかけた。その問いにシャナは黙っていたが隣で不安そうにこちらを見つめる悠二の顔を見て……

「……………！」

シャナは悠二を庇うようにヴィルヘルミナの前に立ちはだかる。シャナの養育係であったヴィルヘルミナは今まで見たことのないシャナの気迫に気圧される。

「それほどのお覚悟を……………！？」

「ヴィルヘルミナ、私は炎髪灼眼の討ち手。フレイムヘイズの使命はよく分かっている。でも悠二は破壊させない。坂井悠二の破壊で無作為転移した零時迷子がバル・マスクの手に渡ったら何が起きるか分からないから」

「……。自分が何者なのか考えて直して欲しいのであります。私はアナタに失望したくないのであります」

そう言うとヴィルヘルミナはシャナに背を向け、封絶を解いた。封絶が解けると同時に一方通行はチョーカーのスイッチを切る。

「しかし、バル・マスクの奴ら何考えてんだろうな。零時迷子の利便性はよく解るがそれが必要ってことは何かやらかそうとしてるってことだろ？」

垣根が考える素振りを見せながらぼやく。

「何はともあれ、奴らが動かねエとこっちは動きようがねエ。ある程度、対徒用の迎撃体制を完成させといた方がインじゃねエか？」

その言葉に何かを思い出した悠二が一言放った。

「ねえ、祭りの飾りの鳥はもう大丈夫かな？」

「あア？鳥だと？」

全員の視線が悠二に集まる。しかし悠二は気にすることなく続けた。

「ミサゴ祭りの飾りの鳥だよ。あの日、燐子にならなかつた残りがこの辺で見つかった血まみれの白衣の事件のせいでまだ片付けられ

ていなかったんだよ」

「だから何だつてんだ？」

「だからもしバル・マスクがこの御崎市に来るのなら残りの飾りがまた燐子になるかもしれないだろ？祭りの時に燐子にならなかったやつがバル・マスク襲来のキーになるんじゃない？」

悠二の発言にアラストールが問いかける。

『では貴様はあの日、探耽求究が現れたのは最初からバル・マスクの御崎市侵攻のためだったと言いたいのか？』

「うん、そしてもし、その通りならバル・マスクはすでに動いているってことになる」

「くそつ、厄介な奴等め。これじゃ敵の思う壺だ。すでに不利な状況に陥ってやがる」

垣根が舌打ちするとどこからか声が聞こえてきた。

「大丈夫だ！どんな逆境も根性があれば乗り越えられるぞ！」

垣根と一方通行にはどこか聞き覚えのあるその声の持ち主はやたらとカラフルな煙の爆発を起こし、ド派手な登場で一同の前に姿を現した。

その人物は1人の少年だった。白い特攻服のようなものを着ているその少年に一方通行は苦笑いしながら話しかけた。

「随分と早エ到着だな。はるばるご苦労さん、第7位削板軍覇」

恋と理想と根性と

学園都市に7人しかいないレベル5の1人で序列は第7位、通称『ナンバーセブン』と呼ばれる男、削板軍覇が腕組みをして立っていた。

「よお、久しぶりだな一方通行、垣根。最後に会ったのはいつだったか？」

「随分と前の話だろ？覚えてねえよ」

「つーか、オマエここまでどオやって来たワケ？」

一方通行の問いに学園都市第7位の能力者は仁王立ちしたまま答えた。

「走ってきた。途中何度も道に迷ったがな」

「は、走ってって……。学園都市からここまでどれだけ距離があると思ってんだよ!？」

「根性があれば何でもできるぞ」

「根性ってレベルじゃねえだろこの根性馬鹿!」

根性馬鹿と呼ばれた削板はにやりとする。そう呼ばれるのは嫌ではなく、むしろ馴れているといった感じだ。

「ん？そちらさんが例の『炎髪灼眼』のフレイムヘイズと零時迷子

のミステスか？」

削板が悠二とシャナに気づく。彼の登場から今に至るまで呆気にとられていた2人は削板の一言で我に帰る。

「ああ、そっちのちっせえのがフレイムヘイズのシャナ、隣がミステスの坂井悠二だ」

垣根が簡単に紹介した。彼に小さいと言われたシャナは垣根を睨み付けるがそんなことを気にしないのが垣根である。シャナのそんな様子を見て楽しんでいる様だ。

「コイツは削板軍覇。俺たちと同じレベル5で第7位の能力者だ」

一方通行の言葉が今現在、不機嫌なシャナの耳に入っているかは定かではないが垣根を睨み付けるのを止め、削板の方へと向き直る。

「ところで削板、どうしてここに？」

悠二の問いに根性馬鹿は意外そうな顔をする。

「何だ、聞いてねえのか？バル・マスクが本格的に行動を開始している今、一方通行の能力制限は学園都市にとつての最大の不安要素だ。だから俺がこっちに手助けに回るようになったらしい」

2週間だけな、と言うと削板はそこで苦笑いしながら続けた。

「まあ、一方通行の件だけじゃなく上層部によると学園都市で発見される徒の数が増えてるらしい。学園都市内にあったアウトローも襲撃され始めてる。だからこの街でバル・マスクの情報を集めるの

が俺の仕事だ」

「実際に徒と戦ったことはあンのかア？」

「ない。まあ、そこは根性の見せどころだ」

削板はハハハツと豪快に笑うとするとグツと力瘤を作る。この少年が言つと何故だか本当に根性で何とかなってしまいそうな気がする、と悠二は思った。

「じゃあまずそのフレイムヘイズ、炎髪灼眼の討ち手と腕試しと
いこうか」

垣根がシヤナを指さし削板に言う。しかし削板は苦笑いすると、

「流石に学園都市からのマラソンの後に戦つのはキツすぎるぞ？」

その言葉を聞いた一方通行は不気味に笑うところぞとばかりに言い放った。

「根性で何とかなるんじゃないのか？」

弔詞の詠み手、マージョリー・ドーはいつものように佐藤啓作の家で酒浸りの日々を送っていた。この御崎市に来てから妙に徒との遭遇率が高いため変な形でストレスが溜まっているのである。と言っても酒でそのストレスが解消されるハズもなく、しかし飲まない訳にもいかず、といった調子で酒盛りの嵐真っ只中なのだ。

学園都市への研修から戻った啓作と栄太が部屋を訪れると空の酒瓶片手に上機嫌に鼻歌を歌いながら飲み続けるマージョリーの姿があった。当然ながら2人はマージョリーの酒盛りに付き合わされる形となった。

「姐さん、もうそろそろ終わりにした方が…」

「なあ〜に言ってるのよ。まだまだこれからでしょ？」

『こりゃ駄目だな。誰が何と言おうと飲み続けるパターンだぜ』

蹂躪の爪牙マルコシアスが溜め息混じりに言う。何だかんだでマージョリーの酒盛りに一番付き合わされたのは他でもない彼である。ある時は意味もなくグリモアを殴り付け、ある時は酒をかけたりといろいろと被害に遭っているのだ。

「確かミサゴ祭りから帰った後から飲んでたよな？」

ミサゴ祭りでの騒動の後から啓作と栄太が学園都市へと向かう朝まで飲んでいたマージョリー。マルコシアスの話によると3日2晩飲み続けていたことになる。件のマージョリーはグリモアを枕代わりにソファァーで眠っている。

『まあ、コイツが頭痛に悩まされるのは分かりきっていることだが

なあ！ヒヤハハハハハハハハハハハハハハハハ！ぐあっ！？」

眠れるフレームヘイズの拳がグリモアに入る。

「とりあえず二日酔いの薬でも買ってきた方がいいか？」

『ああ、頼むぜ。俺は清めの炎を使っつもりなんざこれっぽっちもねえからよ』

「わかった、買ってくる。行こうぜ田中」

「ああ」

2人はそう言うのと帰ってきたばかりなのにも関わらず部屋を後にした。静かな部屋に残されたマージョリーにマルコシアスが声をかける。

『おい、マージョリー』

「わかってるわよ」

先ほどまで酔い潰れていたマージョリーはむくりと体を起こすと鋭い視線を窓の外へと向けた。ミサゴ祭りで使用された鳥の飾り。燐子とならなかった分はまだ処理されず祭りの会場に残っている。しかし、本当に大丈夫なのだろうか。

「何なのかしらね、この妙な胸騒ぎは……」

マージョリーは1人残された部屋でぼそりと呟いた。

一方通行、垣根、削板の3人と別れたシヤナは1人で河原を歩いていた。悠二の鍛錬のためにコキュートスを彼に渡しているので文字通り1人である。

「……………」

シヤナの目に見覚えのある少女がこちらに歩いてくるのが見えた。吉田一美である。学園都市研修においても徒の襲来に巻き込まれた彼女は紅世の世界の存在を認め始めていた。自分の知らない世界に足を踏み出したのである。

しかし、それでも悠二がトーチであることだけは信じたくなかったらしい。彼女は未だに悠二が零時迷子のミスレスであるということを知らなかつたのだ（その事実を知つたのは学園都市にてシヤナと結標淡希から話を聞いたのが最初である）。

「あ、ゆかりちゃ……………じゃなかつた、シヤナちゃん」

一美がシヤナに気付き声をかけた。学園都市研修で紅世の世界についての知識を多少身につけた一美はシヤナのことを良き恋のライバルとして見ていた。

シヤナもまた、一美と話をすることでお互いの悠二に対する気持ちを理解し、以前のように鋭い視線を向けることもなくなった。

「吉田……一美……」

それでも未だ、そういった人間関係に馴れていないシヤナはどこかぎこちない様子で言葉を返す。一美は愛犬エカテリーナの散歩の最中だったらしく紐に繋がれた愛犬は激しくしっぽを振ってシヤナの顔をまじまじと見ている。

お互いに一言も話さない沈黙が続いた。それに耐えられなくなったシヤナは視線を逸らすとその先にミサゴ祭りの飾りが積み上げられているのが見えた。悠二の考えではあの残りがバル・マスケ襲来のポイントになるというものであったため、無意識に警戒の眼差しを向ける。

「……………」

鳥の飾りが青白く光ったと思った瞬間、突然封絶が張られた。

「一美！早く隠れて！」

一美にそう叫ぶと髪と瞳が紅蓮に染まる。

「一体、何事でありますか？」

『状況確認』

ヴィルヘルミナがシヤナの元へと駆けつけ、辺りを見渡す。向こうから悠二、一方通行、垣根、削板が走って来るのが見えた。

「奴らか？」

垣根の問いにシヤナは首を振る。

「まだわからない」

「オイ、何なんだありゃア？」

一方通行が空を指さした。彼の指さした方向にあった物は……

『あれは星黎殿！？馬鹿な！？何故ここに……！』

アラストールの声に首を傾げる学園都市能力者一同。

「あれは一体何だ？」

削板が問いかけるとヴィルヘルミナは空に浮かぶそれに視線を向けたまま答えた。

「あれは星黎殿。徒の集団、バル・マスケ仮装舞踏会の本拠地であります」

削板軍覇

「あれがバル・マスクの本拠地だと!？」

彼らの視線の先にあつたのは巨大な建造物だった。上半分は尖塔を並べた城塞、下半分は岩塊といったまさに空中要塞と呼ぶに相応しいであろうその建造物は封絶の張られた御崎市の上空に浮いていた。

「何がどオなつてやがる……!？アレはいつからあそこにあつたんだ？」

一方通行も驚きの声を上げる。

「何だありや!？」

ちょうど啓作と栄太もこの場に駆けつけた。2人揃って呆然としたまま星黎殿を見つめている。

マージョリーの酔いざましの薬を買いに家を出た直後に封絶が張られたのだ。2人が慌て家に戻った時、ソファアの上で酔い潰れて眠っていたハズのマージョリーの姿はなかった。彼女の手伝いをするため護符で連絡を取ろうとしたが応答なし。一応、玻璃壇へと向かったのだが玻璃壇に巨大な物体が映っていたので様子を見に来たのだ。

「……!」

突然、一同の前に1人の女性が姿を見せた。その女性は右目に眼帯をしており額にも瞳が見える。灰色のタイトのドレスにアクセサリ

―で身を飾る三つ目の美女は金色の炎を纏いこちらを見ている。

「徒か？」

垣根の問いにヴィルヘルミナは視線を女性から逸らさずに答える。

「奴はバル・マスクトリニティの三柱臣の1人で、『参謀』を担う紅世の王、逆理の裁者ベルペオルであります」

興味深そうに辺りを見渡すベルペオルにアラストールが問いかけた。

『ベルペオルよ！何の目的でこの地でこのような大がかりなことをしている？』

「おや、この程度のことで大がかりとは。天壤の却火もずいぶんと落ちぶれたねえ」

ベルペオルは呆れたように言うと、

「この街を存在の泉にするのさ。大がかりな仕事はこれからだよ」

「……！」

「そのためには必要不可欠な物がこの街にあった。これが無ければこの計画は成功しないからねえ」

その言葉の意味にいち早く気づいたのは垣根だった。彼はすぐに背中から白い翼を生やし、未元物質を展開させるとバル・マスクの目的の物、零時迷子、坂井悠二を守るように翼を広げた。

ガキイン！

垣根の予想通り翼に攻撃を受けた感覚がして、続いて聞き覚えのある声が耳に入る。

「久しいな能力者よ、否、垣根帝督！」

「ハッ、名前覚えてるだけで十分だ！今度こそ逃がさねえぞ千変シユドナイ！」

シユドナイは人間の姿のままであつたがその腕には巨大な槍が握られている。垣根の行動を見て、我に帰つた2人のフレイムヘイズと能力者はすぐに戦闘態勢に入る。

「垣根、悠二！そこを離れろ！」

削板が叫ぶと垣根は悠二の襟をひっ掴み、後方へと投げ飛ばす。

「すごいパンチ！」

この緊迫した状況にミスマッチな掛け声に一瞬、呆けたフレイムヘイズ達だったがその顔はすぐに驚きへと変わった。

削板とシュドナイとの距離はかなりあった。しかし、削板から放たれた攻撃は確かにシュドナイを捉えていた。シュドナイの姿が回転しながら宙を舞う。シャナにヴィルヘルミナ、ベルペオル、攻撃を受けたシュドナイですら今、何が起こったのか理解できなかった。

「この……！能力者風情があ……！」

シュドナイは自身を鶴の姿へと変えると特攻服の少年に炎弾を放った。

ゴォ！

「削板！」

少年、削板軍覇は紫色の炎弾をまともに食らった……のだが……

「おい、徒あ！お前の攻撃には根性が足りてねえぞ！」

「なっ！？」

炎弾が削板に直撃するのをここにいる全員が見ていた。彼らの脳裏に削板の死すらよぎったのだが当の本人は何ともないようにびんぴんしている。

「貴様……一体！？」

「すごいパンチ！」

シュドナイは説明不能な掛け声と共に繰り出される説明不能な攻撃を回避すると削板に鷲の腕で削板に殴りかかるうとした。

「させるかよ！」

垣根が翼を鶴に叩きつける。シュドナイはその勢いで吹っ飛ばされバランスを崩すと河に転落した。

ジャラ……

ヒュン！

突然、どこからか伸びてきた鎖が油断していた悠二を捉え、締め上げた。

「ぐっつ……！」

「悠二！」

シヤナが贅殿遮那で鎖を切ろうとするがなかなか切れない。ヴィルヘルミナが鎖の先を目で追うと鎖を手に不敵な笑みを浮かべるベルペオルの姿があった。

「このままでは零時迷子を奴らの手に渡してしまう……。こうなったら今すぐミステスを破壊して零時迷子が無作為転移させるしか方

法はないのであります！」

『最終手段』

ヴィルヘルミナの行動は単純だった。無数のリボンを束ねて一本の槍を作り出すとそれを迷うことなく悠二に向けて放ったのである。

「悠二！」

どすつ、という鈍い音がした。次の瞬間、悠二の目に映ったのは自分を庇ってヴィルヘルミナの攻撃を受けたシャナの姿だった。

リボンの槍が刺さったままシャナはその場に崩れ落ちる。

「シャナ……？シャナ……！」

悠二は彼女に駆け寄ろうとしたが鎖で縛られているためうまく動けない。攻撃を放ったヴィルヘルミナも今のシャナの行動に動揺している様だ。

「どろして……」

「アンタには用があるんだ。来てもらおうよ」

「くっ……放せ！」

ベルペオルは悠二に鎖をさらに巻き付けると、

「千変、これを星黎殿まで持ってきてくれないかい？」

ドパア！

先ほど河に姿を消した千変シュドナイは凄まじい水しぶきと共に姿を見せた。シュドナイが悠二を掴み上げる。しかし、能力者達の行動は素早かった。一気にシュドナイを包囲すると垣根が翼を広げ、シュドナイに言い放つ。

「悠二を放しな千変」

「貴様らがどう足掻こうと我らの計画は止められん。貴様らをこの場で殺したいのは山々だが仕方ないのだ」

「なかなか面白エ寝言だな。最後の言葉はそれでイイのかア？」

一方通行が冷酷な笑みを浮かべる。シュドナイは視線を一方通行へと移し、続いて削板を見る。

「俺を倒せると思っているのか？貴様ら、このミスセスがどうなってもいいのか？」

「！」「！」「！」

「お前、随分根性のねえ奴だな。そういう奴には根性を叩き込んでやるしかねえな！」

削板がシュドナイに掴みかかろうとして……手を止めた。その手の先には悠二の姿があったからだ。シュドナイは悠二を盾の様に抱えてながら、

「どうした？能力者よ。貴様の言う根性とやらを俺に見せてみる」

削板が怒りの表情でシュドナイを睨み付ける。シュドナイは勝ち誇った様に笑うと悠二を抱えて星黎殿へと姿を消した。

「ゆ、悠二……」

ヴィルヘルミナの腕の中で意識朦朧としながらシャナは遠ざかる悠二へと手を伸ばす。彼らの姿が見えなくなると同時にシャナは意識を手放した。

ひとりじゃない

「これからどオ動く？」

「あの星黎殿に侵入して悠二を取り返した後、奴らをぶち殺す」

ヴィルヘルミナがシャナの介抱をしている間、一方通行、垣根、削板の3人は作戦会議を開いていた。シャナがいつ目を覚ますかわからない以上、フレイルムヘイズの助け無しで悠二を救出しようというのである（若干2名、戦いたくてウズウズしているだけなのであるが）。

「削板、学園都市に今回のことを連絡したか？」

垣根が削板に言うと、根性少年は思い出したようにハッとすると、

「忘れてた」

ポケットから携帯電話を取り出し、

「……………」

「……………？どオした？」

「電池切れてる……………」

一方通行と垣根は呆けた顔をする、

「仕方ねえな、それなら俺の……………」

「うおおおおおおおおおおおおおおお！根性が足りんぞ俺の携帯！」

パキッ！

「「「あ……………」」」

3人の視線は削板の手のひらに釘付けになる。削板は天寿を全う出
来ずに粉々になった携帯を握りしめると、

「まあ、学園都市（向こう）に戻ってから報告すればいいか。ハハ
ハハハハハハッ！」

と豪快に笑った。「ホントに大丈夫かよ？」と溜め息混じりに思う
一方通行と垣根帝督だった。

「……………」

シヤナが目を開けると最初に目に入ったのは心配そうに彼女の顔を覗き込むヴィルヘルミナの顔だった。

「目を覚ましたのでありますか」

『覚醒』

「いや、それは違うでしょ」とティアマトーにつっこみたいのを抑え体を起こす。悠二を庇ってできた傷は塞がっているところを見るとヴィルヘルミナが自在法を使って治療したらしい。

「ここは？」

「平井家であります」

悠二の家に泊まるが多かったため長い間、使っていなかったのだがその割りにはキレイに片付けられていて埃一つない。大方、ヴィルヘルミナが掃除したのだろう。何でもかんでも彼女にやってもらっているが今、彼女に感謝の言葉を口にするほどシヤナの心に余裕はなかった。

「悠二は？悠二を助けなきゃ！」

まだ傷が完治していないのに立ち上がると贅殿遮那をひっ掴み、出ていこうとするが、

「ぐっ……」

すぐに傷口を抑えその場に崩れ落ちる。

「無理をしてはせつかく塞がった傷が開くのであります」

『安静要求』

ヴィルヘルミナが心配そうに言うがそう言われてもシヤナは再び立ち上がると星黎殿へと向かおうとする。

「行かせた方がイインじゃねエのかア？」

ヴィルヘルミナが振り返ると杖を着きながら一方通行が部屋に入ってきた。

「坂井は必ず助けるって話をこつちでしてんのにコイツが行かなかつたら俺達の立場がねエだろオが。それにどのみち炎髪は星黎殿に行くんだろオ？」

一方通行は首のチョーカーをいじりながら言った。垣根も一方通行の後ろから姿を見せながら、

「こつちには一方通行も削板もいる。お前も戦えるだろ？だがよ、俺たちにとってシヤナは切り札なんだよ。切り札が機能しなかつたら洒落にならねえだろ？」

そう言うてにやりとする。ちょうどその時、玄関のドアをノックする音がした。垣根が何の迷いもなく開けようとするのとドアノブに手を伸ばした彼の腕にリボンが巻き付きそれを制止した。

「何すんだよ」

「罨かもしれないのであります」

「アンタそんな面して意外に馬鹿なんだな。徒がいちいちドアをノックするかよ」

頭を使えばわかるだろ、と垣根は呆れながら腕に巻き付いたりボンを振りほどくとドアを開けた。

「はあ……はあ……やっぱり……ここだったか……」

「死ぬ……ホントにヤベエ……」

汗だくでげんなりとした顔で立っていたのは何やら大きな物を抱えている啓作と栄太だった。

「どうしたんだ？2人揃って世界の終わりみたいなの顔して」

垣根としてはユーモアを交えて言ったつもりだったが御崎市を存在の泉にするというベルペオルの言葉を聞いていた彼らにとって垣根の言葉は洒落になっていない。

「平井ちゃん……じゃなかった、シヤナちゃんいるか？」

ガシャン！

2人は抱えていたものを置く。やたらと厚い布でぐるぐる巻きにしてあるそれは、その音からかなり重量のある物であることが窺える。

「俺たちが持つてても仕方がねえからよ……」

栄太が巻かれていた布を取る。

「オイ、それはあん時の……」

興味ありげに見ていた一方通行が目を細める。

布の中から姿を見せたのは愛染自ソラトが所持していた諸刃の巨剣、ブルートザオガ吸血鬼だった。ソラトを討滅した後に拾った一方通行がマージョリに渡して以来見ていなかった。

「姐さんは片手で軽々と持てるのに俺たちは2人がかりでやっとなんだよな……」

劣等感と悔しさを感じ、唇を噛みしめながら啓作が呟く。

「根性が足りんぞ2人とも！」

削板が奥から出てきた。

「アンタ誰だ？」

「コイツは削板、削板軍覇。俺達と同じく学園都市に7人しかいないレベル5の1人だ」

はいねえな」

垣根は首をこきりと鳴らす。一方通行もチョーカーの残り電池を確認しながら、

「あの不愉快なクソ野郎どもを派手にぶち殺しに行くのに残り時間20分は少なすぎなんだよなア」

楽しそうな笑みを浮かべる。ヴィルヘルミナはそんな2人に無表情のまま呆れながら、

「自分たちが何をしに行くのかを考えてほしいのであります」

「ヴィルヘルミナ」

シヤナの声にヴィルヘルミナは振り向く。彼女の目に映った炎髪灼眼の討ち手、シヤナの姿はその小さな容姿には考えられない程大きく見えた。

「私はもう戦える！」

シヤナは力強く言い放った。1人のフレイムヘイズとして、使命を果たす者として。

「そうこねえとなシヤナ！」

「お嬢ちゃんいい根性してるじゃねえか」

「さっさと終わらせんぞ炎髪！」

ひとりじゃない……シヤナは自身にそう言い聞かせると星黎殿へ視線を移す。

「ひとつ派手に行くぞ！」

削板のみ飛行手段がないため垣根が抱えて飛行することになった。シヤナ、垣根、一方通行、削板、そしてヴィルヘルミナ。5人は戦闘態勢に入ると、ベランダから宙へと飛び出した。

「あら、随分と盛り上がってるじゃない？」

『ヒヤツハハハハハハハ！こりゃあ滅多に見られねえ光景だな』

少し離れた空中で弔詞の詠み手マージョリー・ドーはグリモアの上でシヤナ達を眺めていた。

『しかしマージョリー。お前はあそこに行かなくていいのか？』

「何言ってるのよ馬鹿マルコ。私は私の道を進むだけよ」

『で、そのお前の道とやらはどこを向いてんだ？』

「決まってるでしょ！」

マージョリーはトーガを纏うと、平井家のベランダに立っている2人の少年に目を向ける。

『この戦いが終わったらアイツらの元にちゃんと帰ってやれよ？』

「わかってる」

マルコシアスの言葉に頷くとマージョリーも星黎殿へと向かった。

「来るか、だが俺達の計画は止められんぞ」

千変シユドナイは星黎殿に迫る侵入者たちを肉眼で確認すると不敵な笑みを浮かべた。

ひとりじゃない（後書き）

気づけばお気に入り登録件数50件……

ありがとうございます！

読んでくださる方々には本当に感謝しています。シャナの原作からいろいろ省いたり、吉田一美の出番が少なかったり、悠二が空気化してきたり、削板の口調がおかしかったり……と、まあ問題が多々ありますがこれからも頑張らせていただきます。

星黎殿の戦い

シヤナ達が星黎殿へと目指している頃、悠二は奇妙な空間を漂っていた。

「（ここはどこだろう……。……何も思い出せない……）」

そんなことを考えていると目の前に1人の少女の姿が見えた。小柄で明るすぎる水色の髪、同じ色の瞳、体をすっぽりと覆う白いマントに大きな帽子を被っている。

「君は……？」

「私は頂の座へカテー」

「へカテー……」

悠二は目の前の少女が何なのか何故だかあまり関心が持てなかった。

「ねえ……。ここはどこ？」

「貴方は何も知らなくていい」

へカテーはそう言うと悠二の目の前まで近づく。

「器を開きなさい、零時迷子のミステス」

「おいおい、本当にこれがバル・マスクの本拠地なんだろうな？」

垣根が拍子抜けしたように言う。5人の予想とは逆に容易に星黎殿に侵入した彼らが辺りを見渡すが徒どころか燐子一匹見当たらない。

「おかしいのであります。星黎殿にはバル・マスクの徒達が巣くっているはずなのでありますが……」

『嚴重警戒』

彼らが立っている場所は広い空間だった。何本もの石柱が連なり、まさに宮殿といった感じだ。

『ここに入る時も結界は張られていなかった。まるで我らがここに来ることを誘っていたように』

「そう言えばそうだな」

『奴らがか何か仕掛けを施しているやもしれぬ。ここは慎重に進むのが上策だろう』

アラストールの言葉に一方通行が鼻で笑いながら言った。

「奴らが妙な仕掛けを施していよオが関係ねエだろオが」

一方通行は星黎殿に入ってから電極を通常モードに切り替えている。ヴィルヘルミナとの戦闘時、星黎殿の現出の際に能力を使用しているため、残り時間は約20分ほどしかない。極力能力を使わないようにしているのだが杖がなければ歩けないのである。アラストールにしてみれば不安しか感じられない。戦力になれば心強いが今はただの人間なのである。

「おい、何だありゃ？」

奥の石柱の影からゼンマイロボットの大群が押し寄せてくるのが見えた。それぞれボウガンや剣を装備している。

「お出迎えか？」

垣根がのんびりと言うと背中から白い翼を顕現させた。さて行くかと垣根が言うよりも早くシャナはゼンマイロボットの大群に突っ込んでいく。

後に続くようにヴィルヘルミナ、垣根も突撃していく。翼でゼンマイロボットを薙ぎ払い笑いながら戦う垣根を呆れながら見る一方通行と削板軍覇。

しかし彼らはあることに気づいた。自身の力を自由に行使し派手に暴れる垣根とは対称的にシャナとヴィルヘルミナから何やら戦い方に違和感を覚えた。シャナは贄殿遮那を扱い難そうに振っている。一方通行が見る限りヴィルヘルミナは彼と戦った時より力をセーブしている感じに見える。しかしそんな必要があるのだろうか？

「贄殿遮那が重い………！」

「どうやら私達の存在の力が奪われているようなのであります」

『探聴求究の仕業か……！また何やら厄介な仕掛けを……。我らを容易に中に入れたのもこれが理由か！』

ヴィルヘルミナとアラストールが気づいた様に言う。シヤナの紅蓮の髪がみるみるうちに普段の黒髪へと戻っていく。

『こつなつたら長年培った己の体術のみが頼りだ。シヤナ』

「わかつてる」

シヤナは贗殿遮那を夜笠にしまつと巧みな体術でゼンマイロボット達を蹴散らしていく。

『おそらく、どこかにこの空間を生み出す装置があるはず。それを破壊しなければ全力で力を行使できぬだろう』

「ならそれを破壊すりゃアイインだな？」

一方通行はチョーカーのスイッチを押すと、

「死にたくなかつたら俺の後ろにさがりなア」

「何だよ一方通行。せつかく俺が片付けてやろうと思つたのによ」

「うるせエよ第2位、怪我する覚悟があるならそこにおいても構わねエがなア」

一方通行がにやりとしながら両手を上に挙げる。一方通行のその様

凄まじい轟音が響き辺り一帯が吹き飛んだ。ゼンマイロボットどころか天井を支えていた石柱も何本か消し飛んでいる。シャナとヴェルヘルミナ、削板は苦笑いしながら一方通行を見る。

「これは……、やり過ぎじゃあねえか？」

削板が一方通行に言うが当の本人は、

「このくらいがちょうどイイ」

「垣根も一緒に吹き飛んだぞ？」

「アイツなら問題ねエだろオ」

「大アリだクソ野郎！」

瓦礫の中から垣根が出てきた。翼で身を守ったため傷一つついていないが一歩間違えば大怪我だ。こめかみに青筋が浮かんでいる。

「何だ、無傷か。つまんねエ」

「ああ！？何だとコラ。バル・マスクを潰す前にテメエから殺つてやるつか！？」

そんな垣根を見て一方通行は能力使用モードから通常モードへと切

り替えると、

「これでもまだ存在の力は使えねエかア？」

フレームヘイズの2人に訊ねる。シャナの髪の色が再びいつものような紅蓮に染まる。シャナは夜笠から贗殿遮那を取り出すとそれをその場で二、三度振る。

「大丈夫、いつも通り」

「ならさっさと済ませるぞ」

5人が先へと進もうとした時、前方から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「何やら騒がしいと思って見に来てみれば……。もうここに辿り着くとはな。教授の装置もあまり役に立たなかったようだな」

その視線の先にいた人物は……

「ここで登場かよ」

「あの根性なしにはしっかりと根性を叩き込んでやらねえとな」

「少しは楽しめそオだな」

戦闘態勢に入る3人の能力者。目の前に立つ人物にそれぞれが異なつた視線を向けている。

「アイツは……!!」

「千変シュドナイ……!!」

シヤナとヴィルヘルミナも戦闘態勢に入る。5人の行く手を阻むように立っている紅世の王、千変シュドナイは不敵な笑みを浮かべる。

「残念だがな、ここから先は行かせる訳にはいかんだ。貴様らには全員、ここできたばって貰うぞ」

次の瞬間、星黎殿の外で妙な音がするのを5人は感じ取った。

「「「……!!」「」」

「どオやらコイツとのんびり遊ぶ時間なソざねエみてエだな」

「一刻も早くミステスを奪還しなければならぬのであります」

ゴォ!!

凄まじい音と共に垣根がシュドナイに突っ込む。シュドナイは姿を人型から鷲へと変えると垣根に殴りかかる。垣根は体を擦ってそれを回避すると6枚のうち4枚の翼をシュドナイに叩きつける。

ガッ！

シュドナイはそれをまともに食らうが怯むことなく垣根に炎を放った。紫色の炎が垣根を襲うが垣根は炎を2枚の翼で防ぎシュドナイと間合いを取る。

「シャナ！コイツは俺に任せてさっさと行け！」

未元物質を展開させ翼で暴風を起こしながら垣根が叫んだ。

「炎髪！千変は第2位に殺らせとけ！」

一方通行に背中を押され、シャナとヴィルヘルミナは先を目指して走り出す。

「くっ……奴らをヘカターの元に進ませる訳にはいかん。教授！」

シュドナイが叫ぶとどこからか馬鹿みたいなしゃべり方をする声が聞こえてきた。

「ごぉ〜心配なく千変シュドナイ！私の迎撃用の駒はまだまだのお〜こつていますよぉ〜！ドオオオオオミノオオオオオオオオオオオ！」

「ハイハイ教授。迎撃システムを発動させますです〜！」

ガシャン！

先ほど一方通行の放ったプラズマで吹き飛んだブリキのロボットが床から次々と出てきた。

「すごいパンチ！」

「この雑魚どもがア！」

一方通行と削板が能力を行使してロボットを蹴散らす。数が多すぎる。気づけば4人は包囲されていた。

「くっ、厄介ね！」

なかなか前に進めないことに苛立ちを隠せないシャナに削板が言った。

「お嬢ちゃん、俺達が何とか道を作るからそこのお姉さんと先に進みな」

そう言って一方通行を見る。一方通行は面倒くさそうに溜め息をつくと、

「やっぱりこんな役割かよ」

近くのロボットを掴み上げベクトルを操作して前方に投じた。

「すごいパンチ！」

さらにそれに削板が攻撃を加える。攻撃を食らったロボットは前方一直線に吹き飛び、そして爆ぜた。その衝撃波が他のロボットに襲いかかる。すると前方でひしめいていたロボットの大群の間に道ができていた。

「お嬢ちゃん早く！早く坂井の所へ！」

4人は大群の包囲から前方へ脱出する。ブリキロボットの大群が後を追おうとするが、

「結局、こオなったか」

「まあ俺は構わないぞ」

一方通行と削板が行く手を阻むように立っていた。シャナとヴィルヘルミナの姿はもう見えない。

「ドオオオオミノオオオオオオオオオオオオオオオオ！炎髪灼眼の討ち手と万条の仕手に逃げられているではあゝりませんかあゝ！早く奴らを追おうのですー！」

「ハイハイ教授ただ今！」

ブリキロボット達が2人に向かって突っ込んでくる。一方通行はにやりとすると楽しそうに叫んだ。

「わりイがア！こつから先は一方通行だ！！」

足下のベクトルを操作し、ブリキロボットの大群に突撃していく。

「いいねえ一方通行！いい根性してるじゃねえか！」

ナンバーセブン、削板軍覇はそんな一方通行を見て笑うとすぐに表情を厳しいものへと変え、

「なら俺もここはちよつと根性出す。まあそんな訳だから……」

ドオン！！

彼の必殺技、『すごいパンチ』であるアタッククラッシュ念動砲弾を放ち、ロボット達を吹っ飛ばす。

「本気で潰すぞ根性無しども！！」

この世に存在しない空間

先ほどシャナ達と別れた場所から離れた星黎殿の上半分、多くの尖塔が連なる上空で1人の能力者と紅世の王が衝突する。

ガキーン！

まるで金属がぶつかり合うような音が星黎殿上空で響き渡った。垣根は翼で暴風を起こすとその暴風の中をシュドナイに向かって突撃する。暴風でバランスを崩し垣根から目を切ったシュドナイは自らに向かって突っ込んでくる彼の姿が見えなかった。

ゴォー！！

敵の切断を目的とした6枚の白い翼がシュドナイに襲いかかる。

「姑息な真似を！」

シウドナイは咄嗟に体を鶴から人型へと変化させた。的が小さくなつたことで白い翼は全て攻撃が当たるはずだった空を切る。

「ちっ、面倒くせえ奴だなおい！」

垣根が舌打ちしながら叫んだ瞬間、彼の目の前に紫色の炎が渦を巻くように迫ってくるのが見えた。

「……………くっ！」

炎を全て翼で受け流すようにして防ぐ。

「どうした？隙だらけだぞ！」

シウドナイは再び姿を鶴へと変えると鷲の腕で垣根を掴み上げた。炎を回避することに翼を全て使った垣根にはその手を防ぐ術はない。

「こころ姿変えやがって……………！どんな体の造りしてんだよ！？」

「それは俺の台詞だ。若き殺戮者、垣根帝督！」

シウドナイはそのまま垣根を星黎殿の尖塔へと叩き付けるように投げ捨てる。尖塔に直撃する寸前に翼を使ってバランスを整えるがシウドナイはすぐに炎弾を垣根へと放っていた。

「……………！このクソ野郎がああああああああああああああああああああ
ああー！！」

炎弾を翼で叩くようにしてかき消すと垣根は吼えながらシウドナイ

へと突っ込む。シュドナイもまた、落下するように垣根へと迫る。

ゴォー!!

『楽しんでるところ申し訳ねえけど俺達も加わらせて貰っぜー!!』

「そーゆーことでこれでも食らいな!」

突然、彼らの頭上で自在法発動したかと思うと群青色の炎の槍が雨のようにシュドナイに降り注いだ。

「なっ!?!」

「群青色の炎……!!」

……

背中に炎槍を受け怯んだシュドナイはバランスを崩し、そのまま落下する。

「くたばれ！」

落下してきたシュドナイに垣根は待つてましたと言わんばかりに翼を広げそのままシュドナイに叩き付けた。不意討ちの炎槍に加え未元物質の翼による打撃をまともに食らったシュドナイはそのまま落下し、尖塔に衝突した。

「テメエ、まだこの街にいたのか？」

垣根は視線を向けずに炎槍を放った人物に問いかける。

「何よ、手助けしてやったのよ？お礼の一つでもしたらどう？」

『ヒヤハハハハハハハハハハ！口が悪いのはあの白髪のカキと同じだな！』

「大体、こんな状況になってたら近くにいるフレイムヘイズならすぐに飛んで来るわよ」

そう言ってその人物、弔詞の詠み手マージョリー・ドーは軽く笑う。

「なるほど……貴様らも来たのか弔詞の詠み手、それに蹂躞の爪牙」

『ヒヤハハハハハハ！何だその様は！これから死ぬ奴にしてはやけにシケた面してんなあ！！』

マルコシアスのばか笑いが気に入らないのか垣根は怪訝な顔をする
と、

「おい、うるせえよ。千変を始末した後に紙吹雪にされなくなかつ
たら俺の邪魔してんじゃねえよ」

『ヒヤハハハハ！能力者って奴はどいつもこいつもつれないねえ』

ゴォー！！

突然、シュドナイが垣根との間合いを詰めると凄まじい速度で殴り
かかった。

「うおっ！？」

反応が遅れた垣根にシュドナイが襲いかかる。しかしマージョリー
は即座に炎弾をシュドナイに放ち垣根に迫る拳の直撃を防ぐ。

「邪魔をするな！」

シュドナイは矛先を垣根からマージョリーへと向けると紫色の炎弾
を連射した。マージョリーはトーガを纏うと同じように炎弾を放ち
向かってくる炎弾を相殺しシュドナイとの間合いを詰めた。

シュドナイは拳を上げると標的であるマージョリーに降り下ろす。

ボウツ！

シュドナイの拳を受けたトーガは群青の炎となって爆ぜた。マージョリーの実体を捉えられなかったシュドナイがハツとして辺りを見渡すと何匹ものトーガに包囲されていた。

「……………」

トーガに混じって垣根帝督の姿も見えるがそれは1人ではなかった。トーガの分身に紛れて垣根の分身も現出していたのである。

「千変、お前に未元物質の真の実力を見せてやるぜ」

そう言うと同時にトーガの分身が次々とトーガの姿から背中から翼を生やした垣根の姿へと変わっていく。

バオ！！

垣根の分身達が一斉に鵜に突撃した。360°、全方向からの攻撃に対抗するためシュドナイは周りに紫色の炎の渦を展開すると敵の攻撃を待つ。

ボウツ！

ドオン！

垣根の分身は紫色の炎に当たると形を崩し群青色の炎となる。

「千変、この分身は弔詞の詠み手の自在法に俺の末元物質を組み込んでる。この自在法が攻撃用だと思い込んでるみてえだが……」

ゴオ！！

「……………」

突然、先ほどまで垣根の分身だった群青色の炎がまるで巨大な蛇の

ようじつねると、

「残念、大ハズレだぜ！」

群青色の炎はシュドナイの姿を捉えると彼の五体を締め上げる。

「こんな物がこの俺に通じるとでも……」

シュドナイは自分の体にまわりつく炎を振り払おうとするが、

「……！」

「気づいたみてえだな」

垣根はにやりとする。マジヨリーの自在法に垣根は未元物質の性質を組み込んだ。それは即ち『この世に存在しない』性質、それを組み込んだ自在法は通常の自在法に比べ、はるかに複雑な式を構成している。

巨大な力を持つシュドナイですら、振り払うことのできない物だった。

「前にも言ったが俺の未元物質はこの世に存在しない物質を作り出す能力。異物の混ざった未知なる力を使うことができる。つまり、この俺に常識は通用しねえんだよ……！」

動きの取れないシュドナイに垣根は暴風を起こす。能力で作り出したその風の性質は……

ドゴオン！！

シュドナイを中心に群青色の閃光がほとばしる。垣根が放った暴風は『引火しやすい物質の混ざった風』。それはマジヨリーの自在法を起爆剤に星黎殿の一部を巻き込んだ大爆発と化した。

「便利な能力ね〜」

マジヨリーが感心したように言う。垣根が振り返り彼女を見ると纏っていたトーガから出て今はグリモアの上で群青色に立ち込める爆煙を眺めている。

『あの白髪的能力者もそうだったがお前たちの力つてのは随分応用が利くんだな。大したモンだぜ』

マルコシアスの言葉に「まあな」と素っ気なく答えると、

「奴はくたばったのか？」

垣根はマジヨリーに訊ねたが彼女から聞く前に爆煙の中から答えが返ってきた。

「なかなか良い攻撃だったぞ。だが俺の命を奪うには実力が足りないがな」

立ち込める煙の中から人の姿で千変シュドナイは姿を見せた。

「チツ、ムカつく野郎だなテムエ」

「お互い様だ」

垣根は空中からシュドナイに向かって滑空すると翼を鋭利な剣のように変化させた。6枚のブレードに対しシュドナイは姿を巨大な玄武の姿へと変えると垣根の攻撃を防ぐ。

ガガガガガガガガ！

玄武の甲羅に斬りかかるが完全に攻撃を防がれる。

「貴様らがどれだけ足掻いたところでこの俺は倒せない」

マージョリーが何かに気づき垣根に叫ぶ。

「後ろ！」

その声に垣根が振り向くのと鶴の姿に変化したシュドナイの爪が垣

根を貫いたのはほぼ同時だった。

学園都市最強と最大原石

「垣根……?」

ヴィルヘルミナと先に進んでいたシャナは突然小さくなった彼の気配に振り返る。

『気配が小さくなっているな。相手は千変シユドナイ、そう簡単にはいかんだろう。それに弔詞の詠み手が近くにいる。あ奴らなら何とかなるだろう』

アラストールに諭され、再び前へと進む2人。そこへ姿を見せたのは、

「おや、結局ここまで来たのかい。だけどこの先には行かせるわけにはいかないねえ」

「逆理の裁者ベルペオル……!」

ベルペオルは2人の行く手を阻むように立つと不敵な笑みを浮かべた。

シユルルル!

ヴィルヘルミナがリボンを放つがベルペオルはそれを金色の鎖を巧みに操ることであっさりと防ぐ。

「ここは私が何とかするのであります。貴女様は早くミステスの所へ」

ヴィルヘルミナはペルソナを仮面のような形に変化させると再びベルペオルにリボンを放った。シャナはリボンの対応で隙ができたベルペオルを突破した。

「(任せたのであります)」

ちょうどその頃、一方通行と削板軍覇はシャナ達の後を追わせないために探聴求究の仕掛けた追撃装置であるブリキロボットと戦っていた。

「クソッ！どんだけいるんだこの雑魚ども！？」

悪態をつきながら辺りを見渡すと削板の姿が見えない。かなりの数のブリキロボット達がひしめいているだけである。

「あの野郎、まさかこんな奴らに遣られたなんてこたアねエよな？」

一方通行がそう呟いた時だった。

「だアアアアっしやああああああああああああああああ
！……！」

ドゴオン

突然、削板の叫び声と共に爆発音が聞こえブリキロボット達が吹き飛んだ。爆発の中心に立っているのは勿論ナンバーセブン、削板軍覇だ。

「そんなにわらわらと群がるな根性なしども！テメエらにはしつかり根性つてモンを叩き込んでやる！」

今の爆発はどんな力を使って起こしたのか分からないが本人に聞いてもどうせ「根性だ！」とか言われるに決まっているので一方通行は疑問を払拭し、ブリキロボット達へと視線を移す。

ヒュンヒュン！

ボウガンから放たれた矢が一方通行へと襲いかかるが彼の能力の前には無力である。それを全て反射して防ぐと近くにいたロボットを掴み上げると、

「テメエらをこの先に進めさせるワケにはいかねェンだよ！」

グシャア！

地面に叩きつけさらに踏みつけて破壊する。余裕の表情を浮かべている一方通行だが能力使用の残り時間は10分を切った。このままいくと廃人コースへ一直線である。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

削板もブリキロボットを薙ぎ払っていくがその表情には疲労が窺える。いくら強いとは言え彼らは能力者である前に人間なのだ。

「このままじゃ埒が明かねェ。第7位！そこをどけ、コイツらを一気に消し飛ばしてやる」

敵が減らないことにイライラしていた一方通行は先ほどのように頭上にプラズマを発生させる。削板はそれに気づくと近くにまとわりついているロボット達を蹴散らすと後ろに後退した。

「これで消え失せるこの三下どもがアアアアあああああああ
あああ!」

バオ!!

再びプラズマが放たれ辺り一帯が吹き飛んだ。この部屋そのものを消してしまいそうな破壊力を持った一撃で星黎殿の天井が崩れ落ちそうな場となった。

先ほどまでひしめき合っていたブリキロボット達は跡形もなく消し飛んでいて床は砕け、石柱は折れている。一方通行は目の前に広がるそんな光景を目にすると溜め息をつきながらチョーカーのスイッチを切った。

「はア、やっと終わったかア……」

残り時間はおよそ4分。ぎりぎりまで能力を使用して脱力感を覚える。辺りに散らばる瓦礫を押しつけて削板がこちらに近づいてきた。その顔は一方通行と同じようにげんなりとしている。

「お疲れさん」

「あア」

「これからどうする？2人を追うか？」

「だが俺は能力をあと4分ほどしか使えねエ」

「根性のねえ台詞を吐いてんじゃねえ」

その時、一方通行の携帯が鳴った。携帯を取り出し画面を見るとディスプレイに『メルヘン』と表示されている。先ほどシユドナイに突っ込んで行った垣根の姿を思い浮かべながら携帯を耳に添える。

「どオした？そっちはもオ片付いたのかア？」

『もしもし？アンタは一方通行で合ってる？』

垣根とは違う声に首を傾げる。一方通行はどこかで聞いたことのある声に訊ねた。

「誰だオマエは？」

『何よ、私の声を忘れたの？』

『ヒヤハハハハハハハハ！覚えられねえ程、テメエの存在感は薄いつてことだろ？……痛えっ！？』

電話越しに聞こえてくる声で一方通行は電話の相手を判断したが同時に疑問を持つ。

「何でテメエが第2位の携帯を持ってんだ？」

『それよりアンタ今からこっちに来られない？アンタの仲間が千変に遣られたのよ』

「第2位が遣られただと!？」

動揺して一方通行は驚きの声を上げた。近くにいた削板も一方通行の顔を見る。

『今、私の自在法で応急措置はしてるけどまだ千変が近くにいます。だからアンタが…ってちょっと!何すんのよ!』

何やら向こうで音がしたと思うと続いて垣根の音がした。『勝手なことしてんじゃねえぞ!』

プツッ……

そこで電話は切れた。電話を切ったのは垣根だろう。一方通行は携帯をポケットにしまう。

「垣根がどうした?」

削板が訊ねる。一方通行はやれやれと言いたげな表情をすると、

「アイツは大丈夫だ。何の心配もいらねエよ」

そう言っただけと溜め息をついた。

「何やってんの。そんな状態で千変と戦うつもり？」

『ヒヤハハハハハハハハハハ！度胸は買うが、兄ちゃんそりゃあ無謀だぜ？』

先ほど、シュドナイの一撃を食らった垣根は腹部に重傷を負った。マージョリーが自在法を駆使してシュドナイから逃れ、倒れていた垣根を拾い治療したが普通に考えて戦える傷ではない。

「これだけ傷が塞がれば戦える、充分だ」

垣根は立ち上がり傷口を押さえる。彼らがいるのは星黎殿の上半分に連なる尖塔の一つだ。外ではシュドナイが彼らを探している。普通なら気配で場所を察知されてしまうがマージョリーが自在法でダミーを設置しているため時間を稼げているのである。

「まったく、せっかく命拾ったのよ？みすみす捨てに行く必要なんてないんじゃない？」

呆れるマージョリー、ばか笑いするマルコシアスを見無視して垣根はよろよろと歩き出す。

「うるせえよ」

ぼそりとそう一言呟くとホスト風の少年は鶴の姿をした紅世の王の待つ戦場へと身を投じた。

一人で奥へ向かっていたシャナが辿り着いた先に見えたのは巨大な機械だった。どんな原理で動いているのかとか、これが存在の泉の核になっているとかそんなことはどうでもよかった。

ここに悠二がいる、ただそれだけだった。

「悠二……」

シャナは警殿遮那を握りしめると目の前の機械へと斬りかかった。

自身の存在

「悠二！」

シヤナは謎の機械に斬りかかるが自在法がかかっているのか傷一つつかない。

「くっっ……っおおおおおおおおおおおおおっ！！！」

それでも諦めずに大太刀を振るい再び斬りかかる。

ギイン！！

刃は存在の力の壁に防がれた。気づくとシヤナの目の前に明るすぎる水色の瞳の少女が立っていた。

『頂の座へカテーか、奴もまたバル・マスケの中心に存在する紅世の王の一人だ』

「コイツが誰であろうと関係ない。コイツを倒して悠二を助け出す！」

シヤナは大太刀を握りしめ、炎を纏わせ斬りかかる。しかし、先ほどと同様、存在の力の壁に阻まれる。

『おそらく奴はミステス坂井悠二と器を合わせることで膨大な存在の力を操っているのだろう』

「ここまで来た……絶対に助け出す！」

自分をここに進ませるために戦っている者達がいる。垣根、一方通行、削板、ヴィルヘルミナ……彼らは今も戦っている。彼女がこの戦いを終わらせることを信じて血を流している。そんな彼らの想いがシャナの中にあつた。

「……シャナ？」

悠二は自分の名を呼ぶ少女の顔を思い浮かべる。

「これがミステスの記憶……私を満たしていく……」

悠二の記憶が器を合わせたヘカテーへと流れ込んでいく。ヘカテーは興味深そうな表情のまま呟いた。

「貴方が私を満たしていく……」

そんなヘカテーを見て、悠二は言った。

「僕はシャナと出会って自分の存在について考えてきた。僕はただのトーチなのか、坂井悠二なのか。でも、シャナと会った頃の僕は結局、ただのトーチだったんだ」

「さて、そろそろヘカターの所へ行くとするかねえ」

目の前に倒れているヴィルヘルミナの姿を見下ろしながらベルペオルは言った。

「待てよ、それならちィつと俺らと遊んでいけよ」

ベルペオルが振り返るとそこには杖をついた一方通行と削板軍覇の姿があった。

「炎髪の邪魔をさせるワケにはいかねェんだよ。悪イがここでオマエを叩き潰す」

そう言うと一方通行は先ほどブリキロボット達が使用していたボウガンを構え、ベルペオルに放つ。

残りのバッテリーがなくなってしまうえば電極を取り換えるまで動くことはおろか、話すこともままならない。そのため、極力能力を使用せずに戦うことにしたのである。

ヒュン！

「こんな物が私に通用するとも思ってるのかい？」

ベルペオルは余裕の表情を浮かべたまま矢を避けると手に握っている鎖を振り回し一方通行へと投げつける。

ドオ！

一方通行は石柱の影に隠れるがベルペオルの鎖は一撃でその石柱を砕いた。かろうじて避けた一方通行は別の石柱に身を隠す。

「チツ、能力が使えねエってのは厄介だな。やっぱこんなモンじゃア通用しねエか」

能力の使用の制限とあまり大した攻撃能力の持たないボウガンに愚痴をこぼすが今、戦える武器はこれしかない。

「大丈夫かアンタ？」

一方通行がベルペオルと戦っているうちに削板が倒れているヴィルヘルミナに駆け寄る。

「救援、感謝するのであります」

ヴィルヘルミナはゆっくりと体を起こすと一方通行に敵意を向けているベルペオルを見る。

「ここは俺たちに任せておけ」

そう言うと削板はベルペオルに向かって走り出す。彼に気づいたベルペオルは先ほど一方通行に放ったように手に持っている鎖を振り回し、削板に攻撃する。削板はそれをかわすと、

「うおおおおおおおおお！すごいパンチ！」

ゴォ！

削板の放った一撃はベルペオルを捉えた。ベルペオルの体は数メートル先へと宙を舞うが空中でうまくバランスを整え着地する。

「まったく、フレイムヘイズといい超能力者といい、どうしてアンタ達は私達の試みを潰そうとするのかねえ」

「そいつは根性の台詞だな。アンタにはしっかりと根性を叩き込んでやらねえといけねえな」

根性の男、削板軍覇は再びベルペオルへと攻撃を放った。

「すごいパンチ！」

ゴォ！

星黎殿の一方通行達とは別の場所で学園都市第2位の超能力者垣根帝督、そして戦闘狂の異名を持つフレイムヘイズ、弔詞の詠み手マージョリー・ドーは千変シユドナイと激闘を繰り広げていた。

「もう限界だろう哀れな能力者よ。大人しく楽になればいいものを」

「はぁ……うるせえよクソ野郎……」

垣根の身体は限界に近かった。シユドナイの爪に腹部を貫かれ、マージョリーの自在法で出血を止めはしたものの塞いだ傷は開きかかっている。

「ここでテメエを殺すことに全てを注ぐ。覚悟しろ！」

バォ！！

物じゃねえだろ？もつと全力でかかってこいよ！」

ゴバア！！

垣根の姿にマージョリーは啞然とする。先ほどまで歩くのもやっとだった少年とは思えないほどの雰囲気を感じ取っていたからだ。

「ねえ、マルコ」

『ああ、戦闘狂の異名はアイツにバトンタッチしなきゃいけないみたいだな』

「あの頃の僕はただのトーチでただのミスレスだった。でも今は違う。僕はミスレスであり坂井悠二でもある。僕は僕だ、君は一体何だ？」

悠二の言葉に満足気な表情だったヘカテーの表情に初めて陰りが入る。

「わ、私は……」

「ここまで自分がトーチなのか、それとも坂井悠二なのか悩んだのは僕自身だ。君じゃない、僕なんだ」

「あ、ああ……」

ヘカテーは明らかに動揺していた。その水色の瞳には戸惑いが映っている。

「貴方は私の物……絶対に放さない」

ヘカテーは必死に言うがその声は小さく、そして震えていた。

「ああ、ああ。私を満たしていた物が……消えていく……」

その言葉に悠二はきっぱりと断言した。

「違う、他人の想いで自分を満たすことなんてできない。つまり君は最初から空っぽなんだ」

パキッ……

シヤナの攻撃を防いでいた存在の力の壁にヒビが入る。それを見たシヤナは贅殿遮那に炎を纏わせると思いつきり刀を振り下ろした。

「やああああああああああっ!!」

パキーン!

壁が砕けるのを見たシヤナは夜笠からここに来る前に啓作、栄太両名から預かった吸血鬼フルトザオガーを取り出すと悠二のいる機械へと投じた。

謎の装置は音を立てて壊れ、中から悠二が出てきた。悠二がヘカテーに視線を移すとそこには戸惑いの表情を浮かべた彼女の姿があった。

「悠二……」

「シヤナ……」

シヤナは笑顔で悠二に駆け寄る。悠二もシヤナを見ると優しく微笑み返す。

「あああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああ!!!!!!!!!」

突然、ヘカテーが頭を抱え絶叫した。それに伴うかのように彼女から膨大な量の存在の力が溢れ出す。

「どっとなってるの?」

『頂の座が自身に溜め込んだ存在の力を吐き出しているのだ』

ヘカテーの足下から星黎殿が崩れていくのを見てアラストールは叫ぶ。

『このままでは御崎市が消滅するやもしれぬ!』

「何とかしないと……」

「一つだけ方法がある」

シヤナははつきりと言った。それを聞いた悠二は彼女の顔を見る。

「天罰神アラストールの顕現、 『天破壊砕』」

「どっということ?」

「アラストールをこっちの世界に呼び出すの」

『天罰神としての我の力を振るえば確実に止められる。しかし、その際に器であるフレイムヘイズは死ぬ』

そう言っただけアラストールは以前契約していた先代炎髪灼眼の討ち手マテイルダ・サントメールを思い浮かべた。彼の言葉に絶句する悠二を見てシヤナは決心したように言った。

「悠二、これは炎髪灼眼の討ち手の宿命。アラストールと契約した

時から覚悟はしていたことなの」

『坂井悠二よ、貴様を逃がす時間はない』

「構わないよ、僕はシャナと進むって決めたんだから」

そう言って悠二はシャナの手を握った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4096w/>

とある2人と炎髪灼眼

2011年12月3日00時46分発行